

松木田

3

松木田遺跡第4次調査1~3・7・8区の報告

長峰地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 1

松木田 3

–松木田遺跡第4次調査1~3・7・8区の報告–

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1204集

二〇一三

2013

福岡市教育委員会

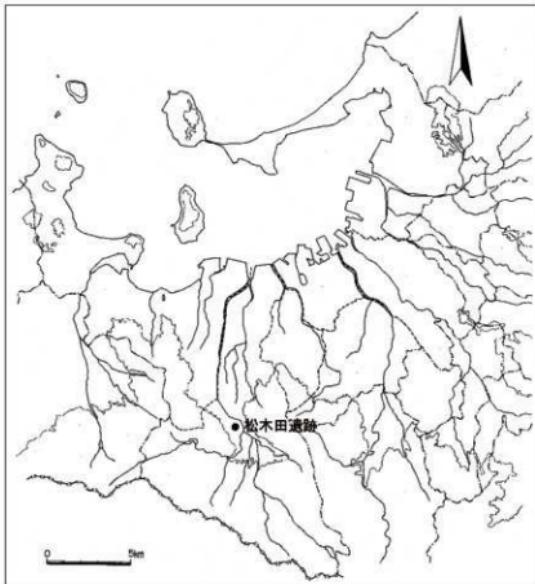
福岡市教育委員会

長峰地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 1

まつ き だ

松木田 3

-松木田遺跡第4次調査1~3・7・8区の報告-



遺跡名号 MKD-4
調査番号 0905

2013

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回、長峰地区土地改良事業を行うに当たり、松木田遺跡・内野熊山遺跡・岸田遺跡・長峰谷口B遺跡の発掘調査をおこない、多くの貴重な成果をあげることができました。

本書は松木田遺跡の報告となります、今年度より3ヶ年間の計画で本事業にかかる調査報告書を作成することとしております。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、福岡市長峰土地改良区の皆様をはじめとした地域の皆様、そして関係各位のご理解を賜り、多大なるご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成25年3月22日
福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例　言

- 本書は福岡市教育委員会が、長峰地区土地改良事業に伴い、平成21～23年度に早良区早良地内において実施した発掘調査のうち、松木田遺跡第4次調査1～3区・7・8区の発掘調査報告書である。
- 遺構の実測は長家伸、加藤隆也、名取さつき、坂口剛毅が行った。
- 遺物の実測は長家、加藤、米倉秀紀、撫養久美子が行った。
- 製図は長家、加藤、米倉、撫養が行った。
- 写真は長家、加藤が撮影した。
- 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から 6° 西偏し、真北から $6^{\circ} 18'$ 西偏する。なお座標は世界測地系を使用している。
- 本書で用いる遺構番号はには遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物(SB)、竪穴住居跡(SC)、溝(SD)、土坑・鍛冶関連遺構(SK)、包含層(SX)、ピット(SP)である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
- 本書の執筆はII-2-2) 及びII-3-2) のうち出土遺物の項とII-7を米倉、II-5・6を加藤が行い、その他の執筆と編集は長家が行った。

松木田遺跡第4次調査

遺跡調査番号	0905	遺　跡　略　号	MKD-4
所 在 地	早良区早良3・4丁目地内	分布地図番号	S16-0789
開 発 総 面 積	19ha	調 査 面 積	5,626m ²
調 査 期 間	平成21年4月15日～平成22年10月17日	事前審査番号	19-1-38

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	2
3	各調査地点概要	2
4	調査地点の立地と環境	3
II	松木田遺跡第4次調査の記録	9
1	既往の調査と第4次調査の概要	9
2	1区の調査	9
1)	概要	9
2)	縄文時代の調査	10
3)	弥生時代以降の調査	20
(1)	掘立柱建物	20
(2)	堅穴住居跡	23
(3)	土坑	36
(4)	鍛冶関連遺構	41
(5)	溝	41
(6)	包含層	42
(7)	その他の出土遺物	53
(8)	小結	53
3	2区の調査	54
1)	概要	54
2)	縄文時代の調査	54
3)	弥生時代以降の調査	60
(1)	掘立柱建物	60
(2)	堅穴住居跡	61
(3)	溝	62
(4)	土坑	62
(5)	鍛冶関連遺構	64
(6)	焼土坑	67
(7)	包含層	67
(8)	その他の遺物	70
(9)	小結	70
4	3区の調査	70
1)	概要	70
2)	遺構と遺物	70
5	7区の調査	72
1)	概要	72
2)	基本層序	72
3)	遺構と遺物	72
6	8区の調査	74
1)	概要	74
2)	基本層序	74
3)	遺構と遺物	74
7	縄文時代草創期～早期の遺構と遺物	76

挿図目次

第 1図 調査区位置図(1/75,000)	4
第 2図 事業地内調査区位置図1(1/3,000)	折込1
第 3図 事業地内調査区位置図2(1/3,000)	折込2
第 4図 1区全体図(1/200)	折込3
第 5図 1区遺構配置図及び土層図(1/500,1/80)	11
第 6図 SX054実測図及び土層図(1/60)	12
第 7図 SX055実測図及び土層図(1/100,1/60)	13
第 8図 SX055内遺物番号1出土状況(1/10)	14
第 9図 SX055出土遺物実測図1(1/3)	14
第10図 SX055出土遺物実測図2(1/1)	16
第11図 SX055出土遺物実測図3(1/1)	17
第12図 SB021及び出土遺物実測図(1/60,1/3)	20
第13図 SB042実測図(1/80)	折込4
第14図 SB042出土遺物実測図(1/3)	21
第15図 SC003及び出土遺物実測図1(1/60,1/3)	22
第16図 SC003出土遺物実測図2(1/3)	23
第17図 SC004・005・011及び出土遺物実測図(1/60,1/1,1/3)	24
第18図 SC013及び出土遺物実測図(1/60,1/1,1/3)	25
第19図 SC014-1・2及び出土遺物実測図(1/60,1/3,1/4)	26
第20図 SC018・023及び出土遺物実測図(1/60,1/3)	28
第21図 SC019・025及び出土遺物実測図(1/60,1/3)	29
第22図 SC027実測図(1/60)	31
第23図 SC027出土遺物実測図(1/1,1/3)	32
第24図 SC035及び出土遺物実測図(1/60,1/1,1/3,1/4)	33
第25図 SC036・044及び出土遺物実測図(1/60,1/3)	34
第26図 SK007・008・009実測図(1/30)	35
第27図 SK020・024・026及び出土遺物実測図(1/30,1/3)	36
第28図 SK043・045及び出土遺物実測図(1/30,1/1,1/3)	38
第29図 SK048・049及び出土遺物実測図(1/30,1/40,1/3)	39
第30図 SK050・052及び出土遺物実測図(1/30,1/40,1/2,1/3)	40
第31図 SK001及び出土遺物実測図(1/60,1/10,1/3)	42
第32図 SD006土層及び出土遺物実測図(1/30,1/3)	43
第33図 SX002土層及び出土遺物実測図(1/60,1/3)	44
第34図 SX010土層及び出土遺物実測図1(1/40,1/2,1/3)	45
第35図 SX010出土遺物実測図2(1/3)	46
第36図 SX029断面及び出土遺物実測図(1/40,1/2,1/3)	47
第37図 SX031実測図(1/30)	48
第38図 SX031出土遺物実測図1(1/4)	49
第39図 SX031出土遺物実測図2(1/4)	50
第40図 SX031出土遺物実測図3(1/2,1/3,1/4)	51
第41図 1区出土その他の遺物実測図(1/1,1/3)	52
第42図 2~4次調査遺構配置図(1/1,000)	53
第43図 2区全体図及び土層図(1/200,1/40)	折込5
第44図 SK077実測図(1/60)	55
第45図 SK077出土遺物実測図1(1/1)	56

第46図 SK077出土遺物実測図2(1／1)	57
第47図 SK077出土遺物実測図3(1／1)	58
第48図 SB083・SC065及び出土遺物実測図(1／60, 1／2, 1／3)	60
第49図 SD061・062及び出土遺物実測図(1／50, 1／3)	61
第50図 SK066・068・069及び出土遺物実測図(1／30, 1／50, 1／3)	63
第51図 SK070及び出土遺物実測図(1／30, 1／3)	64
第52図 SK073～075及び出土遺物実測図(1／50, 1／20, 1／3)	65
第53図 SK079～081及び出土遺物実測図(1／20, 1／3)	66
第54図 SX072土層及び出土遺物実測図(1／40, 1／3)	68
第55図 2区出土その他の出土遺物実測図(1／1, 1／2, 1／3)	69
第56図 3区全体図及び土層図(1／200, 1／40)	折込6
第57図 3区出土遺物実測図(1／3)	71
第58図 7区出土遺物実測図(1／3)	72
第59図 7区全体図(1／400)	73
第60図 8区全体図(1／400)	75

写真目次

写真 1 調査区付近より北側を望む(平成24年4月撮影)	6
写真 2 調査区付近より南側を望む(平成21年5月撮影)	6
写真 3 土地改良事業前(平成21年5月撮影)	7
写真 4 土地改良事業後(平成24年4月撮影)	7
写真 5 岸田遺跡第1次調査1～3区全景(南から)	8
写真 6 岸田遺跡第1次調査4区全景(上空から)	8
写真 7 岸田遺跡第1次調査出土状況	8
写真 8 内野熊山遺跡第1次調査1区全景(東から)	8
写真 9 内野熊山遺跡第1次調査2区調査状況(南から)	8
写真10 長峰谷口B遺跡全景(東から)	8
写真11 1区全景(上空から)	77
写真12 1区全景(北から)	77
写真13 1区南端全景(上空から)	78
写真14 1区北端全景(上空から)	78
写真15 1区全景(南から)	78
写真16 1区南端土層(北から)	78
写真17 SX054(東から)	78
写真18 SX054(西から)	78
写真19 SX054東半出土状況(西から)	79
写真20 SX054西半出土状況(東から)	79
写真21 SX054東端土層(南から)	79
写真22 SX054東端土層延長部分(東から)	79
写真23 SX055調査状況(北から)	79
写真24 SX055調査最終状況(東から)	79
写真25 SX055土層1	80
写真26 SX055土層1北半	80
写真27 SX055土層2	80

写真28 SX055土層5	80
写真29 SX055土層4	80
写真30 SX055土層3	80
写真31 SX055土層6	81
写真32 SX055土層1サンプル採集	81
写真33 SX055遺物番号1出土状況(東から)	81
写真34 SX055遺物番号1出土状況(東から)	81
写真35 SX055遺物番号26出土状況(南から)	81
写真36 SX055遺物番号34出土状況(東から)	81
写真37 SB021(北から)	82
写真38 SB042(上空から)	82
写真39 SB042 P1土層	82
写真40 SB042 P2土層	82
写真41 SB042 P3土層	82
写真42 SB042 P5土層	82
写真43 SB042 P6土層	83
写真44 SB042 P8土層	83
写真45 SB042 P9土層	83
写真46 SB042 P10土層	83
写真47 SB042 P11土層	83
写真48 SB042 P12土層	83
写真49 SC003(西から)	84
写真50 SC004(東から)	84
写真51 SC005(東から)	84
写真52 SC011(東から)	84
写真53 SC013(西から)	84
写真54 SC014-1(西から)	84
写真55 SC014-2(北から)	85
写真56 SC018-023(南から)	85
写真57 SC018貼り床除去後・SK052(西から)	85
写真58 SC025(南から)	85
写真59 SC025土層	85
写真60 SC027(上空から)	85
写真61 SC027(南から)	86
写真62 SC035(北から)	86
写真63 SC035 P8(西から)	86
写真64 SC036(南から)	86
写真65 SC036土層	86
写真66 SC044(南から)	86
写真67 SK007(西から)	87
写真68 SK008-009(東から)	87
写真69 SK020(西から)	87
写真70 SK024(北から)	87
写真71 SK026(南西から)	87
写真72 SK043(東から)	87

写真 73 SK043土層	88
写真 74 SK045(北から)	88
写真 75 SK045土層	88
写真 76 SK048(東から)	88
写真 77 SK049(南から)	88
写真 78 SK050(北から)	88
写真 79 SK001検出状況(北東から)	89
写真 80 SK001周辺メッシュ掘り下げ状況(北東から)	89
写真 81 SD006土層	89
写真 82 SD006(東から)	89
写真 83 SX002土層1	89
写真 84 SX002土層2	89
写真 85 SX010土層	90
写真 86 SX031(西から)	90
写真 87 SX031(南東から)	90
写真 88 SX031土層	90
写真 89 SP101出土状況(北から)	90
写真 90 SP367出土状況(北から)	90
写真 91 1区出土遺物1	91
写真 92 1区出土遺物2	92
写真 93 1区出土遺物3	93
写真 94 1区出土遺物4	94
写真 95 2区遠景(東から)	95
写真 96 2区全景(上空から)	95
写真 97 2区全景(北から)	96
写真 98 2区調査区内土層	96
写真 99 SK077調査開始状況(上空から)	96
写真100 SK077調査状況(南から)	96
写真101 遺物番号336出土状況(東から)	96
写真102 遺物番号341出土状況(東から)	96
写真103 SK063 2段目掘り下げ状況(東から)	97
写真104 SK077土層1	97
写真105 SK077土層2	97
写真106 SK077(西から)	97
写真107 SK077(南東から)	97
写真108 SK077周辺調査状況(北西から)	97
写真109 SB083(北から)	98
写真110 SC065(西から)	98
写真111 SD061・062(西から)	98
写真112 SK068・069土層	98
写真113 SK068・069(南から)	98
写真114 SK068遺物番号396出土状況(北西から)	98
写真115 SK066(北から)	99
写真116 SK070(南から)	99
写真117 SK073～075検出状況(北から)	99

写真118 SK073(北から)	99
写真119 SK073～075(西から)	99
写真120 SK073周辺メッシュ掘り下げ状況(西から)	99
写真121 SK073東西土層西側	100
写真122 SK073東西土層東側	100
写真123 SK073南北土層	100
写真124 SK073完掘後(北から)	100
写真125 SK074(北から)	100
写真126 SK074土層	100
写真127 SK075(南から)	101
写真128 SK075土層	101
写真129 SK078(北から)	101
写真130 SK078土層	101
写真131 SK079(南から)	101
写真132 SK079土層	101
写真133 SK080(南から)	102
写真134 SK080土層	102
写真135 SK081(北から)	102
写真136 SK081土層	102
写真137 SX072土層1	102
写真138 SX072完掘後(南から)	102
写真139 2区出土遺物	103
写真140 3区全景(北東から)	104
写真141 3区全景(北から)	104
写真142 3区全景(上空から)	104
写真143 3区南半全景(上空から)	104
写真144 3区南端部(南西から)	104
写真145 SD085土層	104
写真146 7区全景(北から)	105
写真147 7区東側掘削状況(北から)	105
写真148 7区西側掘削状況(北東から)	105
写真149 7区遺構検出断削状況1(北西から)	105
写真150 7区遺構検出断削状況2(北西から)	105
写真151 8区南側調査区掘削状況(南から)	106
写真152 8区北側調査区掘削状況(北西から)	106
写真153 8区北側調査区掘削状況(南から)	106
写真154 8区遺構検出面断削状況(北西から)	106
写真155 8区東壁土層堆積状況(西から)	106

表目次

表1 発掘調査地点一覧	2
表2 1区出土土器一覧	19
表3 1区出土石器一覧表	19
表4 2区出土石器一覧	59

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成19年7月23日付け、農計第387号により、福岡市農林水産局農林部農地計画課長より埋蔵文化財第1課長宛に、早良区早良2～5丁目地内における、長峰地区基盤整備促進事業にかかる「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」が提出された（事前審査番号19-1-38）。当該事業は平成21年度～23年度の3ヵ年にわたって、長峰地区的耕地19.0haにおいて圃場整備事業を行うものである。計画地域内には周知の埋蔵文化財泡蔵地として、松木田遺跡・岸田遺跡・下兵庫遺跡・内野熊山遺跡が存在しており、書類審査を行った埋蔵文化財第1課では、計画地域全体を対象として試掘調査が必要な旨を回答した（平成19年7月24日、教理1第1260号）。この後埋蔵文化財第1課、農地計画課および、施工主体である長峰土地改良区（樋口重剛理事長）によって協議が重ねられた。その結果平成19年8月7日付で、長峰土地改良区理事長名で教育長山田裕嗣あてに埋蔵文化財予備調査承諾書が提出された。これを受けて埋蔵文化財第1課では平成19年8月28日～平成20年4月22日の期間で全面を対象とした試掘調査を行った。試掘調査は地権者と協議の上、耕作の行われていない田面から随時行うこととし、一部の調査不能であった田面を除いて、計画地全体に設定した。試掘トレンチの総数は321本であるが、調査後に再度耕作をするため、各トレンチは幅1m、長さ2～5mの小規模なものとなっている。この試掘調査の結果、計画地の北東側は室見川の氾濫原となり、遺構は確認されなかつたが、西～南側の段丘面上を中心として濃密な遺構群が展開していることを確認した。この結果を平成20年6月4日付け、教理1第633号で農地計画課長宛に「埋蔵文化財の事前調査について（回答）」で回答した。この回答に伴う協議で、事業実施に当たっては、工事によって埋蔵文化財の破壊が避けられない地区および施工後の保護盛土が20cm以下もしくは2m以上となる地区については発掘調査を行い、記録保存を図る必要がある旨を伝え、試掘調査結果と事業計画のすりあわせを行い、発掘調査が必要な地区と現状保存が可能な地区を明確化する作業を行こととした。この結果、平成21年度～23年度の施工計画にあわせ、各年度4月から調査対象地について発掘調査を行うこととし、当該年度の調査地点が終了後は、次年度の要調査地点についても、地権者の了解が得られる田面について継続して発掘調査を行うこととした。また、調査中においても計画高の見直しを行い、積極的に遺構の保存を図ることとした。なお、1地点で遺構ありとしていた下兵庫遺跡においては、本調査前の再試掘の結果、遺構がないことを確認している。

以上の協議を行ったうえで、平成21（2009）年4月15日～平成22（2010）年10月7日の期間で松木田（まつきた）遺跡第4次調査（遺跡略号：MKD-4、調査番号：0905）、平成21（2009）年10月27日～平成22（2010）年10月19日で岸田（きしだ）遺跡第1次調査（遺跡略号：KID-1、調査番号：0930）、平成22（2010）年9月16日～平成23（2011）年1月25日で内野熊山（うちのくまやま）遺跡第1次調査（遺跡略号UKY-1、調査番号：1025）、平成23（2011）年7月4日～平成23（2011）年8月19日で長峰谷口（ながみねたにぐち）B遺跡第1次調査（遺跡略号：NGB-1、調査番号：1111）の調査を行った。なお、調査に当たっての測量作業は、事業に伴い設置された4級基準点をもとに実行った。整理作業は調査と並行して行い、調査報告書は平成24年度から3ヵ年で刊行予定である。

発掘調査に当たっては長峰土地改良区の地権者の皆様方には、多大なるご理解とご協力をいただき、土地の借用をはじめとして有形・無形のご援助を賜りました。また、地元住民の皆様、設計・施工関係者の方々にも、多大なご協力をいただきました。ここで、深甚の謝意を表します。

2 調査体制

事業主体 長峰土地改良区

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括 埋蔵文化財第1課長 濱石哲也

埋蔵文化財第2課長 田中壽夫

事前審査 埋蔵文化財第1課 事前審査係 吉留秀敏・星野恵美

調査庶務 文化財管理課管理係（平成21年度）／埋蔵文化財第1課管理係（平成22・23年度）

古賀とも子

調査担当 埋蔵文化財第2課 長家伸・加藤隆也・大塚紀宜・阿部泰之・松尾奈緒子

なお、文化財部は組織改変のため、平成24年4月1日付で、教育委員会から経済観光文化局に移管した。

3 各調査地点概要

発掘調査は施工計画にあわせて平成21～23年度にわたって行った。なお、松木田遺跡第4次調査1区については上面造構面のみ調査を行い、下層の绳文時代包含層は現状保存を図っている。

調査名 (遺跡名・調査番号)	期間 (調査面積・調査箇所)	区	調査面積 (m ²)	コントラ数	概要	報告書提出年月
松木田遺跡第4次 (MKD-4-0906)	平成21年4月15日～ 平成22年10月7日 (5,628m ² ・356箇)	1区	1,311	70	縄文時代中期後半～士師の包含層を確認した。そのほか生糞時代中葉～中後期の土器、骨器を検出。分水帯付近から唐土～古墳時代後期の漆器、鏡、瓦片等。土坑墓等による生糞層が主体を占める。 遺物は上面の造構面のままでし、下層の縄文時代包含層については現状保存としている。	平成24年度 (1204集)
		2区	1,190	35	縄文時代中期後半～士師の包含層を確認している。中でも特に中期後半から後期の土器、漆器等が確認されている。	平成24年度 (1204集)
		3区	365	5	松木田遺跡は繩文後期～古墳時代後期の遺構・遺物を確認している。中でも特に中期後半から後期の土器、漆器等が確認されている。	平成24年度 (1204集)
		4区	94	20	遺構を有する自然地盤の面積である。縄文ではピッカを確認した。遺跡内からは古墳時代から平安・鎌倉時代にいたる遺物が出土している。漆器がまとまっており、鏡、漆器、磨治部が確認している。周辺の露蓋で陰合が確認されているが、該遺跡の可能性も考えられる。	平成25年度
		5区	558	180	遺構を有する自然地盤の面積である。遺跡ではピッカを確認した。古墳時代から平安・鎌倉時代にいたる遺物が出土している。漆器内からは古墳時代後期の土器が検出された。	平成25年度
		6区	205	52	内側部分：力耕穴付近で2箇、古代の遺物が4点。土岐島・茶を確認した。窓穴付近では手取・伊勢など、2箇・ベッキ・片口漆器等を検出した。漆器部分は古墳時代後期の土器が検出された。露構の土器からは漆器等が出土した。土坑墓からは漆器等として漆器土器が出土した。	平成25年度
		7区	1,220	2	遺道と側面接続の表面切り部分で対象に選定した。遺物は中央火葬場では北側付近に埋められた。その周辺ではヒット状灰燼などを検出し、鏡、灰燼付近から中世までの土器や漆器が出土した。	平成24年度 (1204集)
		8区	680	1	8区は遺跡地の東側で洗んだ段落の面積で、8区を確定した。7区同様、世界遺産登録の根拠となる遺構を確認するため、遺跡の土器や漆器等にかけたの土器や漆器が出土した。	平成24年度 (1204集)
岸田遺跡第1次 (KID-1-0930)	平成21年10月27日～ 平成22年10月19日 (5,775m ² ・429箇)	1区	1,174	96	牟牛町岸田遺跡：古墳時代後期を中心に、寄り附いた古墳で古墳化段階での出土遺物を多量検出した。しかし、近年新規に出土する漆器類等に近づく時期の遺物は少なく、遺物の中心は別地点で置いているようである。窓穴付近出土十箇以上は、牟牛町や野の影響がみられる土器である。	平成26年度
		2区	405	22	1区の北側に位置する。生糞時代以来を中心とした生活遺物を確認している。1区で見つけた的是方形状窓穴付近（約X1.15m）は1基確認してある。	平成26年度
		3区	628	10	牟牛町岸田の北側にある。牟牛町代をゆきすすむ世界中の土器と漆器等とともに、古墳時代初期～中期の遺物が確認される。漆器の中心は別地点で置いているようである。	平成26年度
		4区	2,761	283	1～3区同様の北側にある。牟牛町代をゆきすすむ世界中の土器と漆器等とともに、古墳時代初期～中期の遺物が確認される。漆器の中心は別地点で置いている。5基の遺跡遺構からは漆器・鏡等・嵌身具・鉢等の漆器等が出土する。	平成26年度
		5区	807	18	1区の南側に位置する。2区の遺構で金函を行った。1区倒壊生糞代中間～古墳時代を中心とした生活遺物を確認している。	平成26年度
内野熊山遺跡第1次 (UKY-1-1026)	平成23年9月16日～ 平成23年10月25日 (3,149m ² ・14箇)	1区	1,008	4	遺物の含蓄量貯下にて、不定形ののみを割出した。遺物は、遺構底面のためグリッドを設け、各グリッド単位での解剖を行った。縄文時代の土器、石器等が出土した。	平成24年度 (1205集)
		2区	1,442	6	表土削除後、中井の供用道路を削削し、その後、グリッドを設置して解剖を行った。1区同様、縄文時代の土器、石器等が出土した。	平成24年度 (1205集)
		3区	193	2	遺構底面の土器の中心に位置する。既往の方法で解剖してある。遺物は多く出土しない。既往の方法で解剖してある。既往の方法で解剖しており、1区同様には縄文時代遺物が出土する。	平成24年度 (1205集)
		4区	506	2	遺構底面の北側に位置する。東西方向の水路が当地である。露蓋区を2つに分けたところ、1区跡付近、グリッドを設置し解剖を行ったが、遺物の範囲が複数に跨り込まれた。	平成24年度 (1205集)
長崎市口B遺跡第1次 (NGB-1-1111)	平成23年7月4日～ 平成23年8月19日 (1,584m ² ・2箇)		1,984	2	古代の大字および山字標を検出。大字はL字形に断面するものがあり、区画溝の可能性がある。	平成24年度 (1206集)

表1 発掘調査地点一覧

4 調査地点の立地と環境

今回調査が行われた早良区早良は扇形に開いた早良(さわら)平野の付け根の部分に位置する。早良平野は福岡市西区及び早良区を北流する室見川流域の扇状地性の河成平野部を主体とし、平野は東を油山から派生する低丘陵、西を背振山系より派生する長垂山塊によって画され、扇形状の一つにまとまった地理的空間を形成している。また博多湾に面する河口部分には砂丘と、その後背部分に湿地帯が形成され、平野内には阿蘇山噴火火砕流起源の洪積丘陵が点在している。

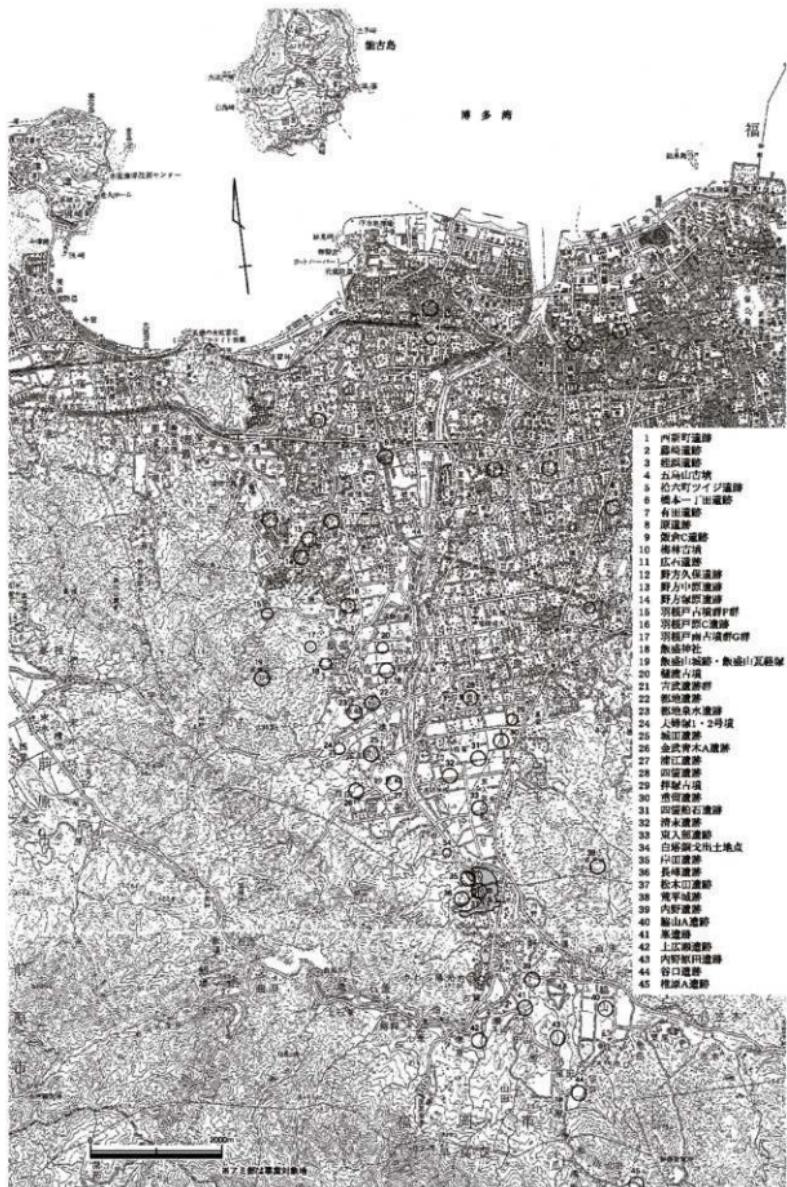
早良平野内では旧石器時代以降各時代の遺構・遺物が確認されており、概要を簡単にたどりたい。

旧石器時代の遺跡は洪積台地上及び山麓扇状地上に分布している。有田遺跡ではナイフ形石器前段階から細石器段階の石器、脇山A遺跡からは細石器が出土している。その他吉武遺跡群・羽根戸原C遺跡・浦江遺跡でも遺物が認められる。

縄文時代の遺跡は前段階の遺跡に加え標高の高い山間部にも広がる。松木田遺跡では撫文土器期の集石が見られ、良好な遺物包含層を確認している。背振山系にかかる板屋遺跡・椎原遺跡、平野部の広石遺跡からは早期～前期の土器・石器類が出土している。その後、後晩期には遺構・遺物が増加し、四箇遺跡では後期後半の湿地層からオオムギ等の栽培種子が確認され、栽培活動が行われた可能性が高いことが推定されている。また橋本一町田遺跡からは晩期後半の遺物が多量に出土し、水田関連遺構も確認されている。

弥生時代になると平野各所の砂丘・洪積丘陵・沖積微高地・低丘陵上に遺跡群が展開し、安定した集落の形成が見られるようになる。砂丘上では西新・藤崎・姪浜遺跡が知られ、いずれの遺跡においても甕棺墓を中心とした大規模な埋葬遺構群が形成されている。藤崎遺跡群では板付IIb～金海式期の区画墓・墳丘墓の可能性を有する埋葬遺構群が見られる。姪浜遺跡では弥生時代中期以降の甕棺墓・生活遺構があり、朝鮮半島産の無文土器、漢式三角錐、貝輪・貝玉他の対外的交流を示す遺物とともに、日常土器を使用した製塙の痕跡も確認されている。洪積丘陵上に位置する有田遺跡では弥生時代全期を通じた遺構・遺物が確認されており、前期末の甕棺から銅戈、中期後半の甕棺から前漢鏡・小型仿製鏡等が出土している。また、平野を画する東側低丘陵上には飯倉C(飯倉唐木)遺跡があり、前期から土坑墓・甕棺墓群が形成され始め、前期末の甕棺から細型銅劍2本、中期末の甕棺から素環頭刀子1点が出土している。反対側の西側丘陵上では野方久保遺跡において中期前半の甕棺墓2基から銅劍2本・把頭飾1点が出土し、後期には野方中原・野方塚原遺跡の石棺墓から鏡片が出土している。更に今回の事業地周辺に当たる平野南部地域では室見川右岸の四箇船石遺跡には支石墓が現存し、周囲では甕棺墓も確認されている。更に南側に位置する東入部遺跡では前期より甕棺墓・木棺墓群が形成され、中期前半～末には周溝による区画墓が形成される。ここからは前期末～中期初頭の埋葬遺構から銅劍2本、中期前半～後半の甕棺墓から銅鏡・素環頭刀子・鉄矛・鉄鎗・鉄劍・鉄刀等が出土している。室見川左岸においては、吉武遺跡群で前期後半代以降、非常に大規模な埋葬遺構群が形成され始めるとともに、前期末～中期初頭には青銅製武器・鏡・腕輪のほか、多量の玉類を所有する複数の木棺墓・甕棺墓が認められる。更に南側段丘上に立地する浦江遺跡では中期中頃に区画墓が築造されるが副葬品は認められない。また、白塔では人面を鋳出した銅戈が出土している。早良平野の最南端部で弥生時代の埋葬遺構が確認されているのは、長峰遺跡の調査であり、中期中ごろ～末の甕棺墓が認められる。

早良平野においては副葬品のあり方からみると、前期末～中期初頭の段階で多数の青銅器・装身具を所有する吉武遺跡群の埋葬遺構と、少量の青銅器のみが副葬される周辺遺跡(飯倉C、有田、野方久保、東入部、今回調査が行われた岸田遺跡)の埋葬遺構間には大きな格差が生じており社会的な成



第1図 調査区位置図(1/75,000)

熟が認められるが、中期後半以降の段階ではより突出した個人への権力の集中は認められず、隣接する福岡平野、糸島平野に比べて各集団の統合が緩やかな地域であったことをうかがうことができる。また、早良平野においては長峰・松木田遺跡を南限として、これより南側では散発的な遺構・遺物は認められるが、まとまった集落は確認されておらず、実質的な生活域の境界に当たる。なお、この傾向は古墳時代・古代にも続いており、安定して遺構・遺物が見られるようになるのは、中世前半代に入つてからである。

古墳時代の室見川流域における首長墳を見ると、4世紀代には河口近くの左岸に五島山古墳（円墳）、右岸には藤崎遺跡の方形周溝墓群が確認されている。この後、前方後円墳である羽根戸南古墳群G-2号墳（全長26m）、G-3号墳（全長19.6m）が築かれ、ついで中流域右岸には平野最大の前方後円墳である拝塚古墳（全長75m、5世紀前半）が作られる。また、これと対峙するように左岸地域では帆立貝式の植渡古墳（全長38m、5世紀中頃）が築かれた後、ややおいて再び羽根戸古墳群F-2号墳（帆立貝式、全長16.3m）、終末期には巨石墳である夫婦塚1号墳・2号墳が存在する。これらの古墳の多くが、室見川左岸の台地上に立地することは注目される。また後期には飯盛山山麓を中心とする長丘陵上及び油山西麓上に多くの群集墳が形成されている。これらの群集墳には铸造鉄斧、鉄製鍛冶具他の鉄器類、陶質土器等の渡来系遺物が副葬されるものも見られる。また鉄猝供獻から推定できるように、この時期には鉄生産も開始されたものと考えられる。

古代には行政区画として筑前国早良郡となり、「和名抄」によると七郷が知られる。また、当時大宰府を基点とした古代官道である西海道が確認されており、有田遺跡では官道に近接して早良郡衙推定遺構群が確認されている。都地遺跡・都地泉水遺跡・吉武遺跡群・城田遺跡・金武青木A遺跡などでは大型建物を確認し、瓦・墨書き土器・木簡等が出土するほか、周辺で多くの製鍊炉・鍛冶炉が確認されている。製鍊炉は市内でも有数のまとまりを持ち、市内における奈良時代後半の鉄生産の中心地のひとつとして数えられるとともに、前後の時代を含めて鉄器生産が盛行したものと考えられる。

中世には現在も痕跡をとどめる条里地割に沿う大規模な水田開発が行われ、景観的に近現代につながる村落景観が形作られた。また居館跡が都地遺跡・清末遺跡などで確認され、館城としては有田遺跡の小田部城跡や都地城が知られている。山城としては油山の西端に荒平城跡、対峙する飯盛山には飯盛山城が築造されている。荒平城は15世紀代には文献に見え、16世紀後半には小田部氏が城督となるが、1580年に龍造寺氏の侵攻により落城している。現在も郭外周には石垣が点在している。飯盛山城は築造年代が明らかでないが、近世地誌類によると戦国末には龍造寺の城となつたことが記されている。なお飯盛山山頂からは永久2年（1114年）銘の瓦経が出土するほか、明治時代に出土した経筒の存在も知られている。

今回、土地改良事業を行つた早良区早良は旧地名長峰で近世地誌類にも記され、東入部村に含まれる。ここは早良平野の西側を画する西山（430m）～飯盛山（382m）～叶岳（341m）～長垂山（110m）からなる花崗岩山地のうち、西山の東側山麓部に広がる砂礫台地及び室見川に落ち込む台地前面の沖積扇状平野で構成される。砂礫台地は山地から供給された土砂により形成された扇状地が台地化したもので、自然開析によって分離され舌状に伸びている。昭和59年に行われた福岡市による土地分類調査によれば、松木田遺跡は中位段丘及び前面の低位段丘面・沖積扇状地、岸田遺跡は砂礫台地上の中位段丘下位面及び前面の沖積扇状地上に立地し、内野熊山遺跡は埋没段丘・長峰谷口B遺跡は砂礫台地に挟まれた谷底平野に位置する。



写真 1 調査区付近より北側を望む(平成24年4月撮影)



写真 2 調査区付近より南側を望む(平成21年5月撮影)



写真 3 土地改良事業前(平成21年5月撮影)



写真 4 土地改良事業後(平成24年4月撮影)



写真 5 岸田遺跡第1次調査1～3区全景(南から)



写真 6 岸田遺跡第1次調査4区全景(上空から)



写真 7 岸田遺跡第1次調査出土状況



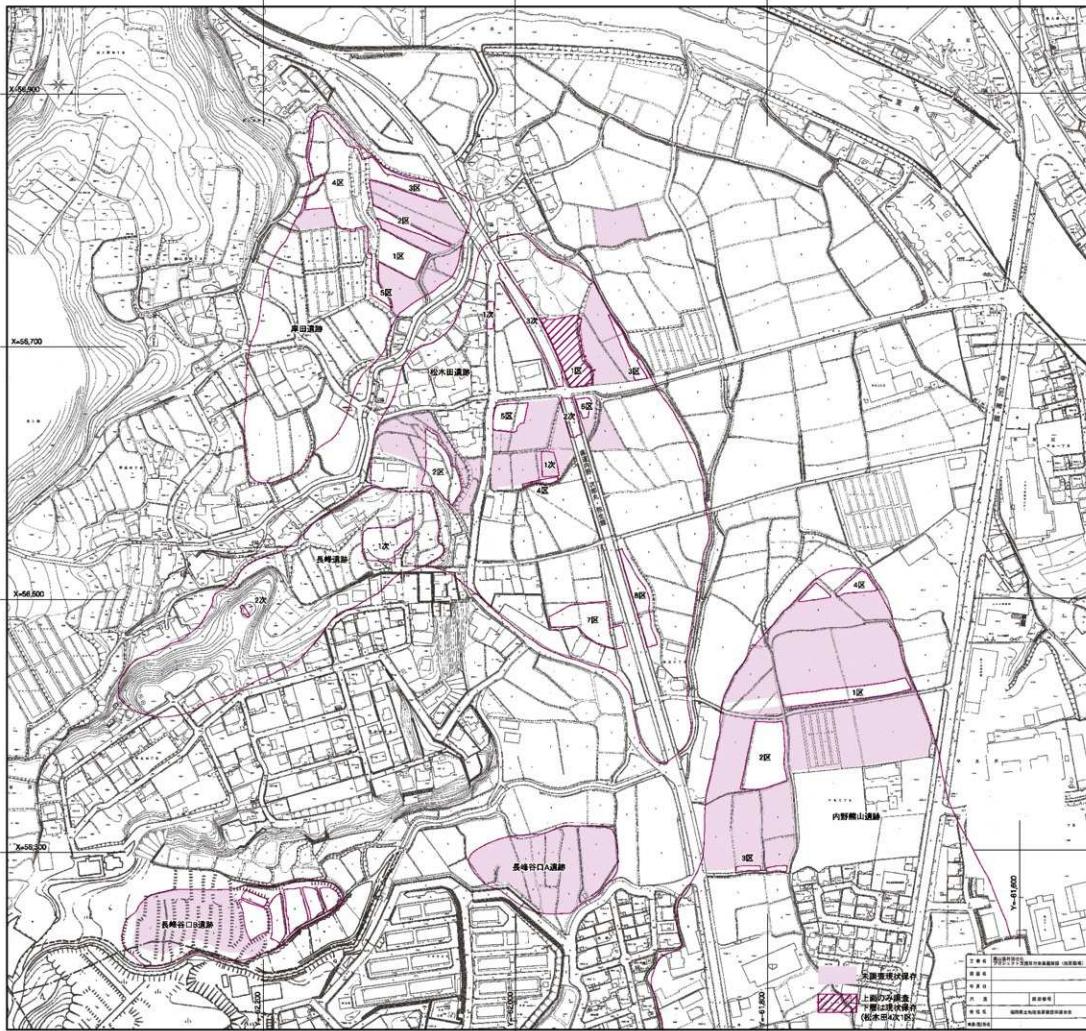
写真 8 内野熊山遺跡第1次調査1区全景(東から)

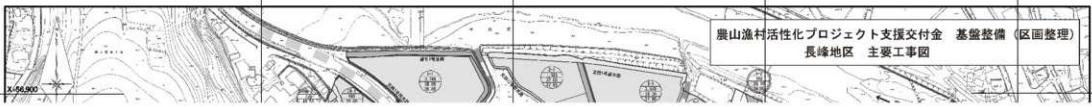


写真 9 内野熊山遺跡第1次調査2区調査状況(南から)



写真10 長峰谷口B遺跡全景(東から)





II 松木田遺跡第4次調査の記録

1 既往の調査と第4次調査の概要

これまでに周辺で行われた調査事例は少ないが、ここで簡単に紹介しておきたい。松木田遺跡ではこれまでに3次の調査が行われている。1次調査は道路改良事業等に伴う立会い調査である。昭和54年1月に行われ、弥生土器・須恵器等が出土している。2・3次調査は道路新設に伴う調査であり、平成7・8年度に行われた。弥生時代～中世の生活遺構群とともに、縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。松木田遺跡の西側台地上に隣接する長峰遺跡（旧名称：長峰甕棺遺跡）では2次にわたる調査が行われている。1次調査は昭和61年度を行い、中世の掘立柱建物・井戸・土坑を確認している。2次調査は土取りに伴うもので、弥生時代中期中頃～末の甕棺墓8基を確認している。

今回行った松木田遺跡第4次調査地点では中位段丘面上に立地する2区及び前面の低位段丘および沖積扇状地上に立地する1・3～8区で調査を行った。その結果、2区調査の台地東側先端部分で縄文時代草創期の円形土坑を確認した。また、低位段丘面から東側の沖積扇状地上にあたる1区の調査では縄文時代早期燃糸文土器の良好な包含層を確認した。これは西側に隣接する3次調査で確認された包含層の延長であり、水田の造成により東端は削平を受けているが、3次調査同様、1区南端部を除いたほぼ全面に広がっていることを確認した。

また弥生時代～中世の遺構・遺物は遺跡北半部にあたる1～6区の全体に濃密に広がっている。弥生時代中期中頃～古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物等の生活遺構は、埋没した低位段丘上の1・5・6区で特に濃密に確認されている。なお、3次調査北端部には弥生時代前期末～中期初頭の包含層が確認されており、集落形成の端緒を認めることができる。埋葬遺構としては5区で前期末以降形成された60基以上の甕棺・木棺・土坑墓群を調査している。松木田遺跡西側台地上に隣接する長峰遺跡においても甕棺墓が確認されている。また、開析谷を挟んだ北側の岸田遺跡においては青銅武器・鉄器を副葬した80基以上の埋葬遺構群を検出している。また低位段丘から外れた南側に当たる7・8区の調査では明瞭な遺構は確認できていない。4区で確認した自然流路以南では弥生時代のまとまった遺構は確認されておらず、現在までの調査事例からは松木田遺跡の北半を早良平野における弥生時代の集落形成の南限として捉えることが可能であろう。

なお、古代・中世の遺物も一定量出土しており、掘立柱建物等の生活遺構が営まれたものと考えられる。更にこの時期には鍛冶炉を検出するとともに、1・2・4～6区で多くの鍛冶滓が出土しており、鉄器生産の盛行をうかがわせるとともに、製鍊滓も認められることから鉄生産の可能性も指摘できる。

2 1区の調査

1) 概要

1区は松木田遺跡の北東端に位置する調査区である。試掘調査により表土直下で弥生時代以降の遺構面を確認している。また隣接する3次調査の成果から縄文時代の遺構・遺物の存在が想定された。調査は上面の弥生時代以降の遺構面における調査より開始した。遺構面は黄褐色（砂質）土～にぶい黄色土（第5図A-B土層10層、C-D土層25層）を主体とするが、耕地化による削平・平坦化が進んでおり、本来的な勾配は失われている。遺構面標高は調査区南西隅で44.1mを測り、東側に向かって僅かに傾斜する。また東端部で南北に伸びる斜面上には主として古代～中世の遺物からなる包含層が堆積し、除去後にはピットを検出している。検出遺構は弥生時代中期～中世の掘立柱建物・竪穴住居

跡・土坑等を中心とした生活遺構群である。遺構埋土は弥生・古墳時代は褐色～暗褐色土、古代以降が黒褐色土を主体としている。なかでも中心となるのは弥生時代中期中頃～古墳時代前期の竪穴住居跡・掘立柱建物である。時期を認定したもののだけでも、弥生時代中期後半の円形住居3棟、長方形住居8棟、古墳時代前期の長方形住居2棟、その他弥生時代中期後半の大型掘柱建物1棟などがある。1区においては調査区全体に該期の生活遺構が展開しているが、削平により竪穴部分が失われていると考えられるものが多く、特に北東部のピット密集地区などには、取り上げることのできなった住居跡等も多く存在していたものと考えられる。また、包含層に堆積した遺物から、古代～中世に位置付けられる遺構も多く存在していたものと考えられる。ピットから該期の遺物も出土しているが、今回は掘立柱建物等としてはまとめることができなかった。この中で鍛冶炉に伴う排滓土坑と考えられるSK001はこの時期に位置付けられるものである。南側に位置する6区調査区においてもまとまった鍛冶関連遺構が確認されており、遺跡内において盛んな鐵器生産が行われていたものと考えられる。ピットからの出土遺物は弥生時代中期後半が主体を占め、僅かに撚糸文土器の混入が認められる。そのほか古墳時代前期の土師器、古代の土師器・須恵器・鉄滓・中世前半代の土師器・陶磁器類等が出土しており、古墳時代後期の遺物はほとんど認められない。

縄文時代の包含層は西隣の第3次調査区で確認されており今回の調査区でもその存在が想定されたため、調査区中央に東西方向にトレンチを設定（SX054で報告）した。その結果、上面遺構面下30～60cmで黒褐色砂質土の撚糸文土器の遺物包含層を確認した。今回の工事においては上面の遺構面は影響を受けるものの、下層の縄文時代包含層については現状保存を図ることができるために、土地改良区と協議の結果、調査期間の短縮を図る意味からも、可能な限り現状保存を図ることで協議が成立した。このため、工事によって切り土が行われる1区北東端部については包含層の調査を行う（SX055として報告）ものの、その他の部分については、施工による影響を受けないため下層包含層を現状保存することとした。SX055出土遺物はほとんどが撚糸文土器及び石器・剝片等である。石組炉、集石遺構、土坑等の遺構は認められなかったが、ほぼ完形の土器1個体がつぶれた状態で出土している。

2) 縄文時代の調査

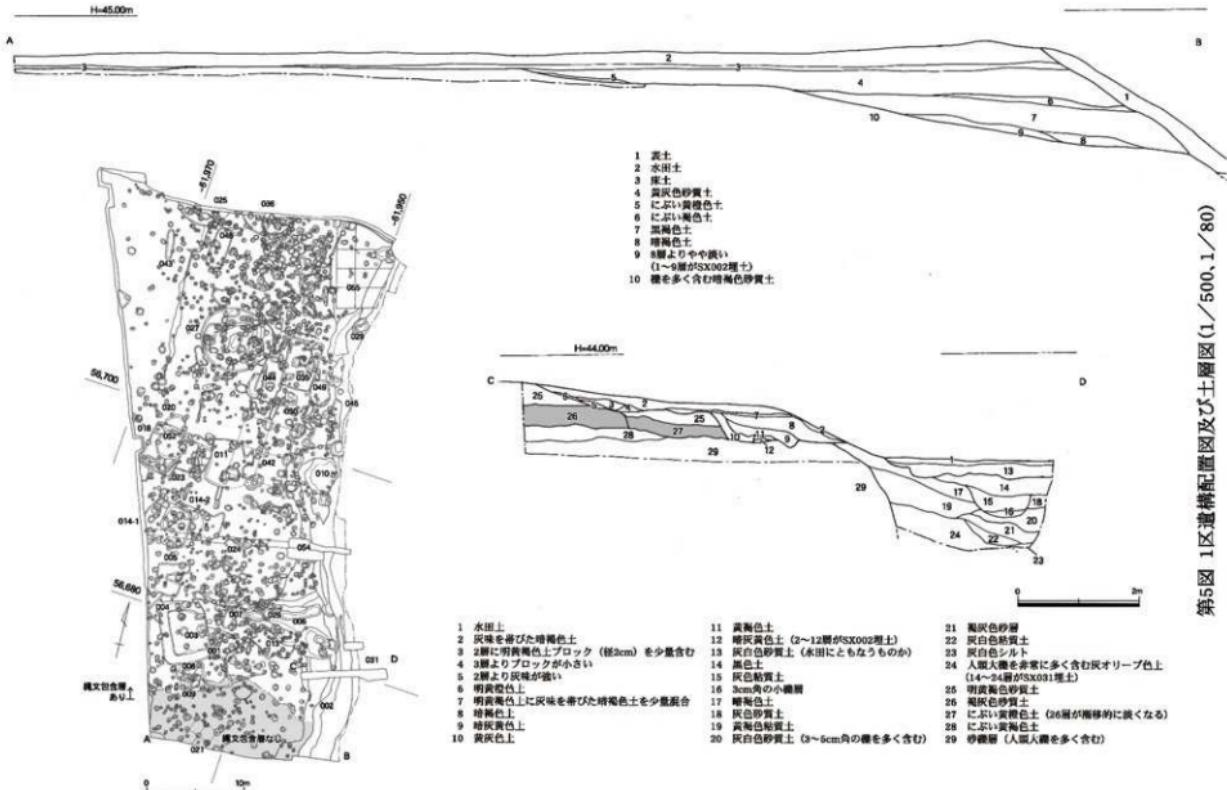
出土状況

SX054（第6図、写真17～22）

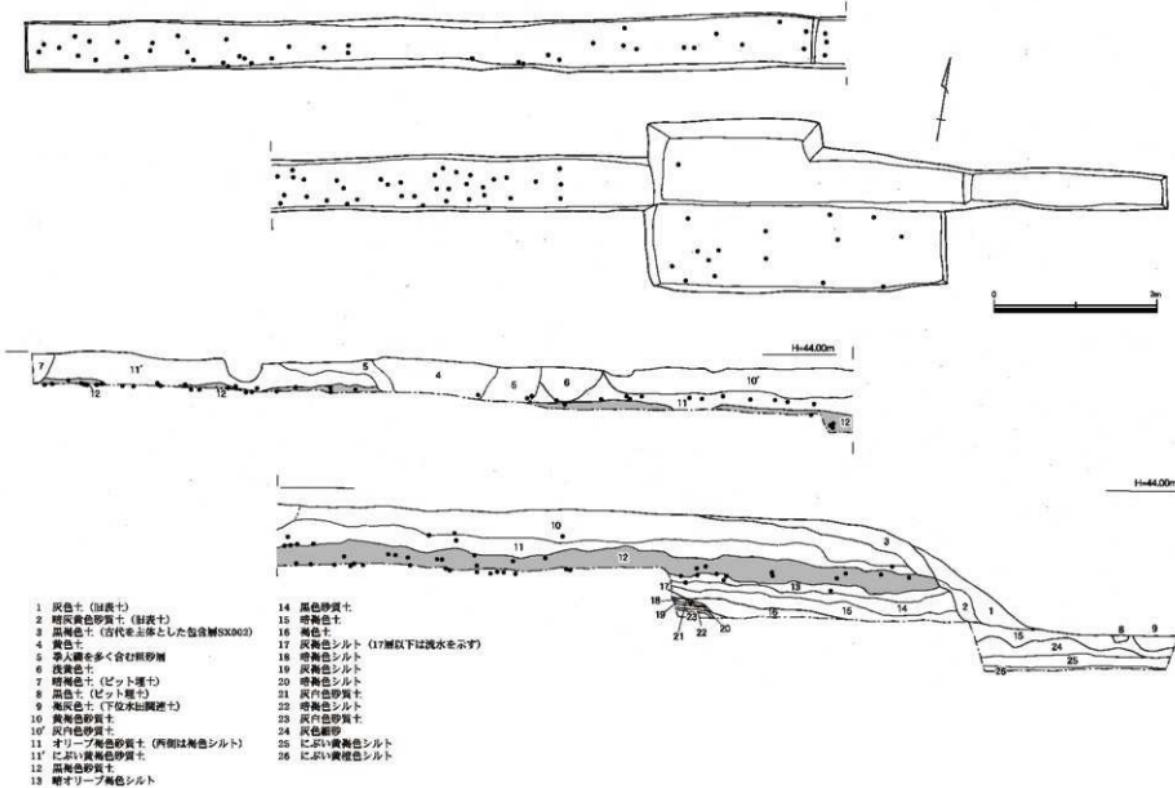
包含層の分布範囲を確認するため、調査区中央部で東西方向に設定したトレンチである。幅60cm、長さ21mを測り、東端で一部拡張している。基本土層は上面遺構面である黄褐色砂質土（10層）、褐色砂質土（11層）の下位に堆積する厚さ20～40cmの黒褐色砂質土層（12層）が縄文時代の包含層である。13層以下には一部沈降したと考えられる遺物が僅かに出土しているが、16層以下は完全に無遺物層である。また、黄褐色砂質土から掘り込む礫混じり土層が認められるが、現状ではこの部分からの出土遺物はなく、形状も不定形となるものと考えられ、人為的な掘り込みではなく、自然堆積層の一部と判断している。遺物は土器小破片及び黒曜石剝片類であり、掘削面積約15m²程度で、遺物102点を確認したが、多くが摩滅の著しい粒状の土器片で取り上げ可能であったものは40点弱である。遺物の出土状況には明確な粗密は認められず、分布に人為的な営為は認められない。出土遺物のうち7割程度が黒褐色砂質土（12層）出土であり、残りのほとんどがその上層の褐色砂質土（11層）出土である。取り上げを行った土器もほとんどのものについては摩滅が進行しており器面の観察が可能なものは僅かであるが、縄文時代早期に位置付けられる撚糸文土器が出土している。

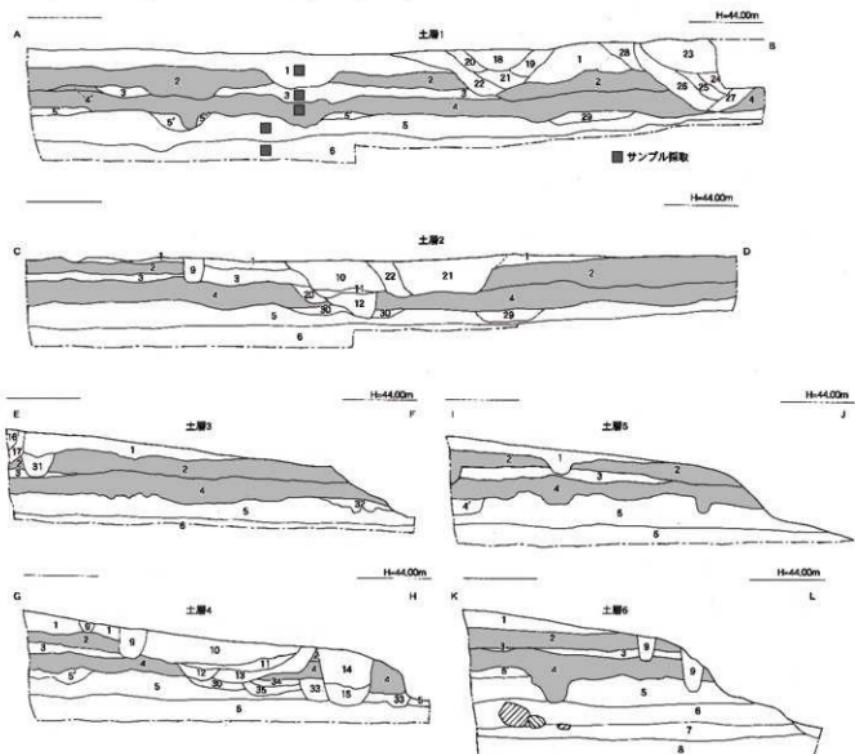


第5図 1区連携配置図及び土層図(1/500、1/80)



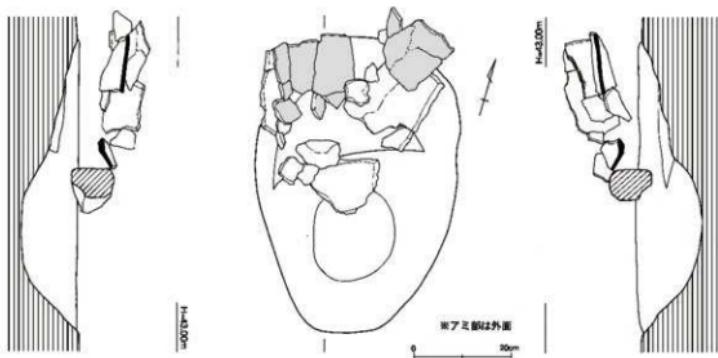
第6図 SX054実測図及び土層図(1/60)



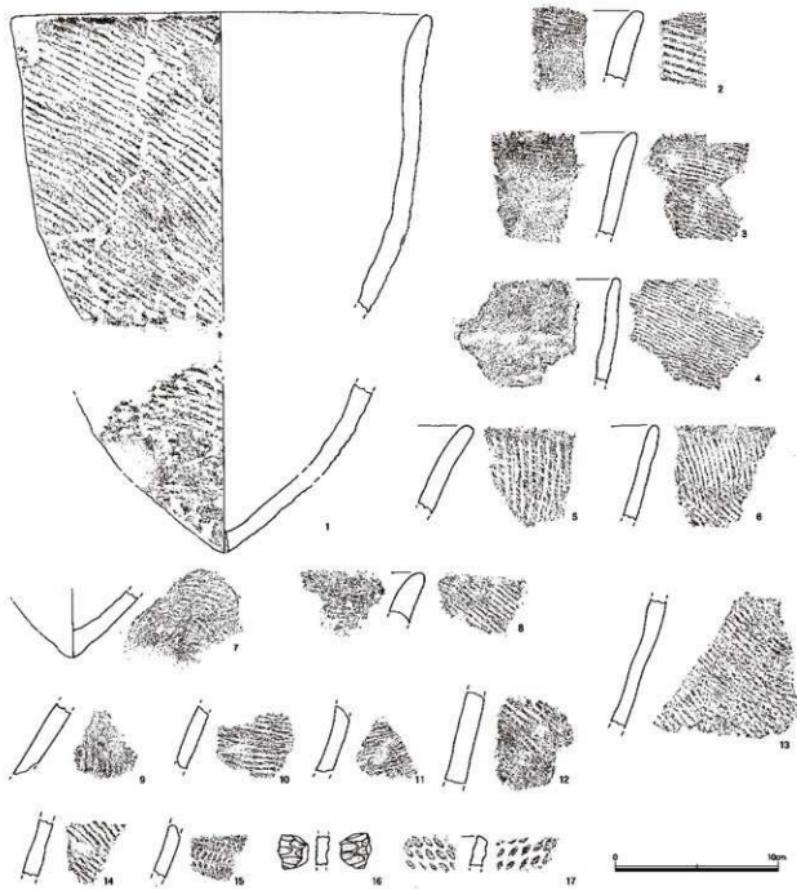


第7図 SX055実測図及び土層図(1/100, 1/60)





第8図 SX055内遺物番号1出土状況(1/10)



第9図 SX055出土遺物実測図(1/3)

SX055 (第7・8図、写真23~36)

田面造成のため切り下げられる調査区北東部分について包含層の調査を行った。調査は既存調査2mグリッドを基本として、土層ベルトを残しながら8グリッドに分けて人力により掘り下げた。出土遺物は、本来層位ごとに取り上げを行うべきであるが、土層の見分けが困難な部分もあり、位置を記録した上で確認した全点を取り上げている。掘削面積は44.6m²である。出土遺物は縄文土器、石器・剥片類で総点数は230点程度である。基本土層は上面遺構面であるにぶい黄色土（1層）、以下2層：黒褐色土、3層：黄褐色土、4層：黒褐色土、5層：灰黄色砂質土、6層：黄褐色砂質土、7層：黄褐色シルト（花崗岩礫入）、8層：明黄褐色粗砂（拳～人頭大花崗岩礫を多く含む）となる。2・4層が縄文時代包含層となり間に間層がある。5層以下は基本的に無遺物層となる。遺物の分布状況には明らかな粗密は認められず、1点つぶれた状態で出土したほかは、大型の破片もほとんど見られなかつた。堆積土は調査区内ではほぼ水平堆積層であり、石組炉、集石遺構、土坑等の遺構は認められない。細かな凹凸やくぼみは認められるが、明らかに人為的な掘り込みの痕跡は認められない。また、熱を帯びた痕跡や炭化物も認められない。1層上面や各層上面からの落ち込みが認められるが、いずれも人為的な掘りこみではないと考えられる。出土土器は大半が撚糸文土器でほぼ混入のない単純層を形成し、2・4層間に明確な時期差は認められない。なお3点押型文土器が出土しているが、1点（17）は23層からの出土で第3次調査のあり方と酷似する。また4層中3グリッド西壁際から撚糸文土器1点がつぶれた状態で出土している（1）。底面は5層上面にほぼ接しており、横倒しになってつぶれているが、底部のみは地面に座ったように、上向きとなっている。本来は完形であったと思われるが、土器が軟質であり、消失した部分がある。底部の後ろには10cm角の小礫を確認しているが、焼けた痕跡等は認められない。土器除去後にはくぼみ状に4層がたまる部分があるが、土器に伴う掘り込みであるかの判断はできない。輪郭も不明瞭であり、自然の凹凸である可能性が高い。

古環境復元を目的とし、1・3～6層よりサンプル採取し、植物珪酸体、花粉、植物遺体同定、テフラ（3層のみ）の分析を行ったが、花粉・植物遺体・テフラは検出されていない。4層検出の植物珪酸体から、筐類・ウシクサ族が成育する比較的乾燥した環境が推定されている。

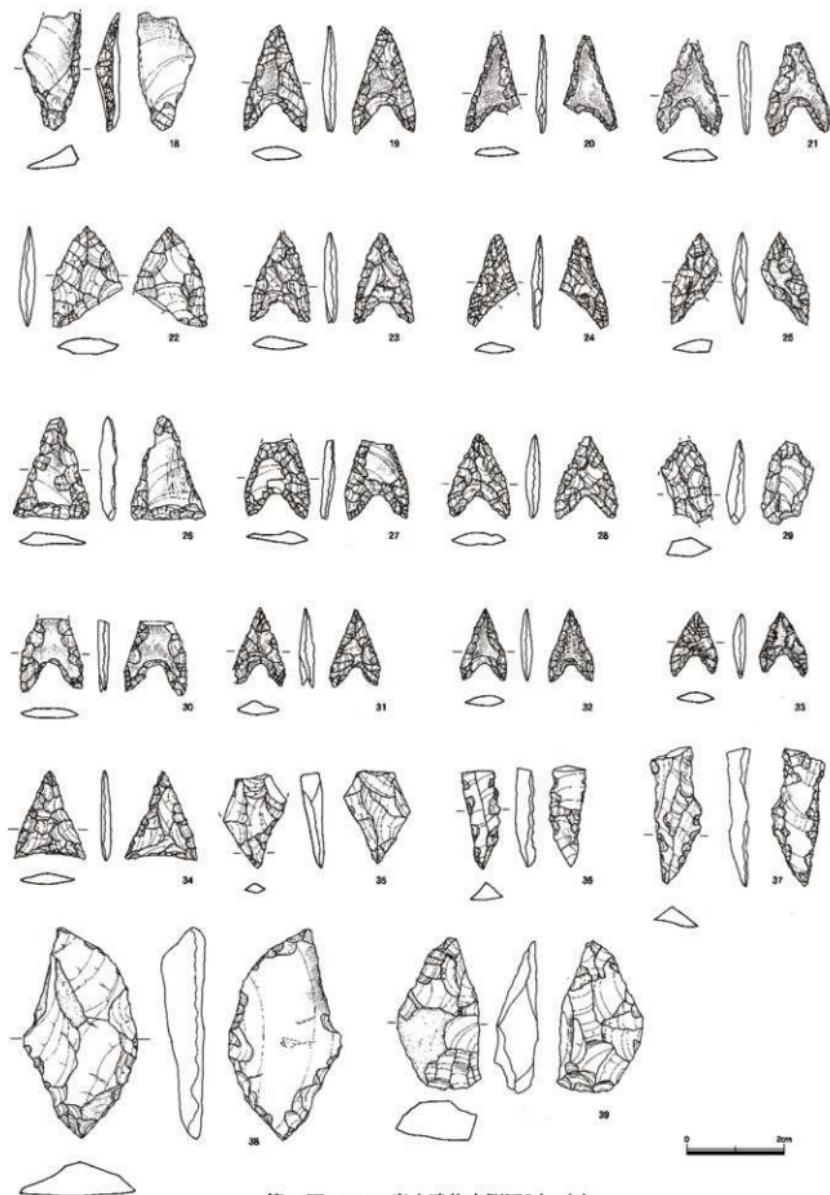
出土遺物（第9～11図、写真91・92）

縄文土器（1～17）

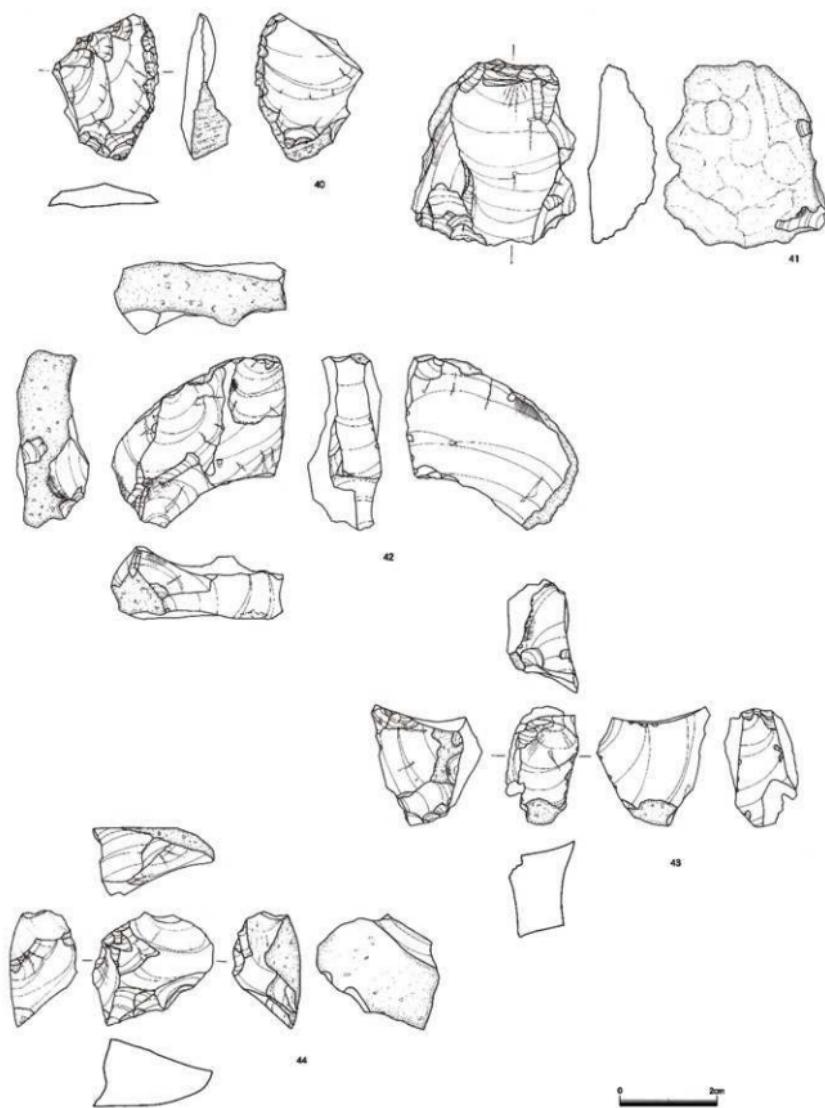
縄文土器は深さ10cmのコンテナ3箱出土した。大半は径が復元できない小片である。1は、底部と胴部は接点がないものの、唯一全形が復元できる。ほぼ半個体分が遺存している。口縁部はやや歪んで正円を成しておらず、平均の直径25.7cm、推定器高は27.5cm前後を測る。第3次調査出土品と比べると中形品に含まれる。口縁部は端部のみや外傾するが、全体的に直立気味である。胴中部付近から次第に窄まっていく。底部はほぼ直線的で、底の先端から2～3cmほどは撚糸文は擦れてほとんどが消えている。器壁は1.2cm前後と厚い。外面全面に幅4～5mmの斜行撚糸文を施している。内面は全面ナデもしくは横ナデで仕上げている。口縁部外面の上から10cmほどに煤のためかやや黒化しており、また胴中央部からやや下付近にコゲのためか真黒色の部分が点々と認められる。粘土の接合痕が明瞭で、粘土帶の幅は3～4cm前後を測る。胎土には3mm大の石英・長石を多く含んで粗い。焼成もあり良くなく、バインダーを浸透させないと器体がもたない。色調は煤やコゲ付近を除くと、黄褐色系を呈している。

2～6・8は撚糸文土器の口縁部である。4のみ直立気味の口縁部で、他はほぼ直線的に外傾する。

2・8は器厚1.3cm前後と厚く、他は1cm前後である。5は斜方向の後に縦方向の条状の文様であるが撚糸原体によるものかもしれない。6は口縁部付近は縦方向に近く、その下は斜方向に撚糸文を施し



第10図 SX055出土遺物実測図2(1/1)



第11図 SX055出土遺物実測図3(1/1)

ている。撚糸幅は概ね4mm前後であるが、4は2mmと狭い。2・3・8は口縁部内面に横方向の撚糸文を施しているが、その後にナデ調整を施している。その他は、ナデもしくは横ナデを施している。7は底部の破片で、やや乳房状を呈している。9～14は撚糸文土器の胴部片である。小片のため、傾きは不明確である。斜方向のものが多いが、9は縦方向に施した後、ナデを施し、10は横方向に施文している。15～17は押型文土器である。15は山形押型文である。山形の2辺はつながっておらず、一部では辺がすべて山形になっていない。また各辺は短く太く、あたかも各辺が穀粒文のような状態を呈している。器面は脆い。破片の上端部は粘土の接合部である。16は大粒の楕円押型文で、両面に施している。細片のため明瞭ではないが、楕円の大きさに統一感を感じられない。17の端部はほとんど剥離しているが、わずかに残存している部分から口縁部と判断した。楕円押型文を両面に施している。外面上2列はほぼ同形態、同方向の楕円押型文であるが、かすかに残る3列目は楕円の大きさが小さく、向きも変わっている。

石器（18～44）

出土した石器は、ナイフ形石器1点、石鏃16点、石錐状のもの1点、スクレイパー2点、石核5点である。この他に砥石状の破片が1点、加工痕・使用痕のある剥片が数点ある。

18は不純物をほとんど含まない漆黒黒曜石製のナイフ形石器で、先端部を欠失している。縦長剥片を利用し、プランティングは片側から小さな剥離を基部から先端部近くまで施している。

19～34は石鏃である。平基鏃（3次調査のA類26・34）、小型で細身の両脚鏃（同B類：19・20など）、やや幅広の両脚鏃（同C類：22）に分けられ、ほとんどがB類である。この中には5点（19～21・30・32）のいわゆる局部磨製石鏃が含まれているが、3次調査における磨製石鏃の占有率（44%）に比べると、圧倒的に少ない。石材は黒曜石9点、サヌカイトを含めた安山岩6点、チャートらしきものが1点である。長さ1.3cmを最小に最大のもので2.2cm、平均1.78cmと、3次調査（同1.83cm）とほぼ同様の長さである。長幅比平均は1.41を測る。欠損のあるものは、わずかな欠損の部分も含めて16点中7点で、ほぼ3次調査同様の割合である。

以下、主なものについて個別に述べる。19～21はB類の局部磨製石鏃である。研磨を切っている剥離と研磨に切られる剥離がある。20はかなり薄くなるまで研磨を施し、その後に周縁部を調整している。22はC類に分類したが、片脚を欠失しており、かなり短い脚も想定され、A類に分類できるかも知れない。26はA類で、両面と剥片の周縁部のみを調整し、主要剥離面を大きく残している。30・32は局部磨製石鏃で、研磨後の周縁調整が残っている。32・33はともに長さ1.5cmに満たない。34はほぼ二等辺三角形の形状を成している。

35は石錐か。安山岩製で先端部をわずかに欠失している。36・37は黒曜石製の縦長剥片である。36は片面に連続する加工を施し、反対面の一部にも加工痕が認められる。37も同様に両側縁に連続的に加工を施して先端部を尖らせている。基部にも両側から調整し、一見小型の鉈状の形態を作っている。基部は先端部を欠失している。38はサヌカイト製のスクレイパーで、半月形の剥片の円弧部と直線部の一部に調整を施している。直線部の半分は自然面である。39は黒曜石製で、主要剥離面側のほぼ全面に調整を加えている。反対面の大半にも調整を加えているが、自然面が残り中央部は厚みがある。何かの未製品であろうか。40は小型のスクレイパーである。不定形な小型剥片の一部縁辺に調整を加えている。

石核は5点出土し、4点実測した。41～44は石核である。41は黒曜石製で、片面全面が自然面で、反対面から縦長剥片を剥出している最後に剥出しているのは、幅1.5cm、長さ4cmほどの縦長剥片である。42は黒曜石製で、一部に自然面を残している。横長剥片・縦長剥片の両方を剥出している。43は

バティナがやや古めの黒曜石製で、全面とも最終剥離1回でその面を取り去っている。44は不純物を多く含む黒曜石製で、1面は自然面である。最終剥離近くでは小型の剥片を剥出している。

押図 No.	出土位置	外面	内面	胎土	焼成	備考
9 1	055-R141	斜方向の撚糸文	ナデ・横ナデ・押圧	3mm大の白色粒多い	やや悪い	
9 2	055-R70	横方向の撚糸文	横方向の撚糸文の後ナデ	2mm大の白色粒や多い	やや悪い	
9 3	055-R76	やや斜方向の撚糸文	横方向の撚糸文の後ナデ	4mm大の白色粒や多い	やや悪い	
9 4	遺構 025	斜方向の撚糸文	ナデ・押圧	5mm大の白色粒多い	良好	
9 5	055-R319	斜後縦方向の撚糸条痕か	横方向の撚糸文の後ナデ	1mm大の白色粒含む	良好	
9 6	055-R29	縦及び斜方向の撚糸文	ナデ・押圧	3mm大の白色粒多い	やや悪い	
9 7	055-R355	横方向の撚糸文	ナデ?	3mm大の白色粒多い	やや悪い	
9 8	055-R23	斜方向の撚糸文	横方向の撚糸文の後ナデ	1mm大の白色粒含む	良好	
9 9	055-R283	縦方向の撚糸文?後ナデ	ナデ・押圧	3mm大の白色粒多い	良好	
9 10	055-R140	横方向の撚糸文	ナデ・押圧	1mm大の白色粒・金雲母含む	やや悪い	
9 11	055-BG ベルト 6層上面	横方向の撚糸文後ナデ	ナデ	3mm大の白色粒・赤色粒含む	良好	
9 12	055-R19	斜方向の撚糸文	ナデ・押圧	3mm大の白色粒多い	やや悪い	
9 13	055-R25	斜方向の撚糸文	ナデ・押圧	3mm大の白色粒・金雲母含む	良好	
9 14	055-R137	斜方向の撚糸文後ナデ	ナデ・押圧	3mm大の白色粒含む	良好	
9 15	北東切り下げ部	山形押型文	ナデ	2mm大の白色粒少量	やや悪い	
9 16	055-R154	楕円押型文	楕円押型文	3mm大の白色粒少量	やや悪い	
9 17	055-R1	楕円押型文	楕円押型文	1mm大の白色粒含む	良好	

表2 1区出土土器一覧

押図	No.	出土位置	種類	石材	長さ	幅	長／幅	厚さ	重量	石織欠失部	備考
10 18	055-R274	ナメ形石器	黒曜石	2.4	1.2	2.0	0.5	0.9	先端部		
10 19	055-R53	石織	安山岩	2.2	1.3	1.7	0.3	0.6		両面局部磨製	
10 20	055-1G.6	脣上面	石織	安山岩	2.0	1.2	1.7	0.2	0.3	片脚	両面局部磨製
10 21	055-R256	石織	安山岩	(1.9)	1.3	(1.4)	0.3	0.5		両面局部磨製	
10 22	054-R8	石織	黒曜石	2.1	(1.5)	(1.4)	0.3	0.6	片脚		
10 23	055-4G.6	脣上面	石織	安山岩	1.8	1.2	1.5	0.3	0.5		
10 24	055-4G.6	脣上面	石織	黒曜石	1.9	1.0	1.9	0.2	0.3	片脚	
10 25	055-R115	石織	黒曜石	1.9	1.0	2.0	0.3	0.4	片脚		
10 26	055-R253	石織	黒曜石	2.1	1.6	1.4	0.3	0.7			
10 27	055-7G.6	脣上面	石織	黒曜石	1.6	1.3	1.2	0.2	0.4	先端部	
10 28	遺跡面	石織	黒曜石	1.7	1.3	1.3	0.3	0.5			
10 29	055-R273	石織	黒曜石	1.7	1.1	1.5	0.4	0.5	片脚		
10 30	055-R276	石織	ナメ?	1.5	1.3	1.2	0.2	0.4	先端部	両面局部磨製	
10 31	055-R14	石織	黒曜石	1.6	1.0	1.6	0.3	0.3			
10 32	055-R201	石織	安山岩	1.5	0.9	1.6	0.2	0.2		両面局部磨製	
10 33	055-R215	石織	黒曜石	1.3	1.0	1.3	0.2	0.2			
10 34	055-R314	石織	安山岩	1.8	1.5	1.2	0.2	0.5			
10 35	055-4G	雑?	安山岩	1.8	(1.4)	(1.3)	0.4	0.8			
10 36	055-R111	剥片	黒曜石	2.1	0.8	—	0.4	0.4		加工痕	
10 37	055-R75	剥片	黒曜石	2.8	1.1	—	0.5	0.9		加工痕	
10 38	055-R340	スリバ-	安山岩	4.3	2.3	—	0.9	6.7			
10 39	055-4G.6	脣上面	未製品?	黒曜石	3.1	1.6	—	0.8	3.8		
11 40	055-23G.6	脣上面	スリバ-	安山岩	3.0	2.2	—	1.1	4.5		
11 41	055-R226	石核	黒曜石	3.8	3.3	—	1.5	16.6			
11 42	055-R138	石核	黒曜石	3.6	3.6	—	1.5	14.6			
11 43	055-R26	石核	黒曜石	2.4	1.5	—	2.3	6.3			
11 44	055-R20	石核	黒曜石	2.4	2.3	—	1.4	6.1			

*安山岩にはサヌカイトを含む

表3 1区出土石器一覧表

3) 弥生時代以降の調査

(1) 挖立柱建物

SB021 (第12図、写真37)

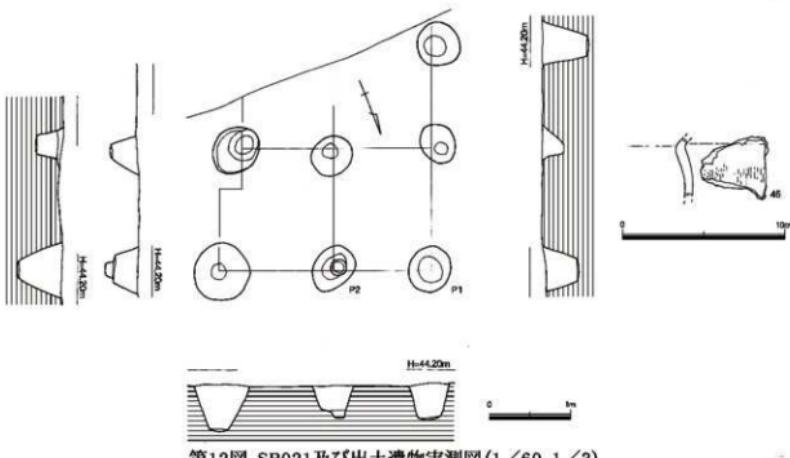
調査区南端部で検出する。柱穴は直径50~70cmを測る円形を呈し、柱痕跡は認められない。埋土はいずれも黒褐色土である。南側は調査区外に延びるが、一辺2.7mほどの総柱建物に復元している。遺物は少量で時期は不明瞭であるが、P2より須恵器の小破片が出土している。古墳時代後期~古代に位置付けられる。

出土遺物 (第12図) 45はP1出土である。土師器甕の頸部破片である。外面には刷毛目が痕跡的に残り、内面は指押さえとナデを行う。

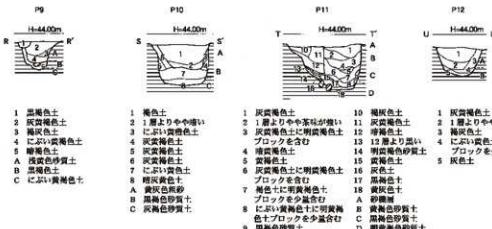
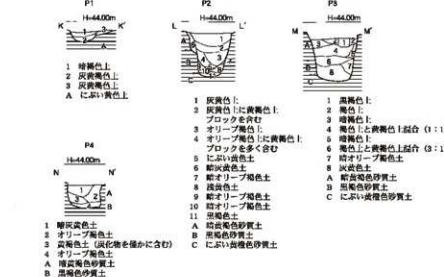
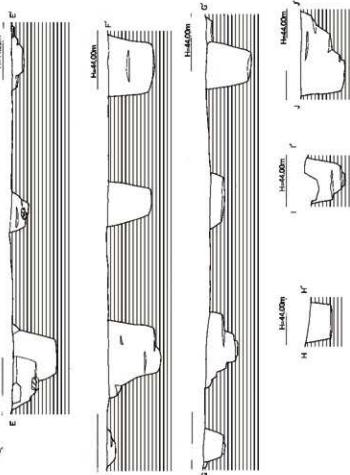
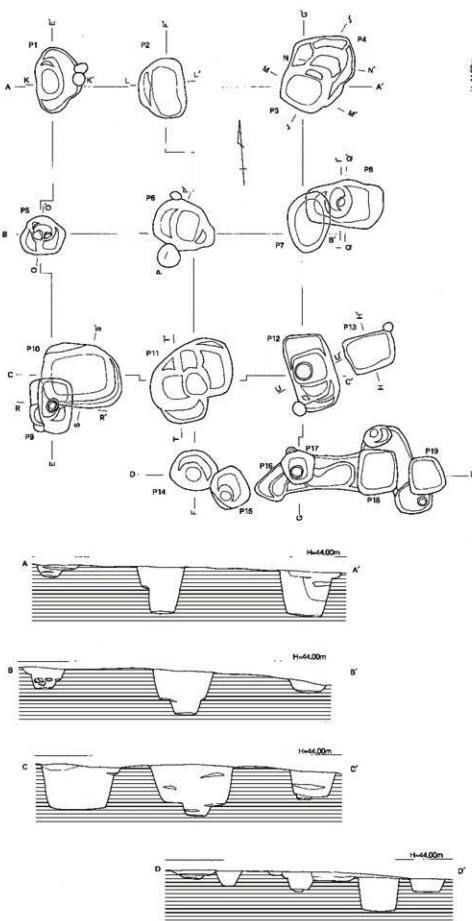
SB042 (第13図、写真38~48)

調査区中央部で検出し、SC011を切る。主軸方位は周辺の弥生時代中期以降の方形堅穴住居跡に揃えたN-4°~-Eにとり、大型で平面略長方形~不整な長円形の柱穴掘り方で構成される総柱建物として復元した。規模は南北長6m、東西長5.3m前後を測る。P1~P13が建物を構成する柱穴として抽出し、並行するP14~P19は関連する可能性のある造構として図示したものである。身舎を構成すると考えたものの中でP3・4、P7・8、P9・10、P11は切り合い関係を有しており、建替えが行われた可能性も考えられるが、主軸方位がずれるとともに、北西側に対応する柱を検出していないため、構成は不明である。柱痕跡は認められないが、掘りなおしの痕跡が残っているものもある。ここに図示したP1~P19からはいずれも弥生時代中期後半の遺物が出土しており、その他の時期の土器は認められない。また大半の柱穴には丹塗り土器破片が含まれている。

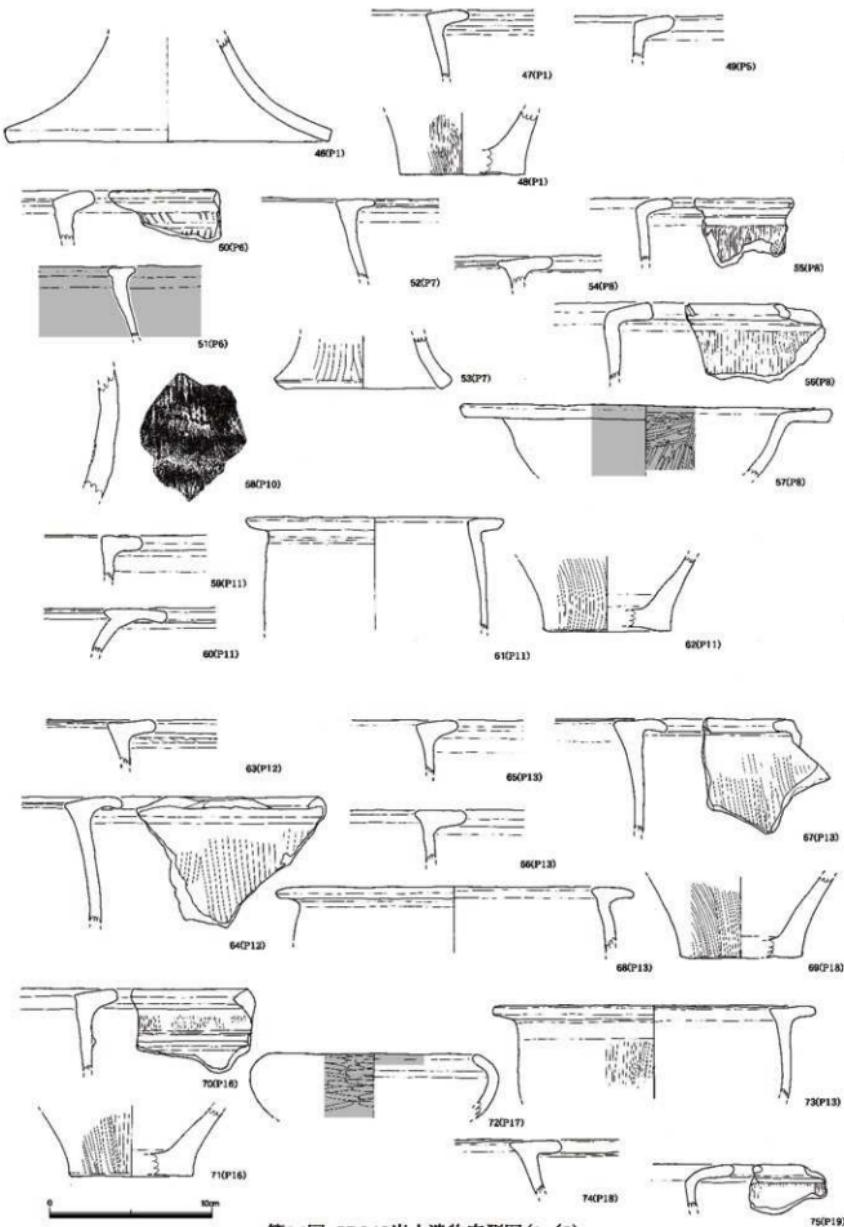
出土遺物 (第14図) 46~69は身舎を構成すると考えられる柱穴出土である。46は裾部破片である。砂粒を多く含んだ淡橙色を呈する。53は器台である。58は撚糸文土器胴部破片である。51・57は丹塗り土器である。その他底部破片は中央が僅かにくぼむ平底を呈し、外面は縦刷毛を行う。口縁部破片は内傾~水平で逆L字形のもの、鏽形をなすものがある。また56は端部を四角く納めく字形を呈する。70~75は関連が考えられる柱穴出土である。72は丹塗りの袋状口縁、71は平底の底部である。70は逆L字形、73・74は鏽形、75はく字形を呈する。



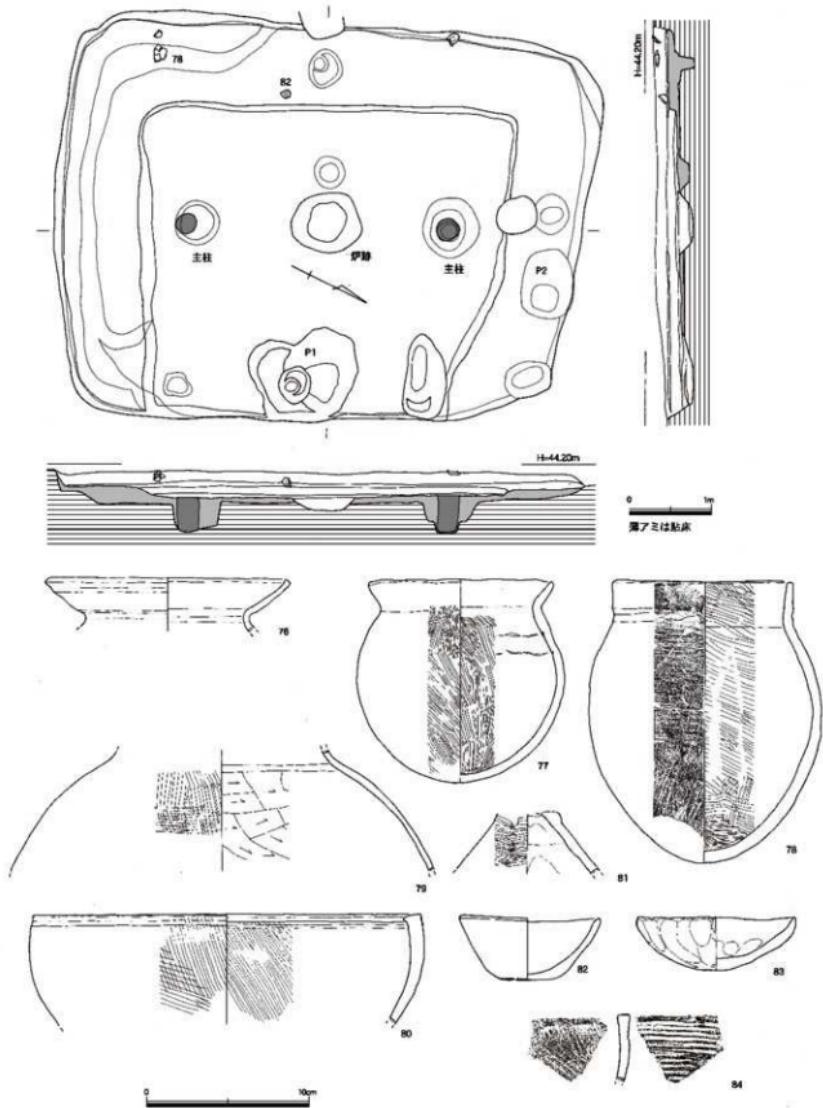
第12図 SB021及び出土遺物実測図(1/60, 1/3)



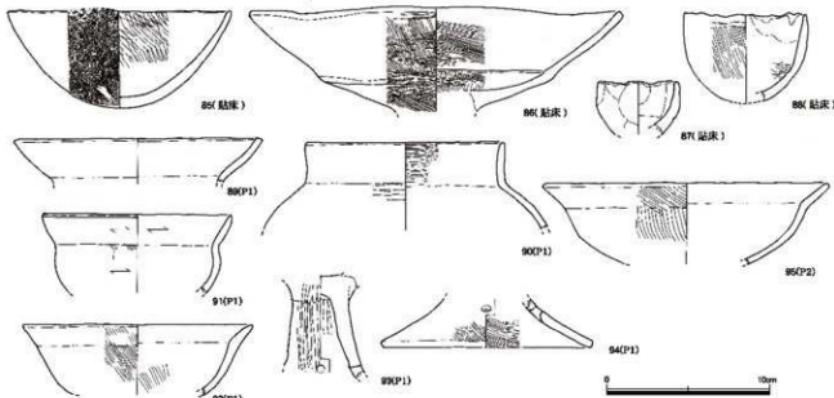
第13図 SB042実測図(1/80)



第14図 SB042出土遺物実測図(1/3)



第15図 SC003及び出土遺物実測図1(1/60, 1/3)



第16図 SC003出土遺物実測図2(1/3)

(2) 壺穴住居跡

SC003 (第15図、写真49)

調査区南東側で検出する。主軸方位はN-25°-Wにとり、他の壺穴住居と異なる。南北長6.5m、東西長4.9mの平面隅丸長方形を呈する。東壁沿いを除く3方に高さ10cm前後のベッド状遺構を巡らせる。主柱は2本で柱痕径は25cmを測る。中央に断面浅皿状の炉跡を設置するが、埋土は黒褐色土で炭化物は認められない。また、ベッド状遺構のない東壁沿い中央には不整形の浅い掘り込みを設ける。埋土は上半暗褐色土、下半はにぶい黄褐色土で、床面・ベッド状遺構は暗褐色土と黄褐色土の混合土による貼床を行う。遺物はコンテナ4箱出土し、古墳時代前期に位置付けられる。

出土遺物 (第15・16図、写真93) 76~84は埋土出土、85~88は貼床出土、89~94はP1出土、95はP2出土である。76・79は布留式甕である。口縁部外面には煤が付着する。77は丸底の外面はヘラナデ、これ以外は胴部内外面刷毛目による。78は内面刷毛目、胴部外面はタタキの後、上半横刷毛、下半縦方向のヘラナデを行う。80は鉢、81は高杯、82・83は手づくねの小椀である。84は外側タタキ、内面及び端部上面には刷毛目を施す。85は鉢で外側ヘラナデ、内面刷毛による。86は高杯、87・88は椀である。89は布留式甕、90は直口で胴部外面にタタキが残る。91・92・95は小椀で91は橙色の精製品である。93・94は高杯である。

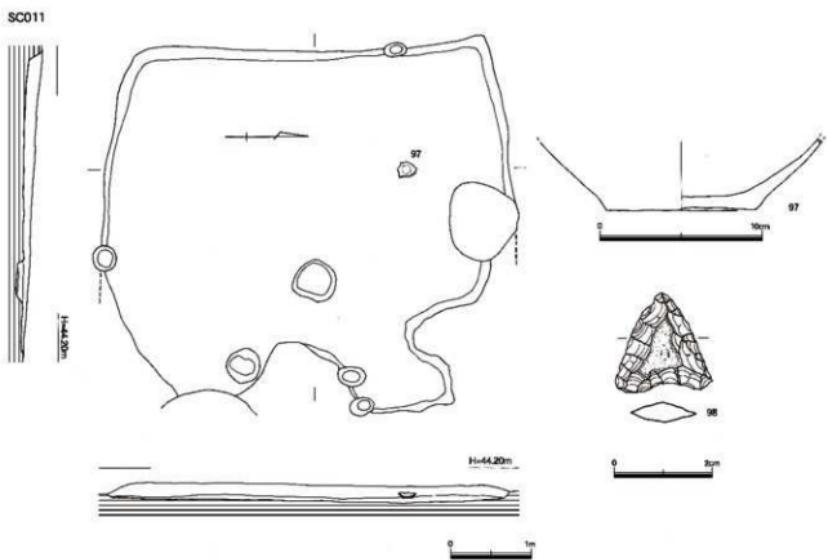
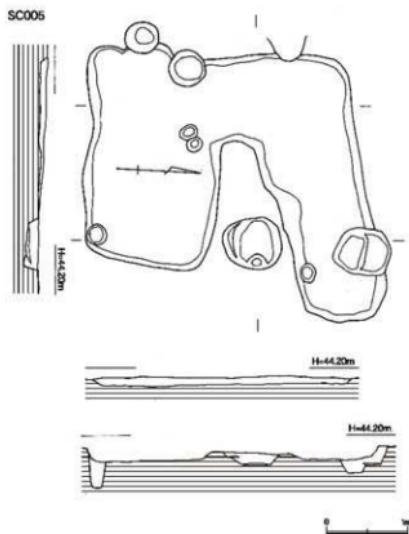
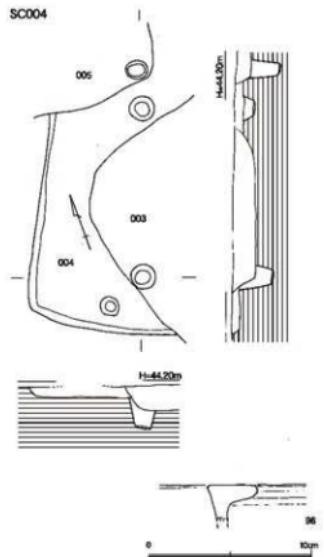
SC004 (第17図、写真50)

調査区南東側で検出し、SC004→SC003・SC005の前後関係となる。主軸方位はN-26°-Eにとり、西側コーナーの一部が残るのみである。埋土は褐色土で、主柱等は不明である。遺物は小破片が少量出土するのみであるが、弥生時代中期後半～古墳時代初頭の間に位置付けられる。

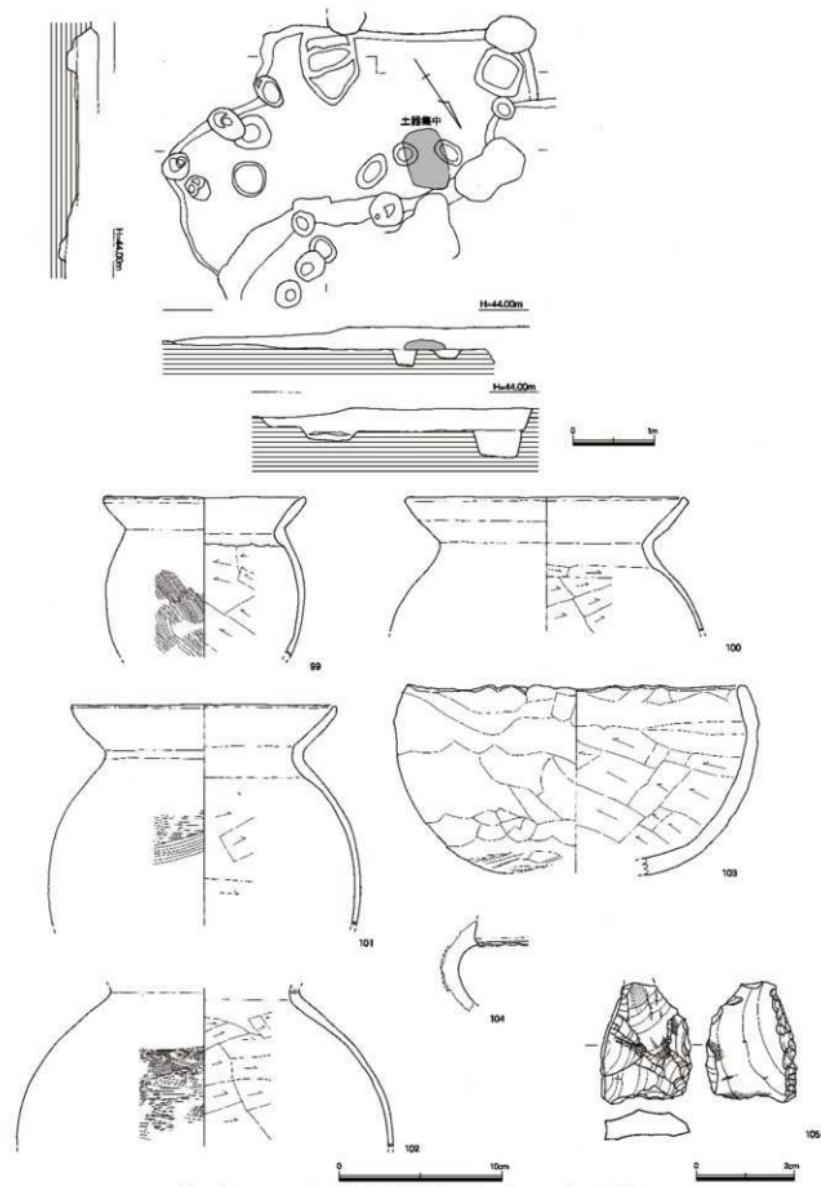
出土遺物 (第17図96) 逆L字形を呈する甕の口縁部である。横ナデで上面は水平となる。

SC005 (第17図、写真51)

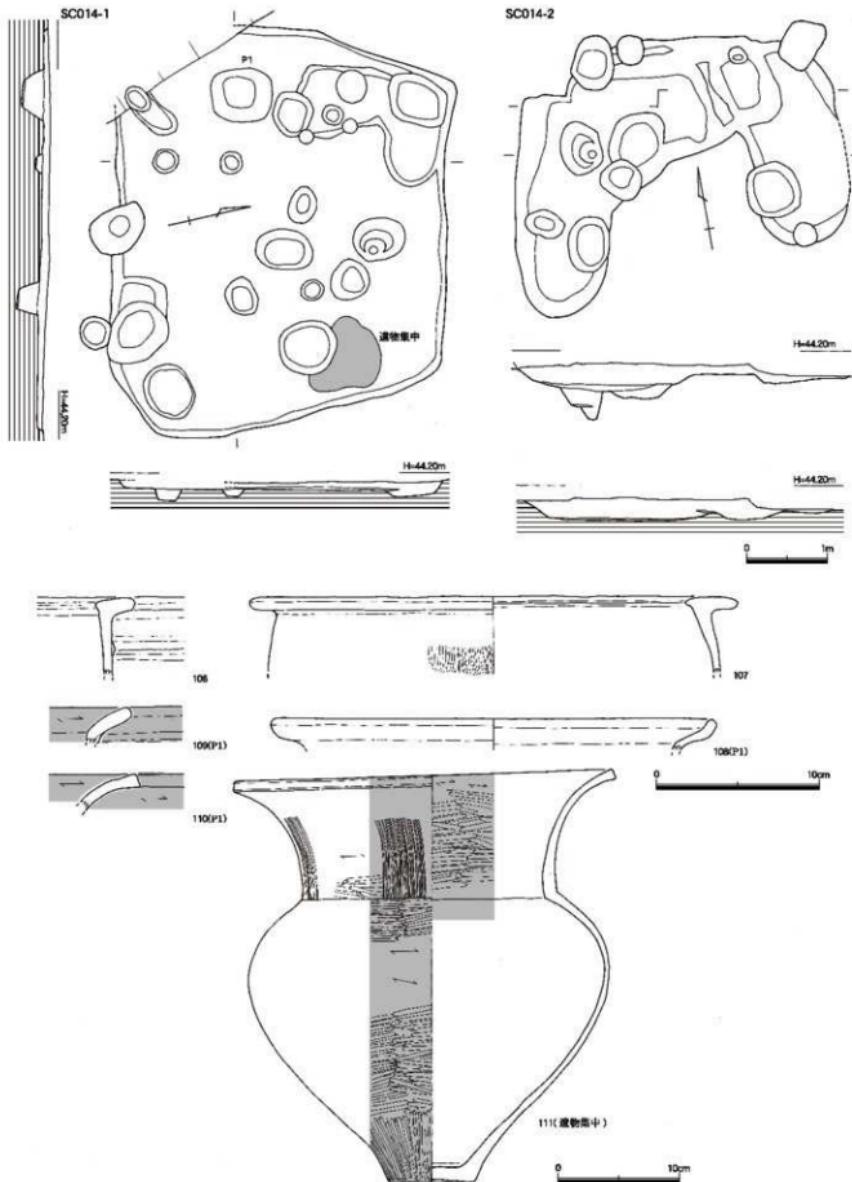
調査区南東側で検出し、SC004→SC003・SC005の前後関係となる。凹字形に検出し、埋土は褐灰色で、壺穴住居の掘り方最下部の貼り床部分が残存しているものと考えられる。小破片が少量出土するのみである。



第17図 SC004・005・011及び出土遺物実測図(1/60, 1/1, 1/3)



第18図 SC013及び出土遺物実測図(1/60, 1/1, 1/3)



第19図 SC014-1・2及び出土遺物実測図(1/60, 106~110は1/3, 111は1/4)

SC011（第17図、写真52）

調査区中央で検出し、SC023→SC018→SC019→SC011→SB042の前後関係となる。主軸方位はN-0°にとり、東半部は削平により壁が失われている。南北長は4.9mを測り、埋土はオリーブ褐色土で、主柱・炉跡等は検出していない。遺物は小破片が少量出土するのみで、詳細は不明であるが、切り合い関係等より、弥生時代中期後半に位置付けられておきたい。

出土遺物（第17図97・98、写真93） 97は床面直上出土である。僅かに中央がくぼむ平底の底部である。橙色を呈し、石英砂粒を多く含む。98は黒曜石製石鎌である。

SC013（第18図、写真53）

調査区南側で検出し、SD006に北半部分を削平されている。平面プランが不明瞭となっているが、床面はほぼ平坦であり、複数棟の切り合いでなく、少なくとも南側にはベッド状造構が存在していた可能性が考えられる。埋土は黒褐色土で、主柱・炉跡等は不明である。床面に直上で土器がまとめて出土する箇所がある。遺物はコンテナ2箱出土し、古墳時代前期の甕が主体となる。

出土遺物（第18図、写真93） 99～102は甕である。100・101の口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は僅かにつまみ出す。103は椀である。指押さえの後内外面粗いヘラ削りを行う。104は二重口縁の一部である。内面の剥落が進んでいる。105は黒曜石製の加工痕のある剥片である。

SC014-1・2（第19図、写真54・55）

調査区中央西側で検出し、SC014-2→SC014-1の前後関係となる。SC014-1は南西コーナーの一部が調査区外となるが、南北長4.1m、東西長5mを測るやや不整な長方形を呈する。埋土は暗褐色土で、主柱等は不明である。遺物北東床面上に遺物集中部分がある。SC014-2は埋土灰黄褐色土で、四字形の掘り方を検出した。埋土・形状より竪穴住居の貼り床のみが残存している可能性が高い。とともに住居内の施設については不明である。SC014-1からは弥生時代中期後半の遺物が出土している。また、SC014-2は小破片が僅かに出土するのみである。

出土遺物（第19図、写真93） 図示した遺物はいずれもSC014-1出土である。106・107は甕口縁部である。108は口縁端部を嘴状に上方につまみ上げる。109～111は丹塗り土器である。111は遺物集中部分から出土し、完形に近く復元できる広口壺である。外面全面及び口縁部内面にヘラミガキを行なう。外面及び頸部内面まで顔料を施す。

SC018（第20図、写真56・57）

調査区中央で検出し、SC023→SC018→SC019→SC011→SB042となり、SK052との前後関係は不明である。主軸方位はN-9°-Eで、南北長5m、東西長3.6mの隅丸長方形を呈する。埋土はオリーブ褐色土でSC011に類似する。主柱・炉跡等は不明である。西壁沿いを除いて三方向に四字形に溝状に暗灰黄色土の貼床を行っている。遺物はコンテナ1箱出土し、弥生時代中期後半に位置付けられる。

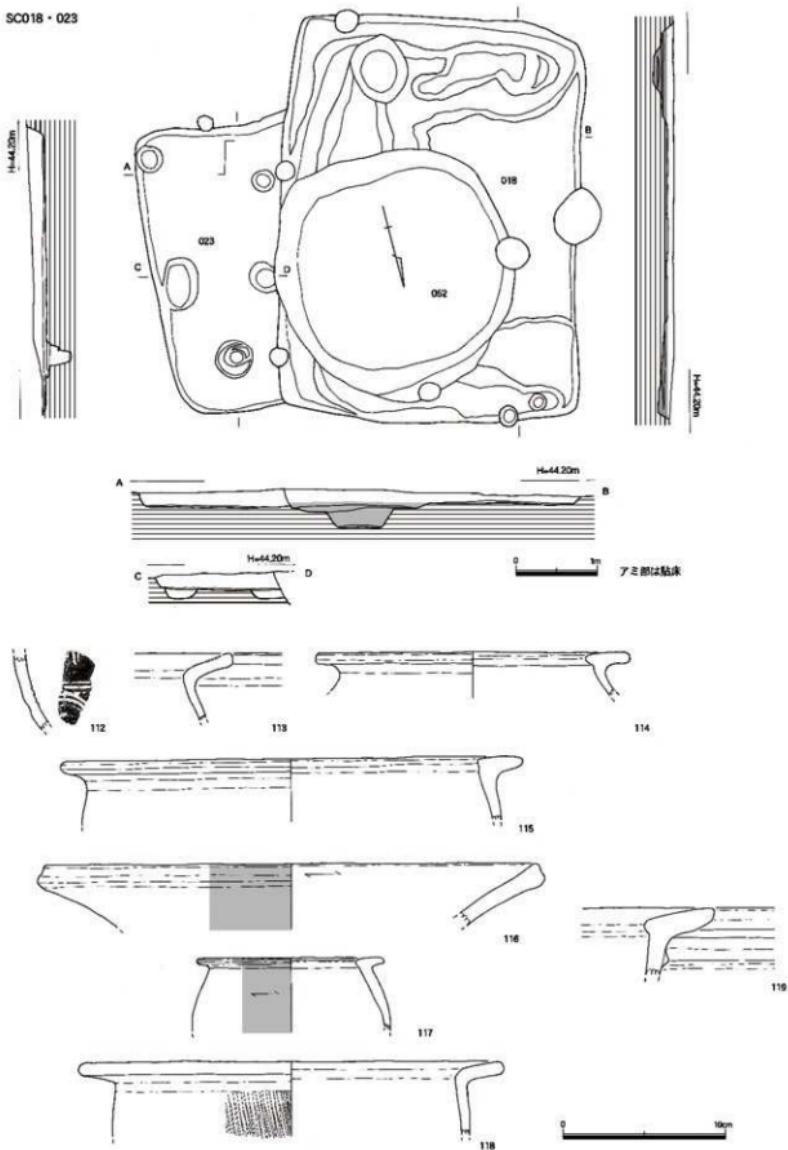
出土遺物（第20図112～118） 112～116は上層埋土出土、117・118は貼り床出土である。112は小壺頸部である。外面には沈線による文様を刻む。113～115・118は甕口縁部、116・117は丹塗り土器である。

SC019（第21図）

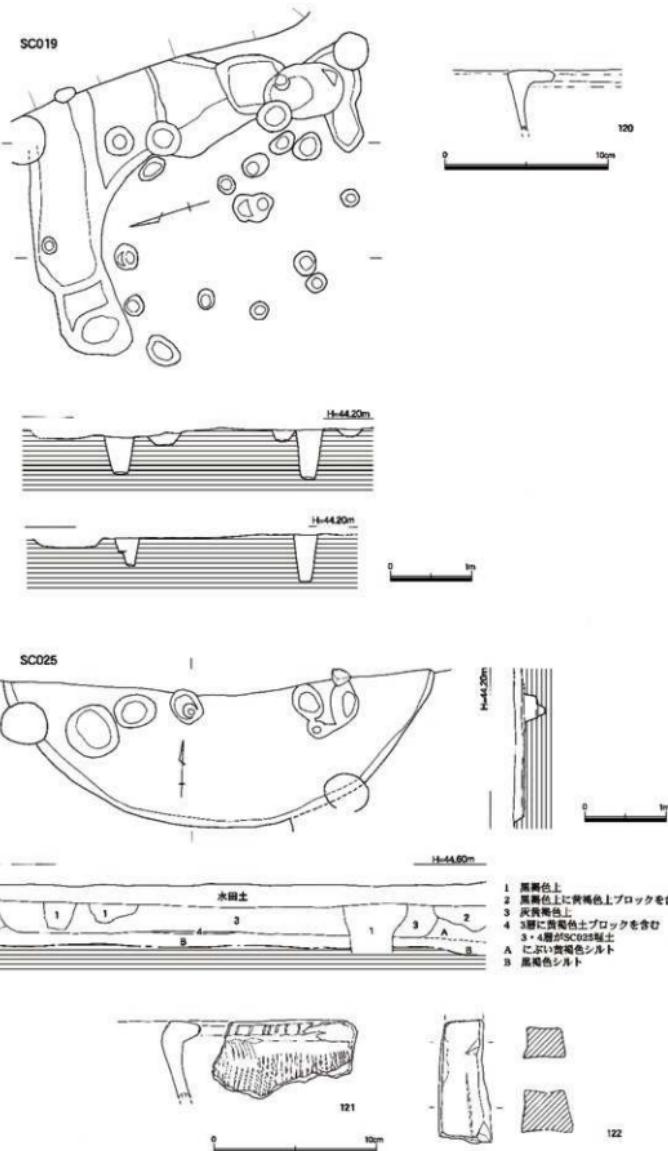
調査区中央で検出し、SC023→SC018→SC019→SC011→SB042の前後関係となる。四字形の溝状の掘り方であり、竪穴住居跡の貼り床部分が残存しているものであると考えられる。埋土は黒褐色土に黄褐色土ブロックを混合したものである。住居に伴う主柱・炉跡等は不明である。出土遺物は小破片のみであるが、切り合い関係等から弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物（第21図120） 逆L字形を呈する口縁部破片で、上面は水平となる。

SC018・023



第20図 SC018・023及び出土遺物実測図(1/60, 1/3)



第21図 SC019・025及び出土遺物実測図(1/60, 1/3)

SC023（第20図、写真56）

調査区中央で検出し、SC023→SC018の前後関係となる。西側をSC018に削平され、南北長3.4mを測る。埋土は黄褐色土で、P1の埋土底面から2cmは炭層であるが、被熱痕跡等は検出していない。遺物は小破片が出土するのみであるが、丹塗り土器を含む弥生時代中期後半代の土器が出土している。

出土遺物（第20図119） 翼形の口縁部で、上面は内傾する。また口縁下には三角突帯を貼付する。

SC025（第21図、写真58・59）

調査区北端で検出し、北半は調査区外となる。直径5.5mの円形住居で、埋土は灰黄褐色土である。主柱・炉跡等は不明である。遺物は小破片が少量出土するのみであり、図示したもの以外に丹塗り土器破片も出土しており、弥生時代中期後半代に位置付けておきたい。また、土層図B層はSX055 2・4層に対応する撚糸文土器包含層であり、北壁際を掘り下げた際にも撚糸文土器（4）が出土している。

出土遺物（第21図121・122） 121は口縁部の張り出しが短い断面コ字形を呈する。端面には刻みを施し、外面は縱刷毛を行う。122は砂岩製の仕上げ砥石である。全面を砥面としている。

SC027（第22図、写真60・61）

調査区北側で検出する。長径7.5m、短径6.7を測る円形住居である。床面は壁際に向かって緩やかに傾斜し、東側には一段高い張り出し状の高まりを有する。埋土は上面暗褐色土、下半は灰黄褐色土で、切り合い関係は認められなかった。床面中央に土坑状の掘り方を有し、その東側床面に炭化物が薄く広がる。また、北側壁沿いには隅丸長方形の掘り込みがある。ピットの埋土は黄褐色土～灰黄褐色土で、床面から50cm以上の深さを有するピットを網掛けで表示しており、これらが主柱になるものと考えられる。遺物はコンテナ4箱出土しており、弥生時代中期後半代に位置付けられる。

出土遺物（第23図、写真93） 123～125は甕である。124は内傾する翼形、125はく字形を呈する。126は平底の底部。127～130は丹塗り土器である。127は全体の1/2が残存する。131は頁岩製の砥石である。132・133は黒曜石で、132は使用痕のある剥片、133は加工痕のある剥片である。

SC035（第24図、写真62・63）

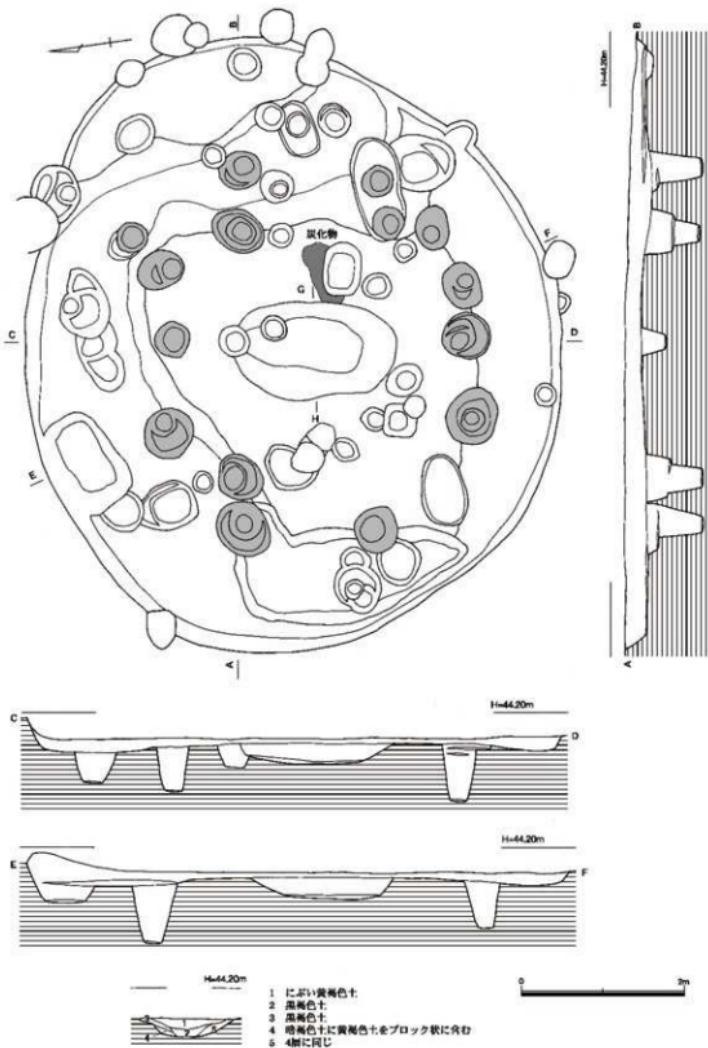
調査区北側で検出し、SC044→SC035の前後関係となる。南北長5.2m、東西長3.4mの隅丸長方形で埋土は暗褐色土である。床面は平坦であるが、北側壁沿いに緩やかな褐灰色土の掘り込みを有し、貼り床が行われている。床面中央には被熱痕跡が残っている。また、床面直上から2個の花崗岩自然礫が出土しているが、北側壁の上面には被熱痕跡が認められる。東壁際中央に暗褐色土埋土の掘り込みを有し、甕（139）が破損した状態で出土している。遺物はコンテナ2箱出土しており、弥生時代中期後半～末に位置付けられる。

出土遺物（第24図、写真93） 134は翼形の口縁部、135は平底の底部である。136はく字形の口縁部が内湾気味となる。137は口縁部上面に2箇所の穿孔を有し、内外面には煤が付着する。138は内湾する口縁部で、内側にも張り出す。外面に丹塗りを施す。139はP8出土である。完形近くに復元でき、外面全体に煤が付着する。140・141は黒曜石製石鐵、142は黒曜石の加工痕がある剥片である。

SC036（第25図、写真64・65）

調査区北端で検出し、北半は調査区外となる。SC025の南側に隣接し、これと同様、直径5.5m程度の円形に復元できる。埋土は上半黒褐色土、下半灰黄褐色土である。断面図には炭化物・焼土を含む黒色土（7層）が検出でき、炉跡と考えられる。遺物は小破片のみであるが、丹塗り土器破片の出土から、弥生時代中期後半代に位置付けておきたい。また、周辺では古代の柱穴（1層）がまとまって検出されている。壁際には排水溝を掘削した際出土した遺物を参考までに図示（145～147）する。

出土遺物（第25図143～147） 143はく字形を呈する丹塗り土器口縁部である。144は上面を水

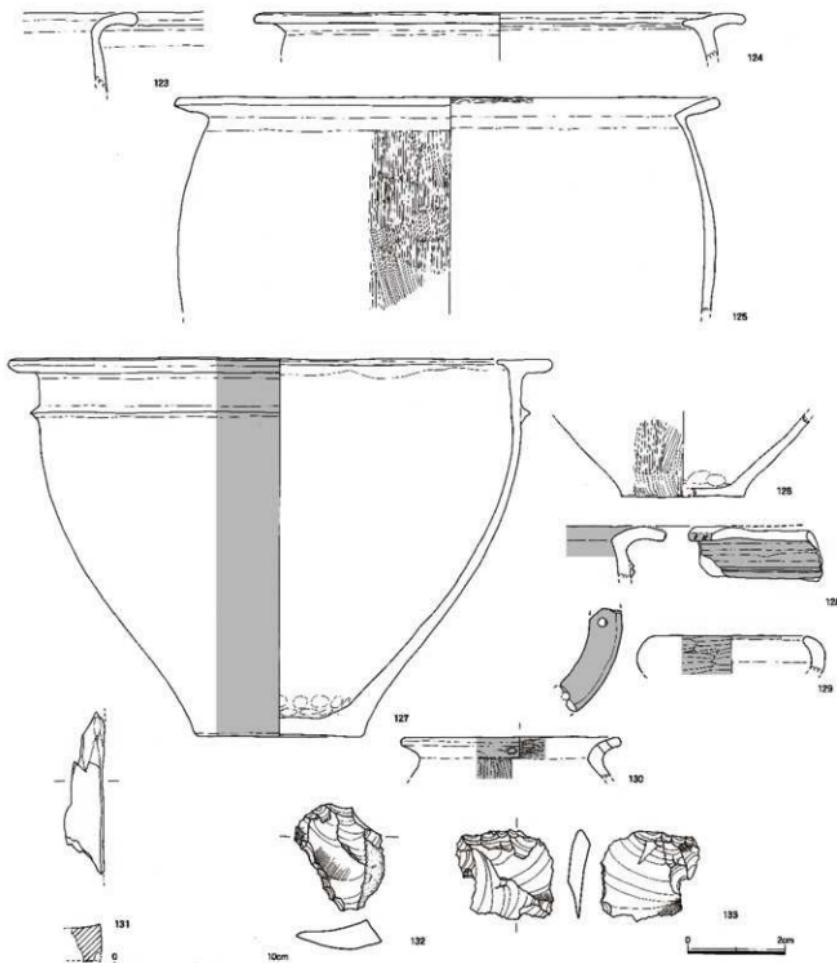


第22図 SC027実測図(1/60)

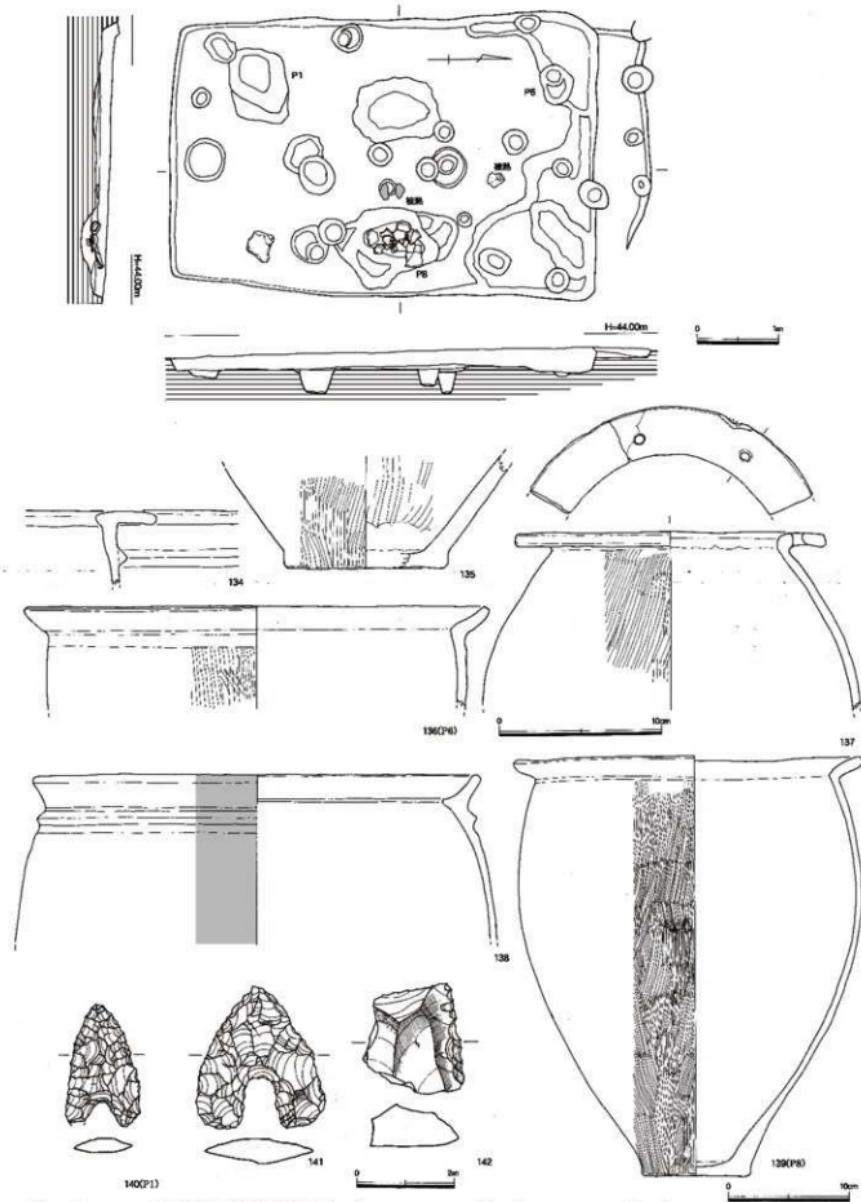
平にする鋸形口縁部である。145～147は住居跡を切る遺構からの出土と考えられる須恵器である。

SC044（第25図、写真66）

調査区北側で検出し、SC044→SC035の前後関係となる。主軸方位はSC035と同じである。南北長は4.2m、東西長2.4mを測る。埋土は黒褐色土に黄褐色土がブロック状に混合している。主柱・炉跡等の施設は不明である。小破片のみの出土で詳細は不明であるが、出土遺物や切り合い関係などから弥生時代中期中頃～後半代に位置付けておきたい。

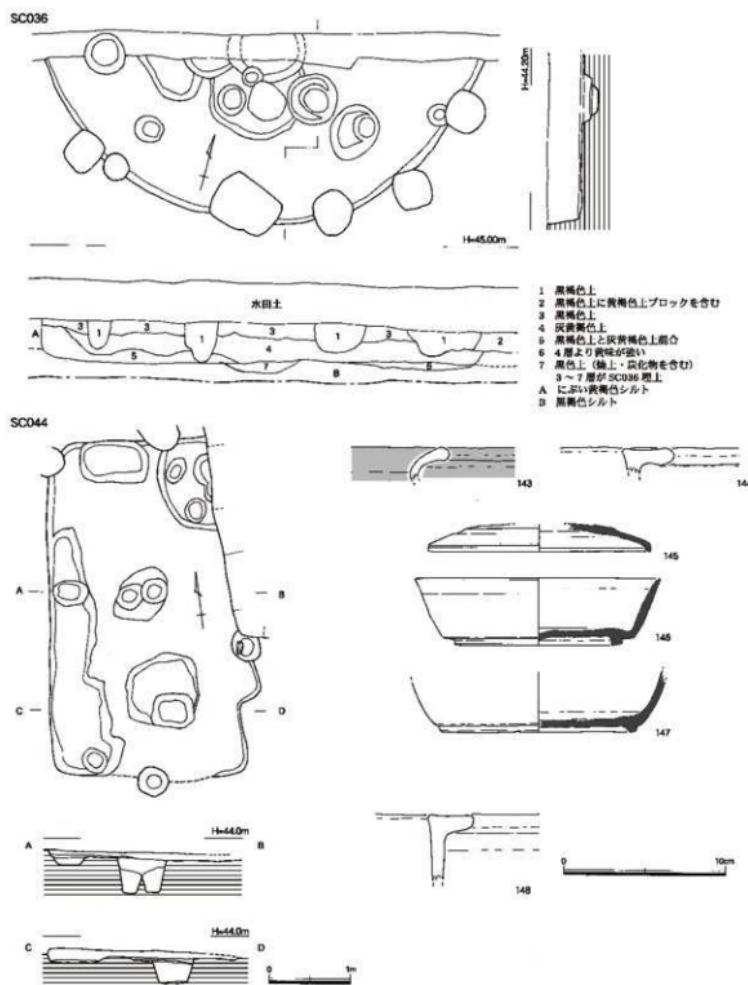


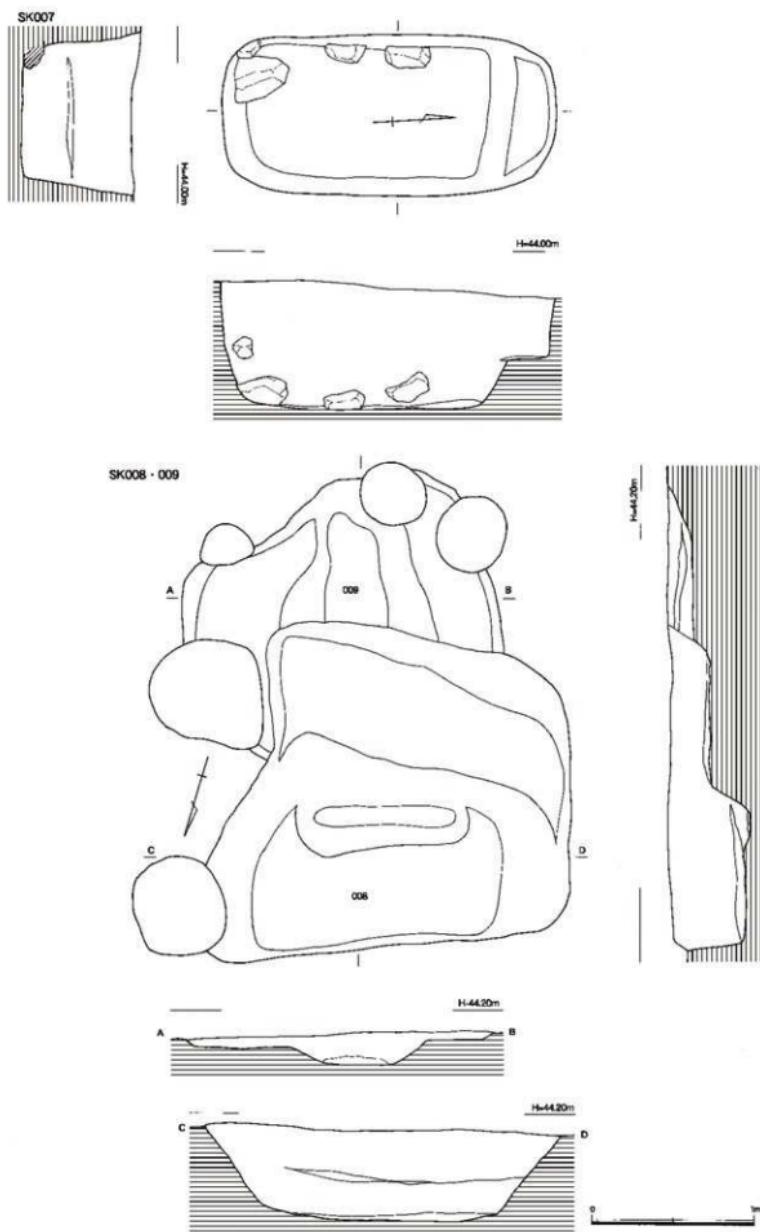
第23図 SC027出土遺物実測図(132・133は1/1、その他は1/3)



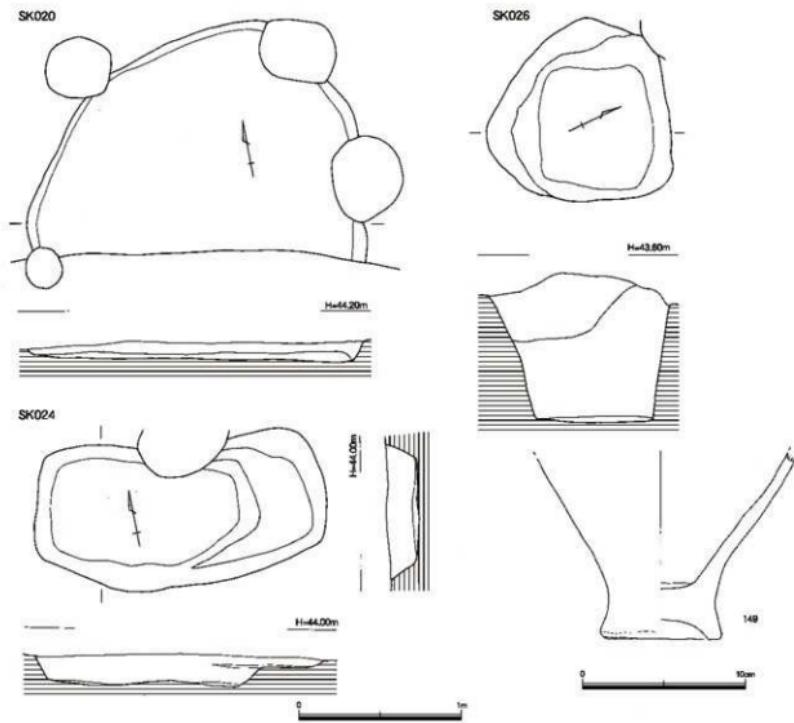
第24図 SC035及び出土遺物実測図(1/60, 140~142は1/1, 134~137は1/3, 138・139は1/4)

出土遺物（第25図148） 148は上面の擾乱からの出土で、遺構に伴うものではなく参考資料である。断面は鉗形を呈し、外側への延びは短く、上面は水平となる。





第26図 SK007・008・009実測図(1/30)



第27図 SK020・024・026及び出土遺物実測図(1/30, 1/3)

(3) 土坑

SK007 (第26図、写真67)

調査区南側で検出し、主軸方位はN-3°-Eである。南北長2.05m、東西長1mを測り、平面隅丸長方形を呈する。埋土は検出面から20cm程は褐灰色土で以下はオリーブ褐色土となる。また、南端部では上層と下層の間に厚さ3cm程度の炭層が認められた。底面は平坦で北側に一段高い平坦面を有する。なお壁面に認められる自然礫は自然堆積層中に含まれているものである。出土遺物は僅少で詳細な時期は不明であるが、埋土から弥生時代の遺構と考えられる。

SK008 (第26図、写真68)

調査区南側で検出し、SK009→SK008→SC003の前後関係となる。南北長2m、東西長2.2mを測り、平面やや不整な隅丸方形を呈する。埋土は暗褐色土と黄褐色土の混合土である。底面は中央がややくぼみ、南北両側に平坦面を有する。出土遺物は僅少で弥生時代中期に位置づけられる土器小片と黒曜石剥片2点が出土するのみである。

SK009 (第26図、写真68)

調査区南側で検出し、SK009→SK008→SC003の前後関係となる。復元南北長1.8m、東西長2mを測る。埋土は褐色土である。底面は中央が深くなり、東西両側に平坦面を有する。出土遺物は僅少で弥生時代中期に位置付けられる土器小片と黒曜石剥片2点が出土するのみである。

SK020 (第27図、写真69)

調査区中央西側で検出し、SK020→SC018の前後関係となる。南側をSC018に削平され失うが、東西長2.1mを測り、平面は不整な円形に復元できる。埋土は褐色土である。遺構の残存状態は不良で、壁高5~10cmを測り、底面はほぼ平坦である。出土遺物は僅少で弥生時代中期と考えられる土器小片が数点出土するのみである。

SK024 (第27図、写真70)

調査区中央で検出し、主軸方位はN-79° -Wである。南北長0.9m、東西長1.8mを測り、平面やや歪な隅丸長方形を呈する。埋土は褐色土である。底面は平坦で、東側に一段高い平坦面を有する。出土遺物は僅少で土器小破片が出土するのみである。

SK026 (第27図、写真71)

調査区南側で検出す。南北長1.15m、東西長1.1mを測る。平面方形を基本とするが、南～西側の平面形が歪となっている。埋土は上半が暗褐色土で、下半が暗黄褐色砂質土である。底面は平坦で、壁はやや斜めとなるが、均整の取れた掘り方となる。出土遺物には図示したもののほかに、丹塗り土器片もあり、埋土等からも弥生時代中期後半とされる。

出土遺物 (第27図149) 上げ底の甕底部である。外面橙色、内面黒褐色を呈する。

SK043 (第28図、写真72・73)

調査区北側で検出し、主軸方位はN-10° -Wである。南北長3.15m、東西長0.7mを測る溝状の土坑である。断面は箱型に近く、壁は直立し底面はほぼ平坦となる。出土遺物は小破片が多く甕破片が主体となる。弥生時代中期初頭に位置付けられる。

出土遺物 (第28図) 150~157は口縁部破片である。いずれも端部外面に粘土帯を貼り付け、断面三角形に仕上げている。また端部外面には刻みを施すが、151は摩滅が進み不明である。158は胴部破片で三角形の突帯を貼り付け、刻みを施している。159は使用痕が認められる黒曜石の剥片である。

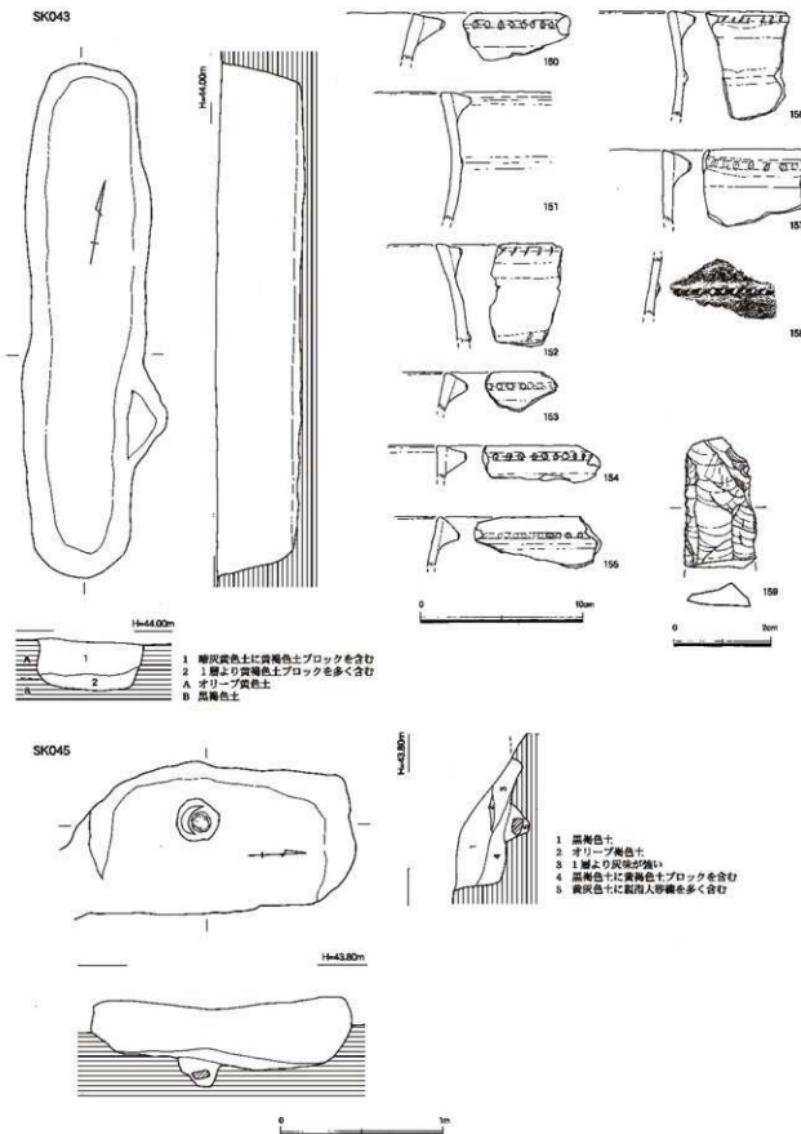
SK045 (第28図、写真74・75)

調査区北側で検出し、主軸方位はN-4° -Eである。水田造成により削平を受けているが、南北長1.7m、東西長1m以上を測り、平面隅丸長方形を呈する。壁は直立するが、底面には凹凸が多く認められる。また底面中央付近に径25cmの柱穴状の掘り込みがあり砂礫が充填されており、掌大の自然石が据えられている。図示し得ないが、出土遺物には弥生土器のほか、古代～中世前半までの土師器・須恵器、鍛冶滓がある。

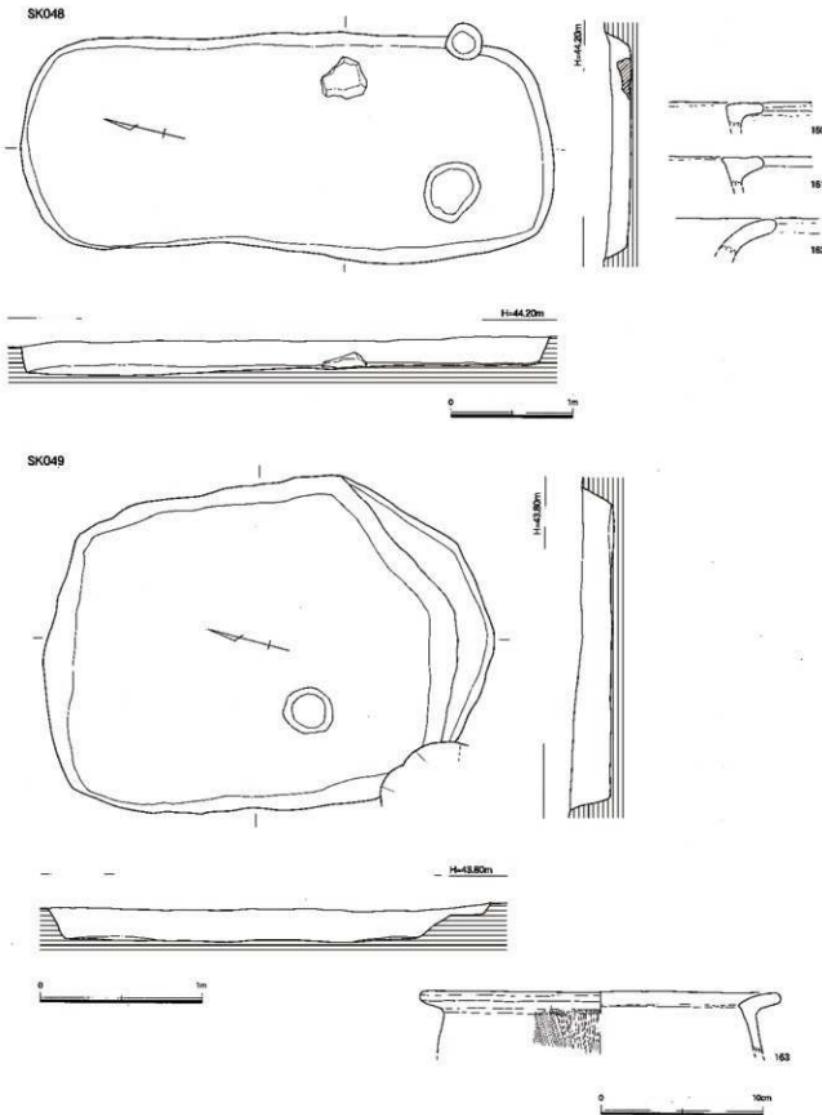
SK048 (第29図、写真76)

調査区北側で検出し、主軸方位はN-14° -Wである。南北長4.4m、東西長1.8mを測り、短辺が丸みを帯びた隅丸長方形を呈する。埋土は褐色土である。壁は直立し、底面は平坦である。床面で検出したピットは1基のみで、他には花崗岩自然礫が1個据えられているのみである。なお、礫に使用痕は認められない。出土遺物は土器小破片が出土するのみで、図示したものの他に丹塗り土器破片が出土しており、弥生時代中期後半に位置付けておきたい。

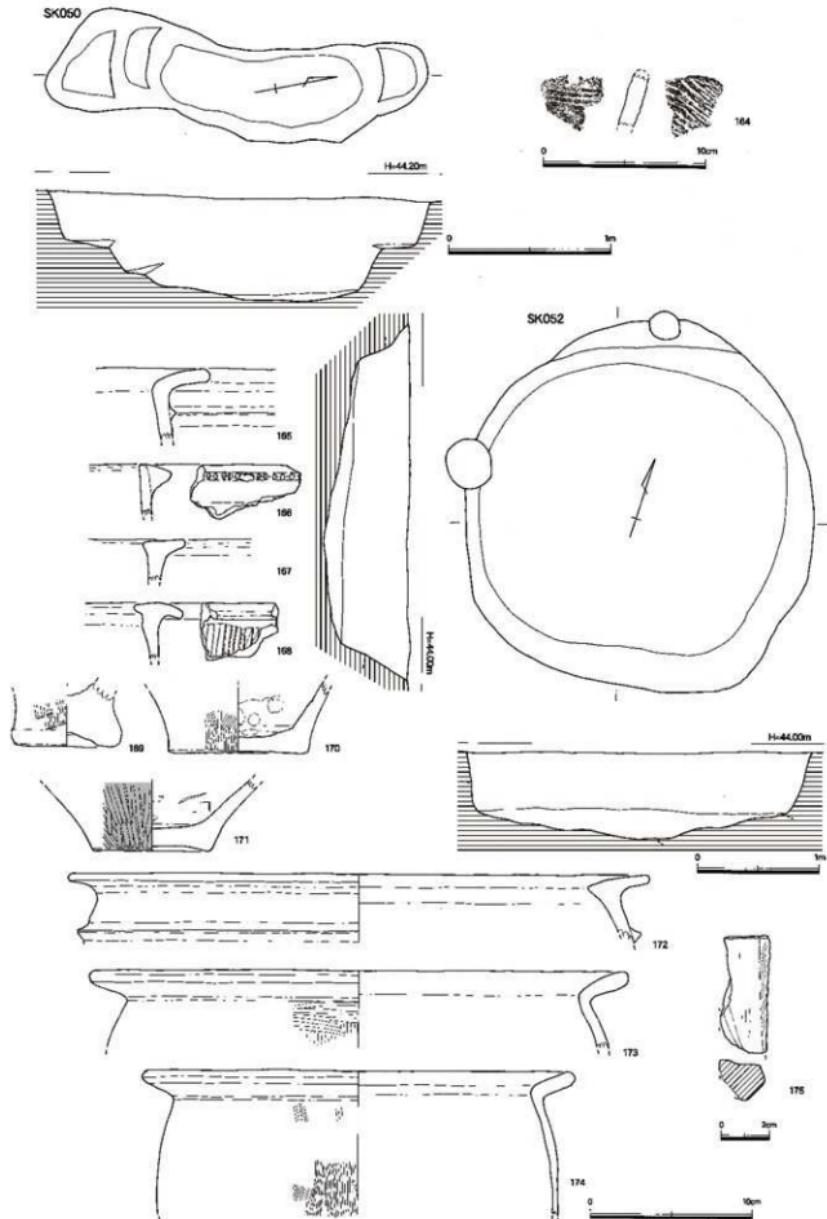
出土遺物 (第29図160~162) 160・161は逆L字形の口縁部破片である。上面はともに水平となる。162はく字形を呈する口縁部破片である。



第28図 SK043・045及び出土遺物実測図(1/30, 159は1/1, その他は1/3)



第29図 SK048・049及び出土遺物実測図(1/30, 1/40, 1/3)



第30図 SK050・052及び出土遺物実測図 (1/30, 1/40, 175は1/2, その他は1/3)

SK049（第29図、写真77）

調査区北側で検出し、SC035との切り合い関係は不明である。南北長2.7m、東西長2mを測り、平面形は歪な長方形となる。埋土は灰黄褐色土に黄褐色土ブロックを少量含む。壁は直立し底面は平坦となる。遺物は弥生時代中期後半に位置付けられる丹塗り土器を含む土器小破片と黒曜石・玄武岩剥片が出土する。

出土遺物（第29図163） 逆L字形を呈し、上面は内傾する。橙色を呈し、外面は縦刷毛を行う。

SK050（第30図、写真78）

調査区北側で検出し、SK049との前後関係は不明である。南北長2.3m、東西長0.6mを測る溝状を呈する。掘り方は階段状となり、埋土は灰黄褐色土である。出土遺物は土器小破片が出土するのみであり、丹塗り土器等から弥生時代中期後半代と考えられる。

出土遺物（第30図164） 図化し得たのは撲糸文土器破片のみである。撲糸幅は2mmと狭い。

SK052（第30図、写真57）

調査区中央西側、SC018床面で確認したが、前後関係は明らかでない。径2.8～3mの円形を呈し、壁は内湾気味で、床面は中央やや南側に向かって緩やかにくぼんでいる。埋土は暗灰黄色土に明黄褐色土ブロックを含む。遺物はコンテナ1箱分出土しており、丹塗り土器を含む弥生時代中期後半代の甕片が主体となり、黒曜石・玄武岩剥片が認められる。

出土遺物（第30図165～175） 165～168、172～174は口縁部破片である。断面三角形、逆L字形、鑓形、く字形が存在する。169～171は底部破片であり、上げ底・平底がある。170外側には2次的な焼成の痕跡が残り、171は丹塗り土器である。175は砂岩製の砥石破損品である。

（4）鍛冶関連遺構

SK001（第31図、写真79・80）

調査区南側で検出する。遺構検出時に南北長45cm、東西長55cmの範囲で茶褐色化した埋土を確認した。鍛冶津・鍛造剥片が認められ、鍛冶関連遺構の可能性が考えられたため、ここを中心として50cm角のグリッドを設定し、土砂の採取・水洗後、遺物収集のための磁選を行った。SK001は深さ8cm前後で、底面は平坦となる。壁面に被熱痕跡はなく炉壁も認められなかった。掘り方上面には再結合津が形成されており、また底面近くも茶褐色の埋土が鉄状に固化していた。出土遺物・形態から鍛冶炉ではなく、鍛冶作業に伴う排滓土坑と考えられる。時期を示す遺物は出土していないが、包含層等から出土する鍛冶津は古代～中世前半の遺物とともに出土しており、SK001もこの時期の鍛冶関連遺構と考えられる。SK001内から鍛冶津・再結合津4kg、鍛造剥片13.51g、粒状津0.5gが出土している。周辺グリッドからも出土しているが、削平も進んでおり剥片等は僅少である。

出土遺物（第31図） 176は64gを測る再結合津である。底面には径2～8mm程度の石英砂粒が付着している。また全面に鍛造剥片・木炭の付着が認められる。177は楕円形鍛冶津である。重量は321g、最大厚3.5cmを測る。底面には津の垂下による細かい凹凸が残り、木炭痕が付着するが、炉壁粘土は認められない。

（5）溝

SD006（第32図、写真81・82）

調査区南側で検出し、東側斜面に向かって幅の広がる自然流路と考えられる。SK007・SC013を切り、これらに後出するものである。1・2層は最も新しい堆積土で、2層には親指大小の小礫を非常に多く含み、直進して東側斜面に延びている。また、底面全体には不規則な凹凸が多く見られ、流水の作用と考えられる。遺物はコンテナ8箱分出土しており、摩滅の進んだ小破片が多い。主な遺物として

は弥生土器、古墳時代前期の土師器、古代の土師器・須恵器、中世前半に位置付けられる陶磁器、土師器皿・楕、滑石製品のはか鍛冶滓（6.6kg）・羽口などの鍛冶関連遺物が出土している。

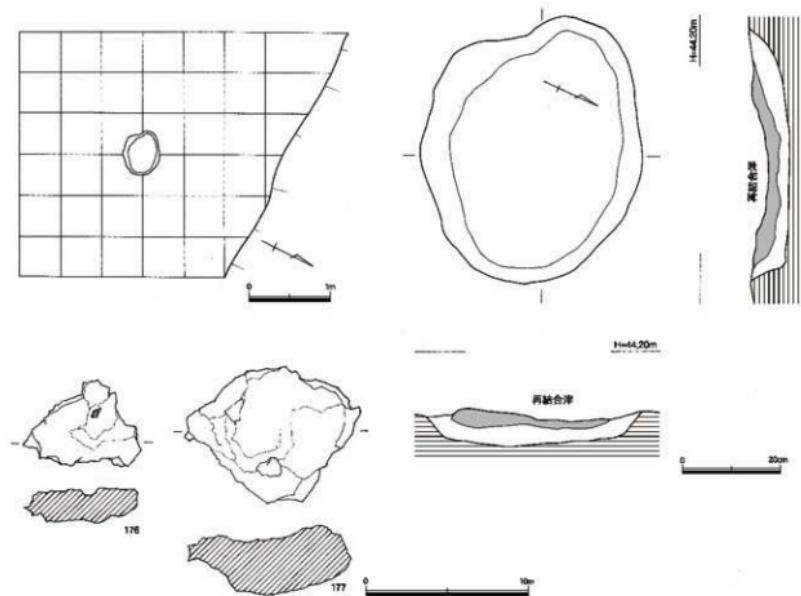
出土遺物（第32図、写真94） 178～181は白磁碗である。178は体部と底部の境まで釉を施す。179は玉縁、181は口禿げの口縁部である。182は陶器の壺胴部である。釉は暗オリーブ色、胎土は灰白色を呈する。183～185は土師器壺である。183は外底ヘラ切り、184・185は糸切りである。186は脚付の皿である。187は土師器脚付の楕である。外底はヘラ切りによる。188は内外両黒の黒色土器で、ともに精緻なヘラミガキを行う189は壺である。肩部外面には波状の沈線を施し、内面は横方向のヘラ削りによる。190は小型の壺である。胴部外面は粗い継刷毛、内面はヘラ削りによる。191は滑石製の小型容器、192は滑石製石鍋破片である。縦長の把手を有するもので、内面に再利用を意図した穿孔とそれに伴う計画線が刻まれている。193・194は羽口先端部分で、内径2.5cm前後に復元できる。195～197は楕形鍛冶滓である。重量はそれぞれ378g、186g、544gである。

（6）包含層

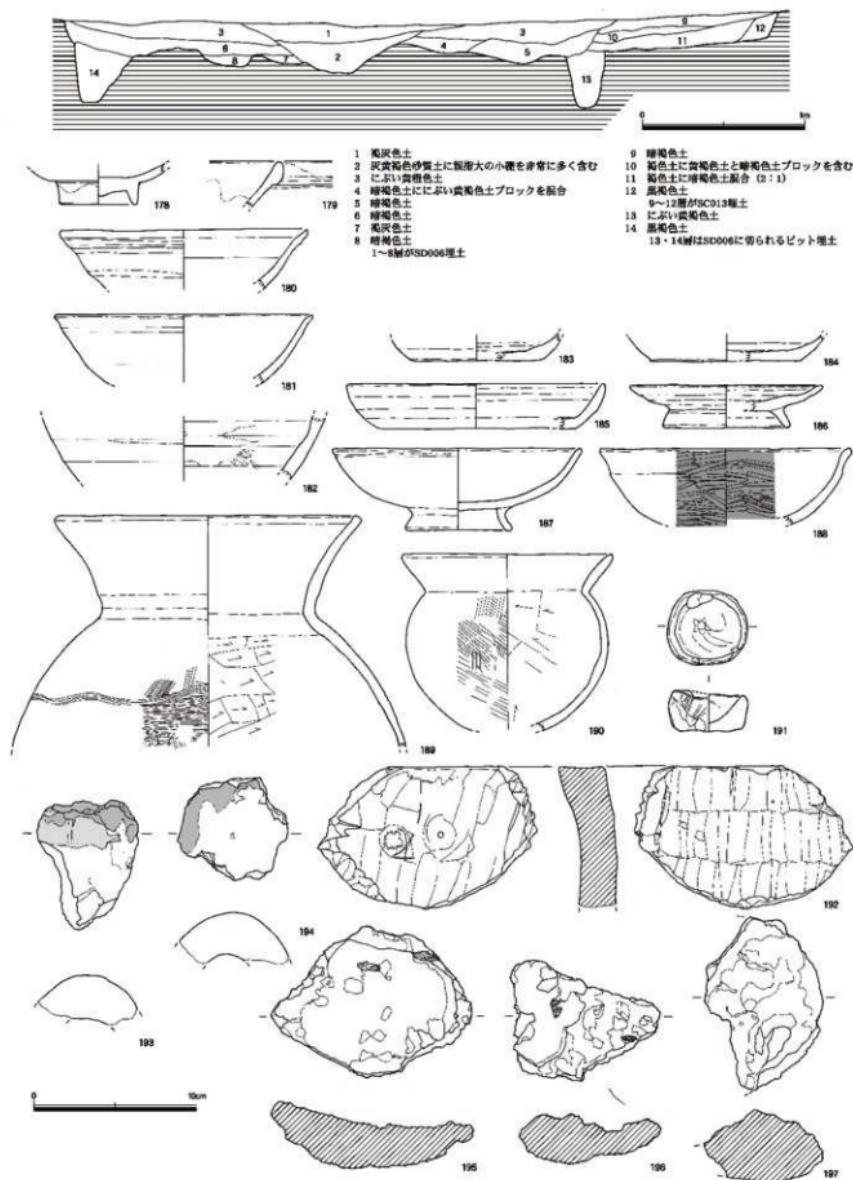
調査区東側の斜面先端部に古代～中世前半を主体とした包含層が形成されている（SX002・010・029等）。また、SX031はこれらとは異なり、斜面前面の低位部に弥生時代中期後半の土器が多い量に廃棄されているものである。

SX002（第33図、写真83・84）

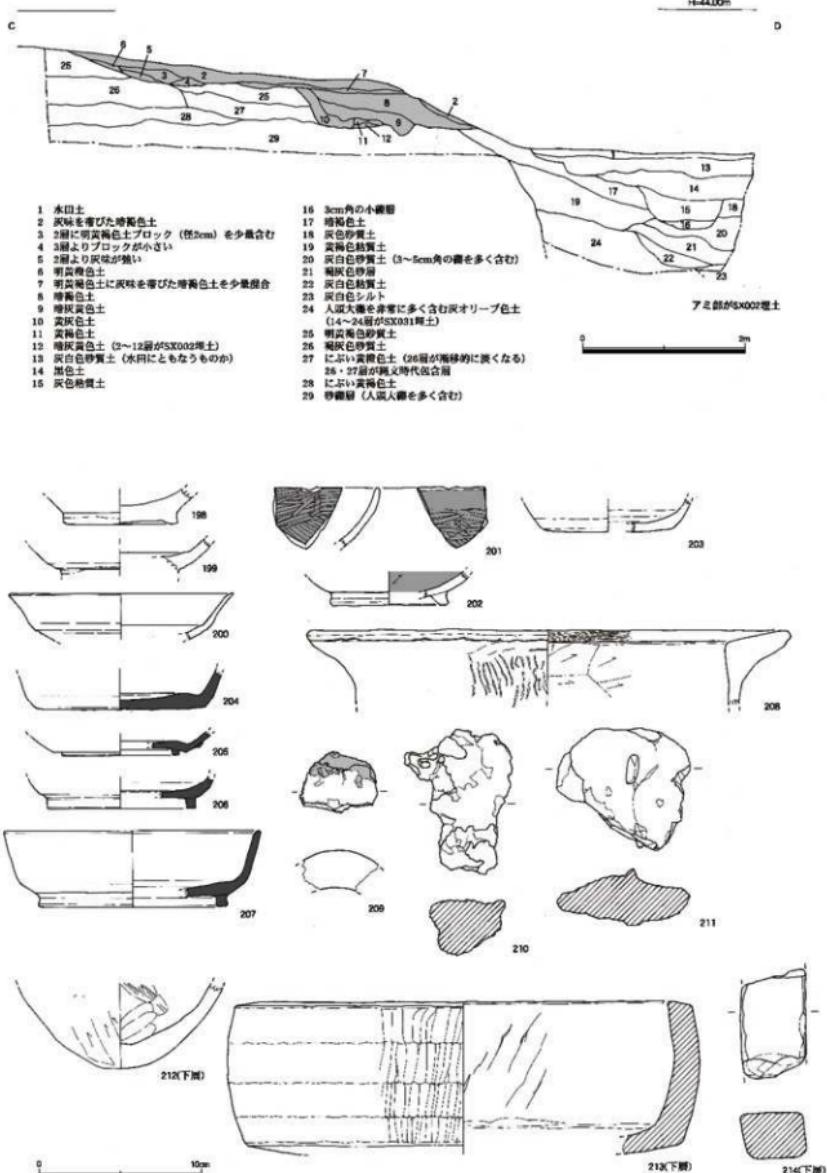
調査区東側斜面の南半部分全体に広がる包含層である。2～12層のうち上層の2～7層からは比較的



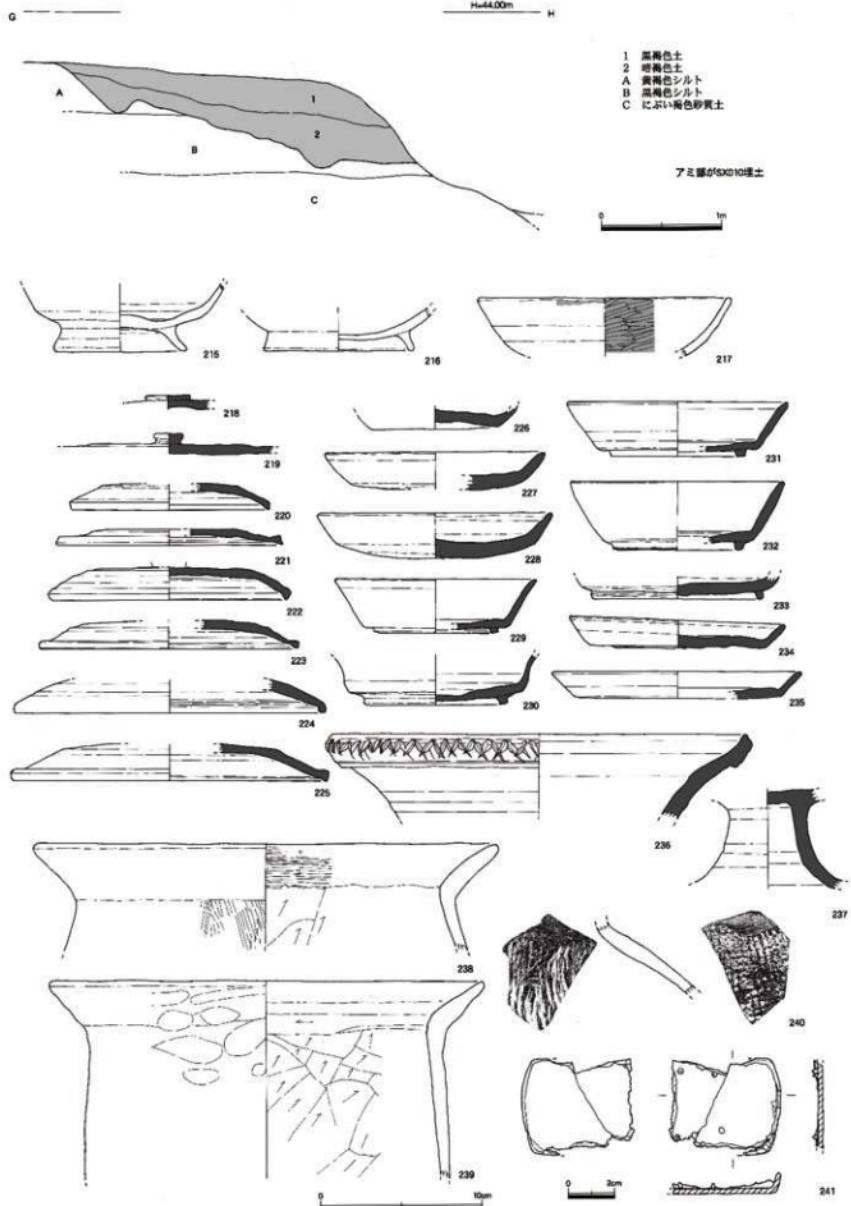
第31図 SK001及び出土遺物実測図(1/60, 1/10, 1/3)



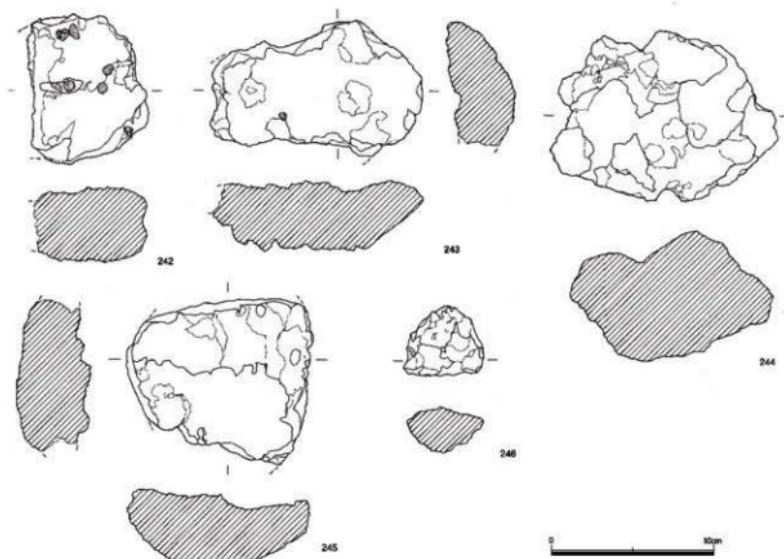
第32図 SD006土層及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第33図 SX002土層及び出土遺物実測図(1/60, 1/3)



第34図 SX010土層及び出土遺物実測図1(1/40, 241は1/2, その他は1/3)



第35図 SX010出土遺物実測図2(1/3)

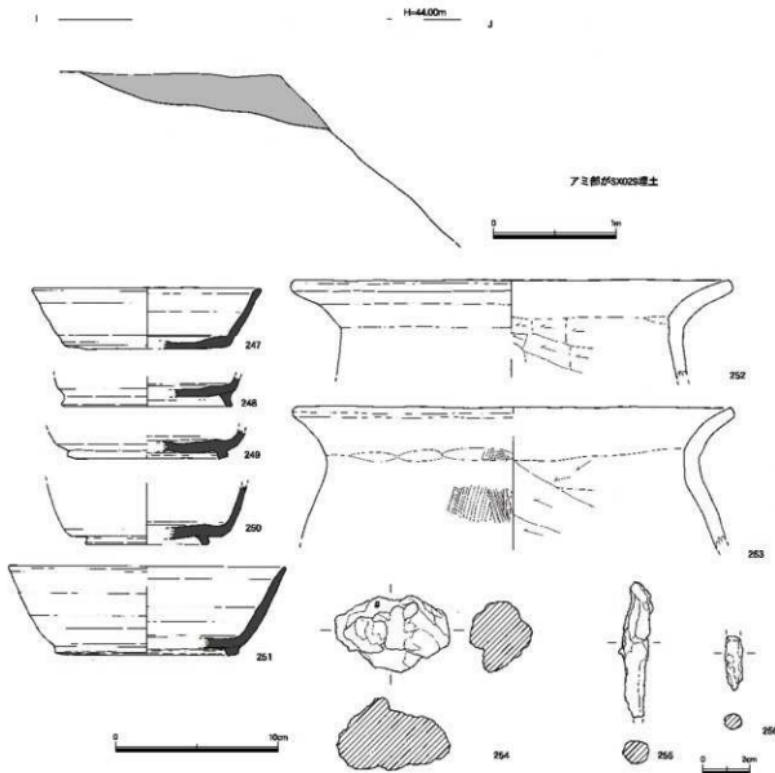
満遍なく遺物が出土し、下層の8~12層については8層から遺物がまとめて出土している。遺物はコンテナ12箱出土し、上層・下層に時期差は認められない。弥生土器、古代の土師器・須恵器、中世前半に位置付けられる陶磁器、土師器壺・皿・椀等のほか鍛冶滓(8.7kg)、羽口などが出土している。

出土遺物(第33図) 198~200は白磁碗・皿である。201は両黒の黒色土器椀、202は内黒の椀である。203はヘラ切りの土師器皿である。204~207は須恵器椀である。204は外底切り離し後未調整、その他は高台を有する。208は土師器壺である。209は羽口先端部、210・211は椀形鍛冶滓である。212は土師器壺底部で、外面は粗いヘラナデを行う。213は滑石製石鍋、214は仕上げの底石である。

SX010(第34図、写真85)

調査区中央の東端で検出する。SX002と一連の斜面上に堆積する包含層であるが、不整形の土坑状となっていたため、別の構造番号で取り上げを行った。人為的な掘りこみではなく自然堆積の包含層と考えられ、これより北側にも、SX029など同様の不整なくぼみに堆積した包含層が認められる。遺物はコンテナ6箱分出土しており、極少量中世前半代の白磁、黒色土器、土師器椀等が認められるが、大半は古代の須恵器椀・壺・皿・蓋・高壺・壺や土師器壺・椀・鍛冶滓(12kg)等である。

出土遺物(第34・35図、写真93) 215・216は土師器椀、217は内黒の椀である。218~237は須恵器である。蓋・壺・皿類は天井部及び外底面に回転ヘラ削りが行われず、切り離し後はナデを行うのみである。236は壺の口縁部で、玉縁に仕上げ外面に刻みを施す。237は高壺である。238~240は土師器壺である。240は外面に格子タタキ、内面に当て具痕が残る。241は青銅製品である。平面隅丸長方形に復元でき、外面は平滑に仕上げ、内側には固定用の突起が残る。飾り金具と考えられる。



第36図 SX029断面及び出土遺物実測図(1/40, 254~256は1/2, その他は1/3)

242~246はいずれも椀形鉢である。

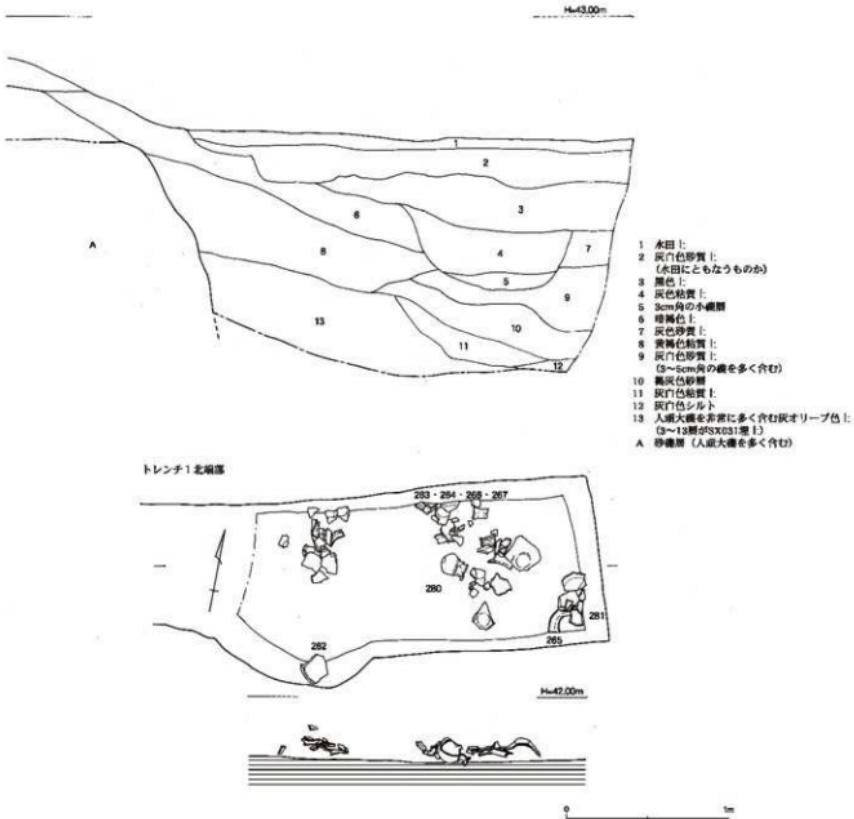
SX029 (第36図)

調査区北側の東端で検出する。SX010と同様の斜面上に堆積する包含層であり、不整形の土坑状となっている。埋土は黒褐色土である。極少量中世前半代の壺・皿類等が認められるが、大半は古代の須恵器・土師器・鍛冶滓(1kg)等である。

出土遺物 (第36図) 247~251は須恵器である。いずれも外底面に回転ヘラ削りを行わない。252・253は土師器甕である。口縁部はハ字形に広がり、胴部外面は綴刷毛・ナデにより、内面ヘラ削りを行う。254は鍛冶滓である。255・256は鉄釘である。

SX031 (第37図、写真86~88)

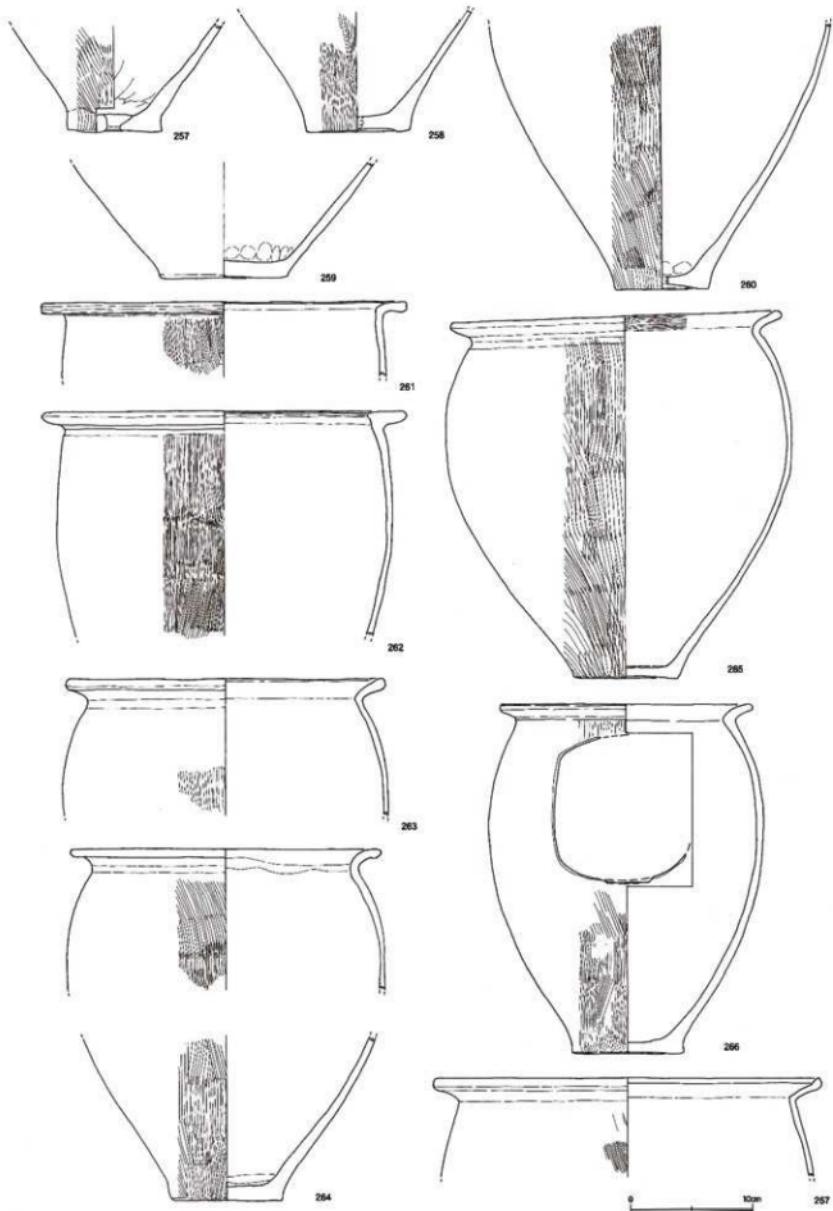
調査区南側で検出する。SX002から東側下位の水田面に向かっての堆積状況を確認するためのトレーニチを延長したところ、弥生時代中期後半代の遺物包含層を確認した(トレーニチ1)。遺物は3層以



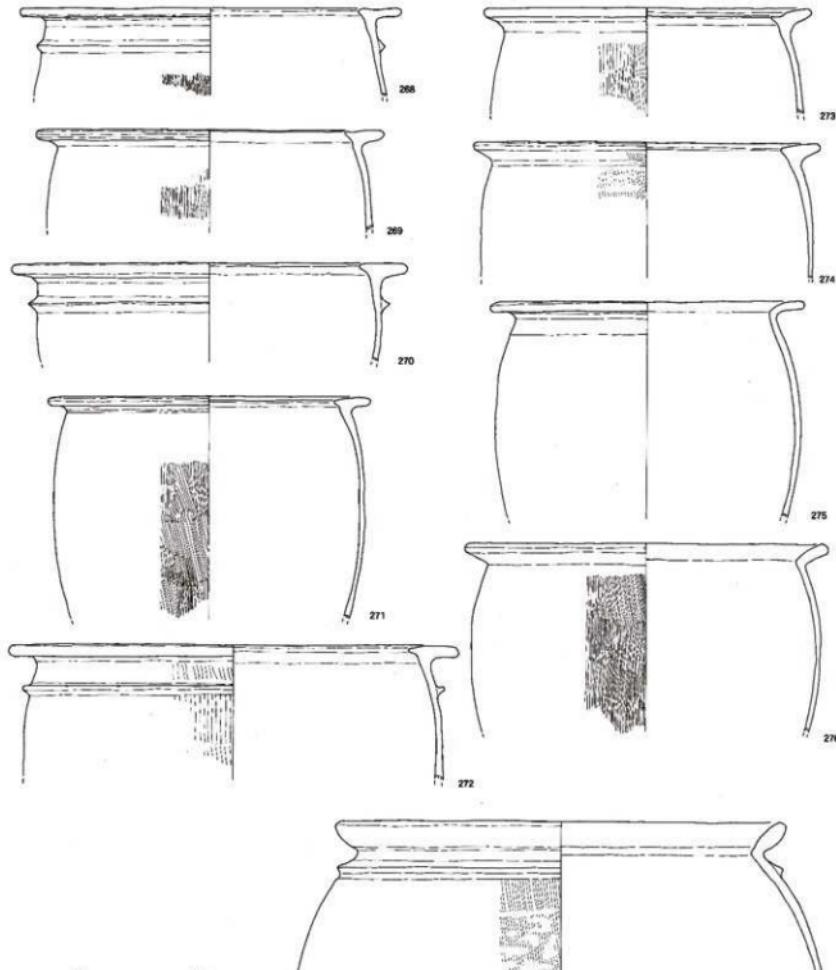
第37図 SX031実測図(1/30)

下から多量に出土し、特に3~8層でまとめて出土している。図示したものはトレンチ掘り下げ途中での、おおむね3層除去後の出土状況である。完形に復元できるものはないが、集中状態から丘陵前面の沖積地に人为的に廃棄されたものと考えられる。分布状態を確認するため北側にトレンチ2を設定し掘り下げを行ったところ、遺物の出土は認められたが、トレンチ1ほどの集中は見られなかつた。遺物は弥生時代中期後半でまとめており、コンテナ21箱分出土している。なお、本遺構は計画高から見ると工事による影響が認められないため、トレンチによる確認にとどめた。

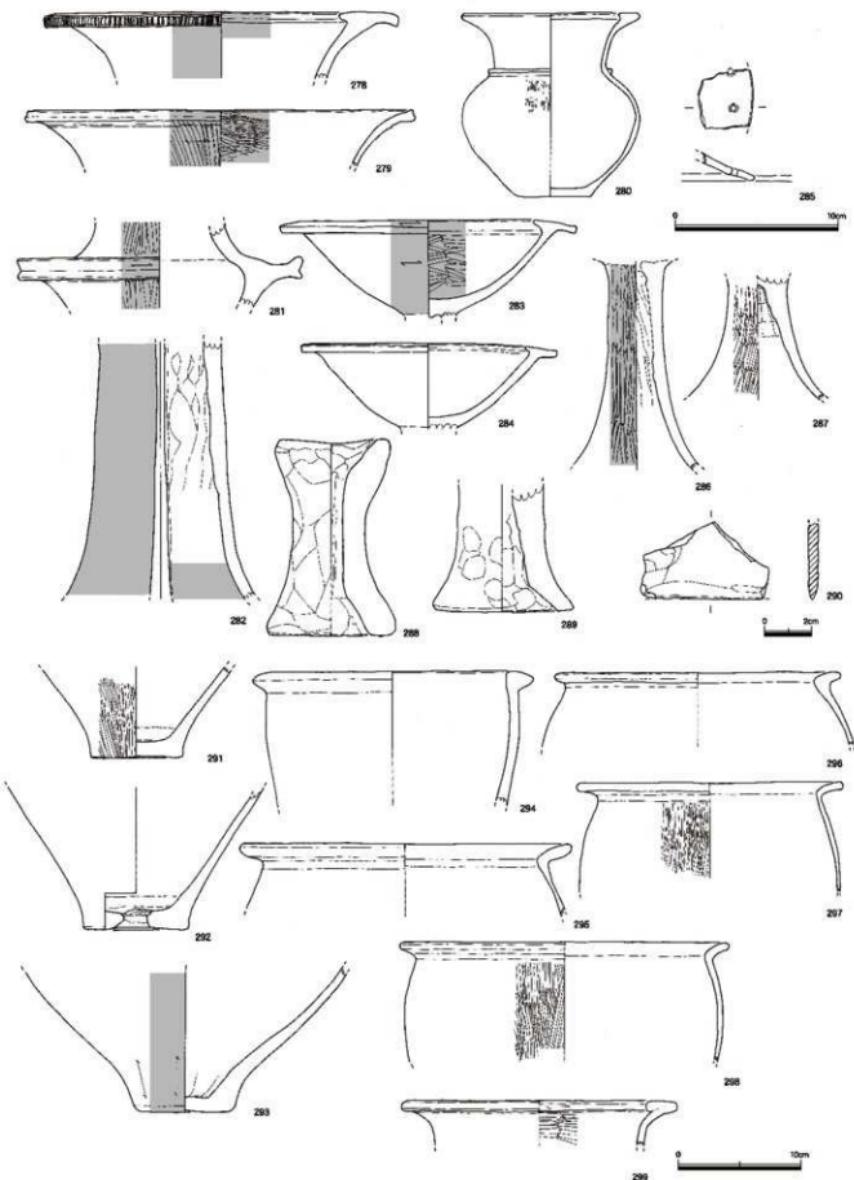
出土遺物（第38~40図、写真94） 257~290はトレンチ1出土である。257~277は甕である。底部はほぼ平底で、257には焼成前穿孔が行われる。口縁部は大半が鈍形およびく字形を呈する。266は胴部焼成前に $10 \times 11\text{cm}$ の略円形の透かし孔を切り取る。267はく字形の口縁端部を上部につまみ



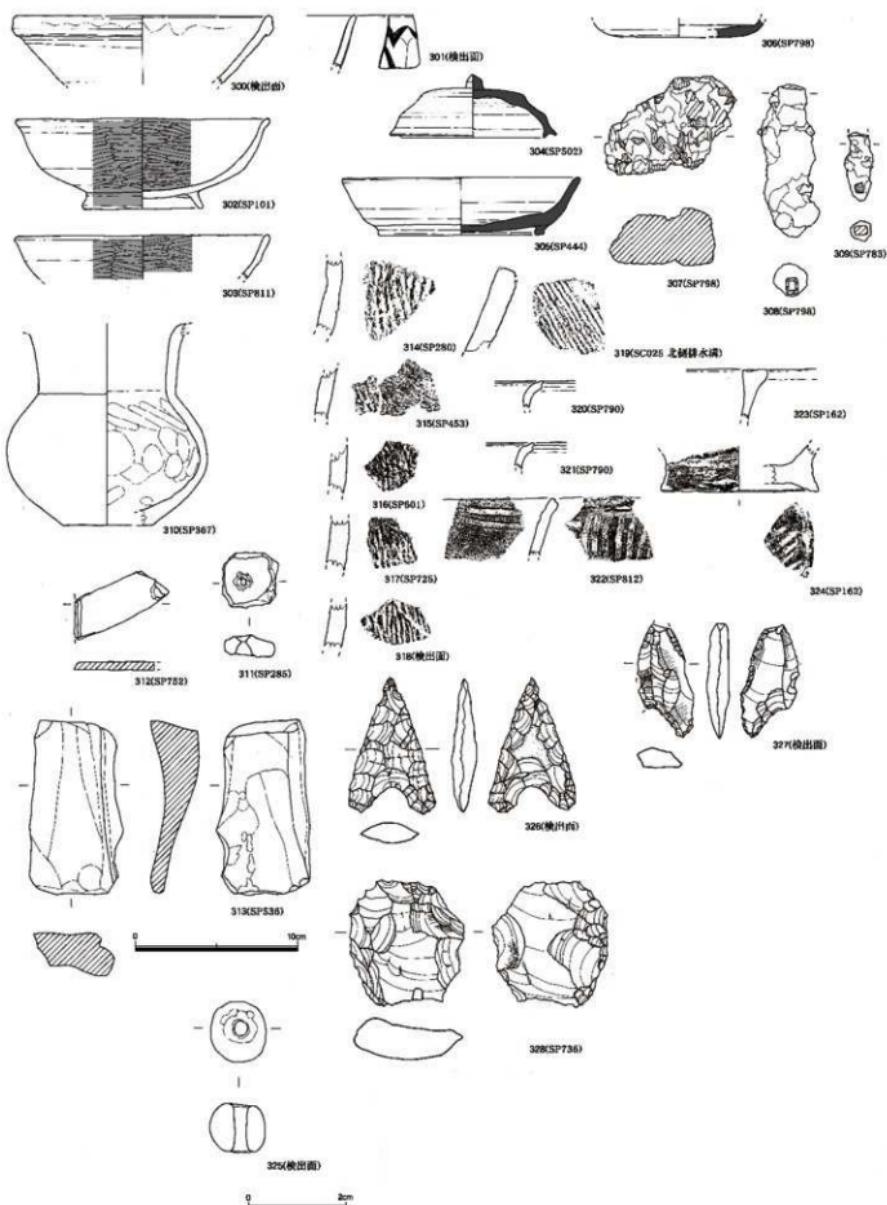
第38図 SX031出土遺物実測図1(1/4)



第39図 SX031出土遺物実測図2(1/4)



第40図 SX031出土遺物実測図3(290は1/2, 285は1/3, その他は1/4)



第41図 1区出土その他の遺物実測図(325~328は1/1, その他は1/3)

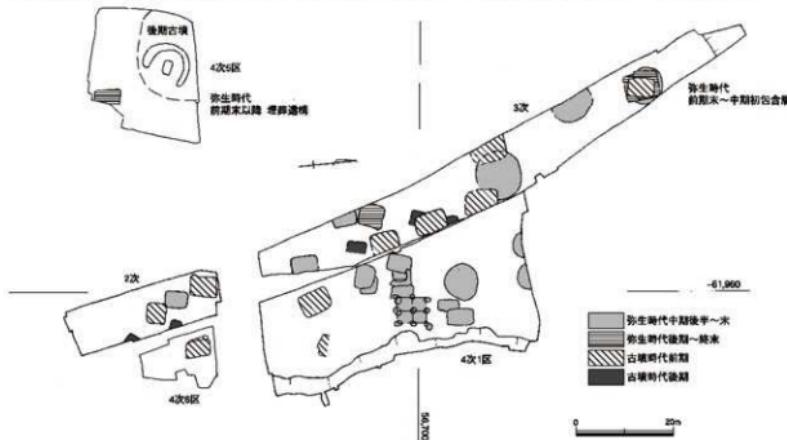
上げる。277は口縁部外面を肥厚させる。278～280は壺である。281・282は筒形器台である。282は筒部に縦長の透かし孔をあけている。283～287は高杯、288・289は器台である。290は砂岩製の石包丁破片である。291～299はトレンチ2出土である。291～293は底部で、292は焼成後穿孔を行っている。294～298は甕口縁部、299は壺の口縁部である。

(7) その他の出土遺物（第41図、写真89・90・94）

300～328は報告し得なかった遺構及び遺構検出時に出土した遺物である。302・310の出土状況は写真89・90に示す。300は白磁、301は青磁碗である。302・303は両黒の黒色土器、304～306は須恵器、307は鍛治津、308・309は鉄器である。310は平底の壺、311は焼成前の穿孔を有する土器片、312は頁岩製の板状素材片である。部分的に研磨痕が認められる。313は砂岩製の砥石である。314～323は縄文土器小破片である。314～319は燃え文土器破片である。322は内外面に沈線文を施す。324は断面三角形を呈する弥生土器口縁部である。上面は僅かにくぼむ。325はガラス製の丸玉である。326は安山岩製石礫である。327・328は黒曜石製で、328は加工痕のある剥片である。

(8) 小結

1区の調査では縄文時代早期燃え文土器の包含層及び弥生時代以降の遺構・遺物を確認した。ここでは弥生時代以降の遺構について概観する。1区では弥生時代中期初頭～中世前半代にいたる遺構・遺物を確認した。検出遺構で時期を確定したものの大半は弥生時代中期後半に位置付けられ（SB042、SC011・014-1・014-2・018・019・023・025・027・035・036・044、SK048・049・050・052）、中期初頭までさかのぼるのはSK043のみである。また、斜面下には大量に土器を投棄した弥生時代中期後半の包含層SX031が形成されている。古墳時代前期に位置付けられる堅穴住居跡は2棟（SC003・013）確認している。SB021は古墳時代後期～古代に位置付けられる。また、古代～中世の遺構として鍛冶関連遺構SX001が認められる。周辺の調査においても松木田遺跡の広い範囲において鐵・鉄器生産関連遺構・遺物が確認されており、今後詳細な時期比定が求められる。斜面上には中世前半までの遺物を含む包含層（SX002・010・029等）が形成されている。本調査区の主体は弥生時代中期後半であるが、3次調査区北端部では弥生時代前半～中期初頭の包含層、1次調査5区では前半～後半の甕棺墓が確認されており、集落の形成はこの時期より開始したものと考えられる。



第42図 2～4次調査遺構配置図(1/1,000)

3 2区の調査

1) 概要

2区は松木田遺跡の西側端に位置する調査区である。中位段丘面上に立地し、西側は長峰遺跡と連続している。2区の南側隣接地では長峰遺跡1次調査が行われており、中世の掘立柱建物・井戸・土坑等を検出している。

2区の調査前現況は階段状に造成された水田面であり、ほぼ表土直下で遺構面を確認しているが、傾斜のかかる調査区北～東側では遺構面直上に20cm程度の盛土を行っている。遺構面は南西隅の調査区最高所で花崗岩盤が露出し、これより斜面北及び東側には橙色粘質土が広がり、更に北側2/3には土石流状の黄橙色～黄褐色砂質土層が広がり、人頭大以上の花崗岩礫が多く含まれている。

遺構面標高は調査区南西隅で54.9mを測り、尾根線を北側に延ばして北～東側に向かって傾斜する。北端部標高51.5m、東端部標高51.2mを測る。検出遺構は縄文時代草創期の円形土坑1基のほか、弥生時代～中世に位置付けられる掘立柱建物、堅穴住居跡、溝、土坑、鍛冶関連遺構、包含層であるが、南西側を中心に削平が進んでいる。また、ピット出土遺物は弥生時代中期のものが主体を占めるが、小破片として古代～中世の須恵器、土師器壺・皿・椀等が出土しており、時期としては古代以降のものが主体を占めるようである。また、遺物は小破片化し摩滅したものが多い。遺構埋土は黒色、暗褐色・褐色・にぶい黄橙色を呈する。

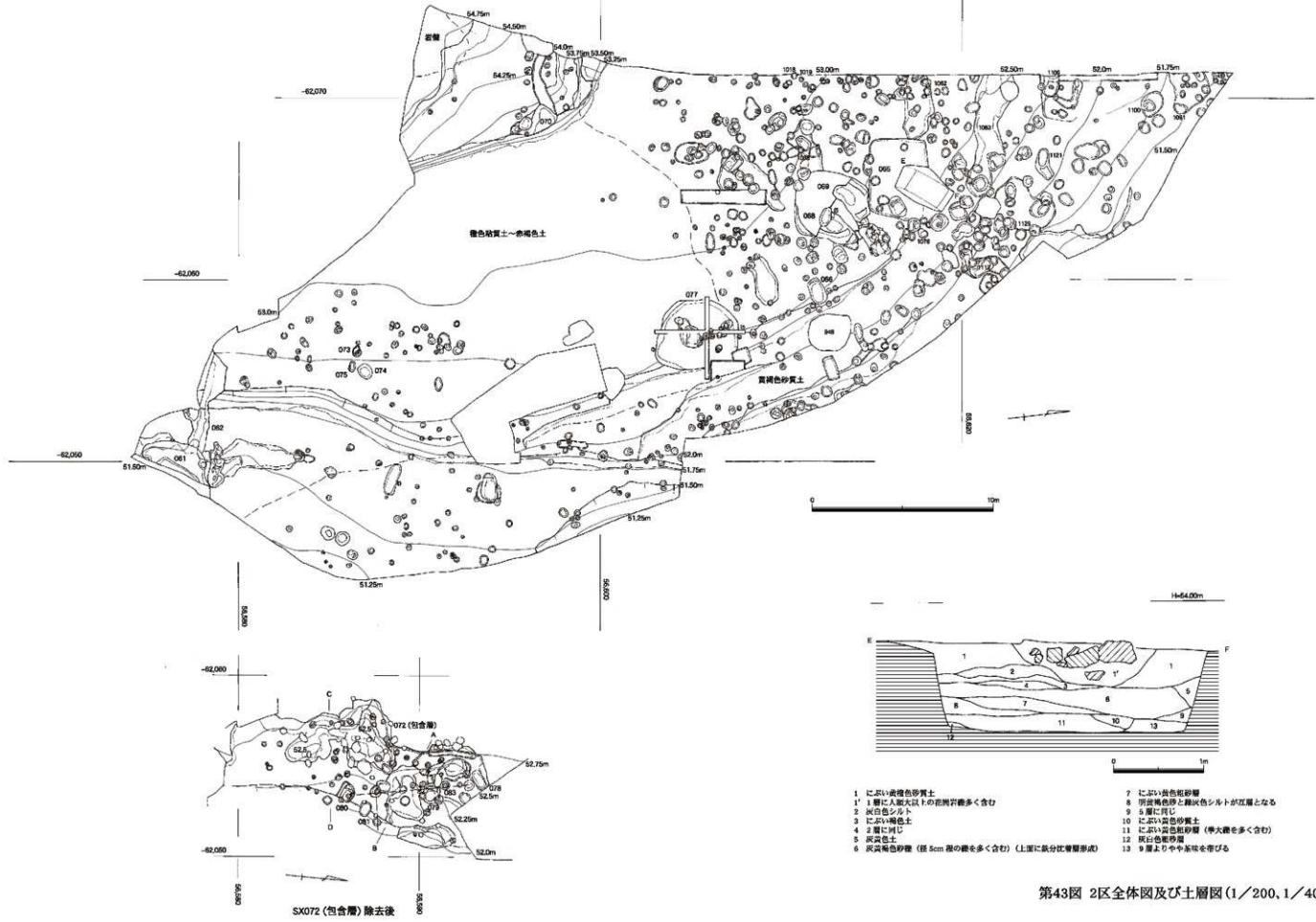
2) 縄文時代の調査

出土状況

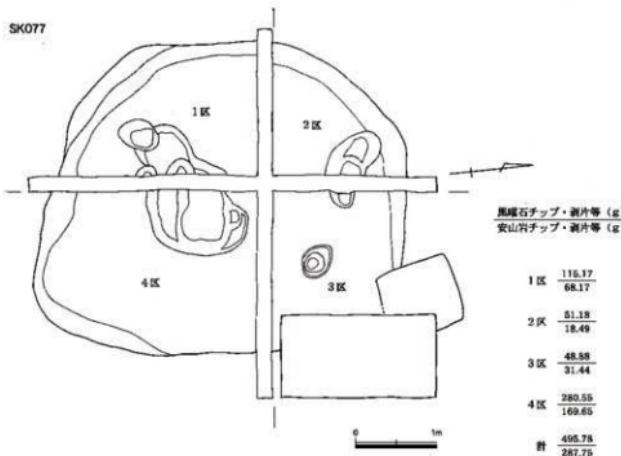
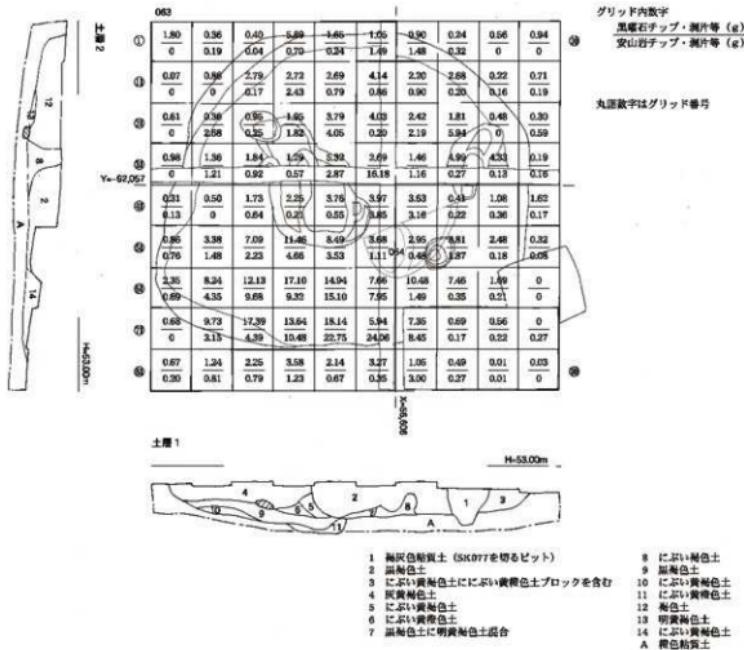
SK077（第44図、写真99～108）

遺構検出時に調査区中央東側縁辺よりにおいて、輪郭の不明瞭な黒褐色土を確認し一部掘り下げを行ったところ黒曜石剥片がまとまって出土した（SK064）ため、再度周囲を含め精査したところ周囲からも微細な剥片が出土した。このため、このSK064を中心として剥片が観察できた南北5m、東西4.5mの範囲に、2区調査グリッドを使用して50cm角のグリッドを90区画設定し、掘り下げを行った（調査時の遺構番号は063としている）。土砂は全量採集し、水洗を行い遺物の収集に努めた。また、掘り下げ中に確認できた製品・剥片については平面的な位置と高さを記録し、写真撮影の上取り上げを行っている。掘り下げは移植ごてによります各グリッドを1段（5cm程度）下げたのち遺構の確認を行なったが、不明瞭であったため、更にもう一段掘り下げを行った。この時点で、グリッドほぼ中央に略円形の黒褐色土の広がりを確認したため、50cm角の小グリッドを廃棄し、土坑（SK077）として掘り下げを行った。SK077確認後は土坑を4分割し南西側を1区とし時計回りに南東側を4区として掘り下げを行った。ここでも、製品等は記録化を図った上で取り上げ、土砂は全量採取し、水洗した。

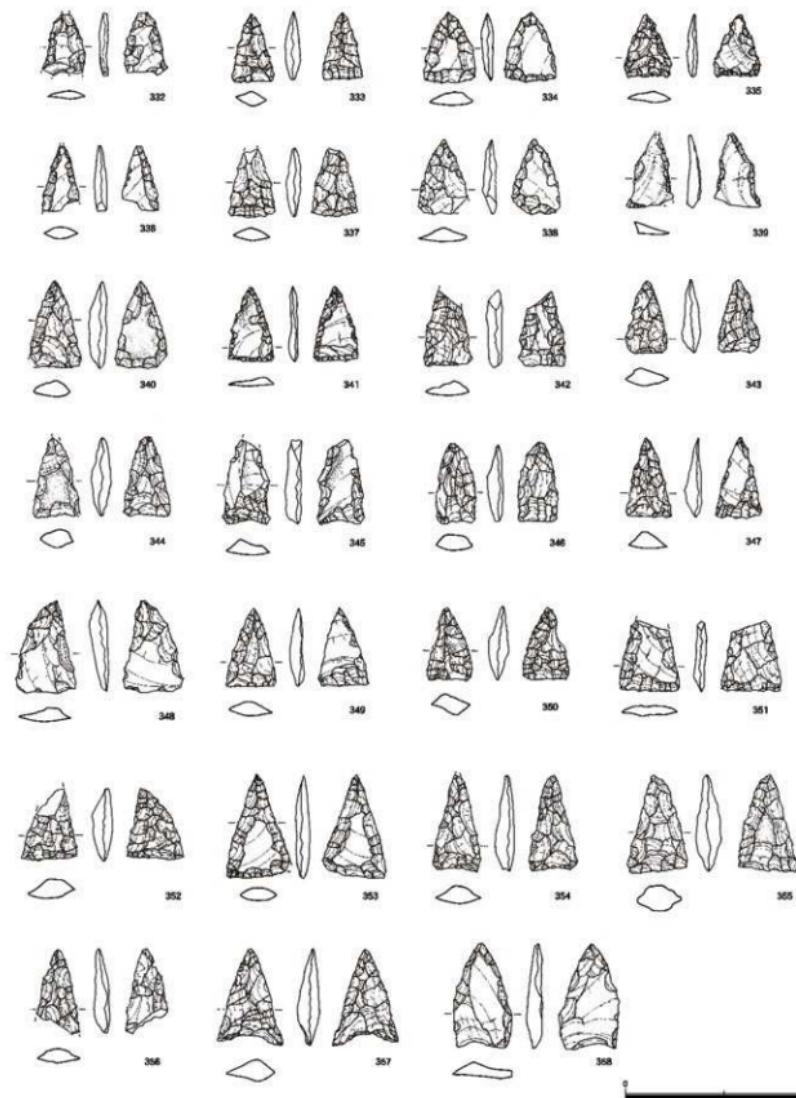
SK077は台地が急斜面で落ち込む直前の緩斜面縁辺に立地している。平面はやや歪な円形に近く、南北長4.3m、東西長3.8mを測る。西側で壁高35cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面は北側から中央に向かって傾斜するが比較的平坦である。埋土中に炭化物は認められず、床面中央やや南側に不定形な掘りこみを有する。土層は明瞭な分層が困難で、漸移的に変化している。また当初剥片を確認したSK064の黒褐色埋土（2層）も、SK077の堆積層の一部と考えられる。出土した石器・剥片類は黒曜石と安山岩であり、堅穴南半部、特に4区での出土量が顕著で、総量の半分強が出土している。なお、土器は僅かに出土しているが、極小軟弱詳細は不明である。また、第55図436・437等縄文時代後晩期に位置付けられる土器も少量認められるが、本遺構に伴うものではないと判断した。



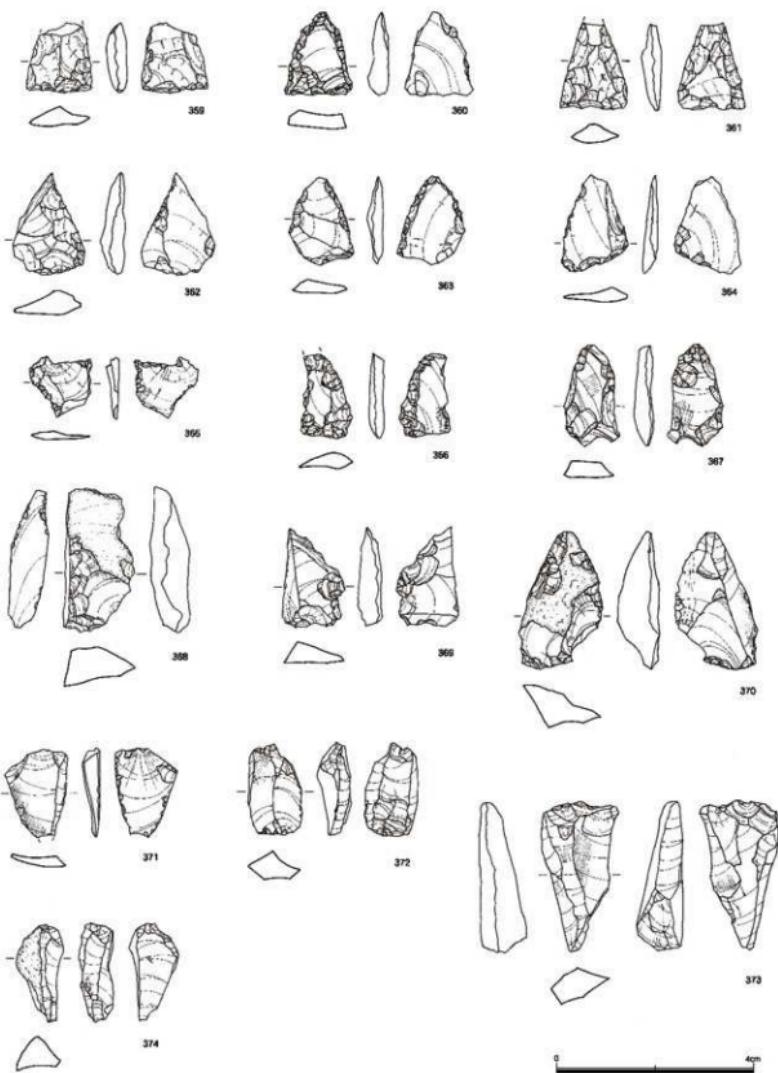
第43図 2区全体図及び土層図(1/200, 1/40)



第44図 SK077実測図(1/60)



第45図 SK077出土遺物実測図1(1/1)



第46図 SK077出土遺物実測図2(1/1)

出土遺物（第45～47図、写真139）

縄文土器

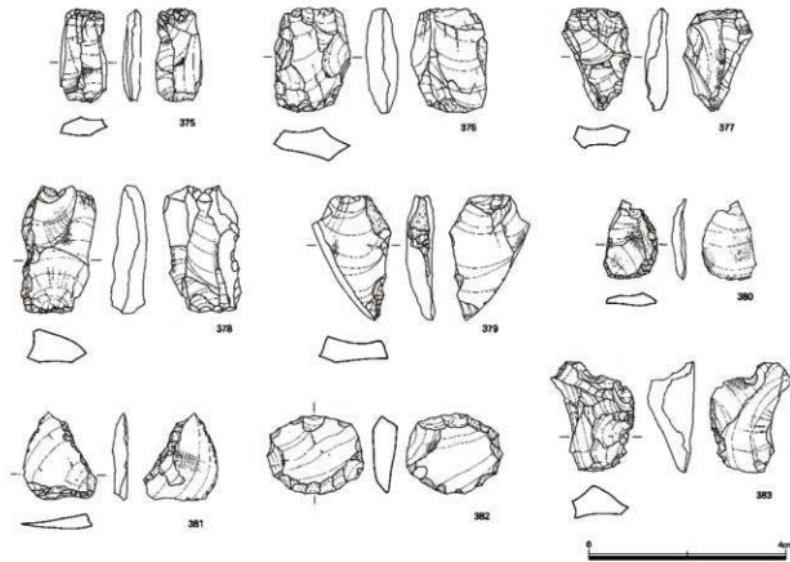
土坑の最上面から晩期の土器片が数点出土した。これは土坑埋没後の土器で、土坑内からは少量の土器が出土したが、いずれも脆く、取り上げ後に微細片になり、実測はかなわない。土器は、器壁の厚さが1cm以上あり、きわめて脆いという特徴を持っている。

石器

土坑内から出土した石器は、石鏃57点、石鏃未成品？5点、スクレイパー4点などで、石核や中・大型のスクレイパー、石斧、磨石・石皿などは1点も出土せず。石鏃以下小型の石器がほとんどである。また土坑内の土を洗浄した結果、微細チップが783.53g出土した。石器製作時の石屑である。

332～361は石鏃で57点中30点を実測した。ほとんどが無脚で平面形は二等辺三角形を呈し、脚状の抉りを持つもの（357・358）も極めて小さな抉りで、すべての石鏃が平基式二等辺三角形鏃とよんでも差し支えない程度である。最も小型のもので長さ1.3cm、最も大きなものでも2.1cmで、平均1.68cmと4～1区に比べて0.1cm小さい。長幅比平均は1.57と4～1区より大きいが、これは脚が無いためと考えられる。片面に主要剥離面を残すものが16点と半数を超えるが、比較的薄い剥片を利用しているものが多いのである。いわゆる局部磨製石鏃が1点ある。石材は黒曜石製が19点、安山岩製が37点、不明石材1点である。一方石鏃を除く石器は、1点を除いて黒曜石製で、石鏃における安山岩製の比率の高さが目を引く。未欠損のものが26点、ごく小さな欠損のものまで含めると32点となり、未欠損のものだけでも半数近くになる。

以下、特徴的なものについて個別に述べる。332～339は長さ1.5cm以下の小型石鏃で、339は石鏃



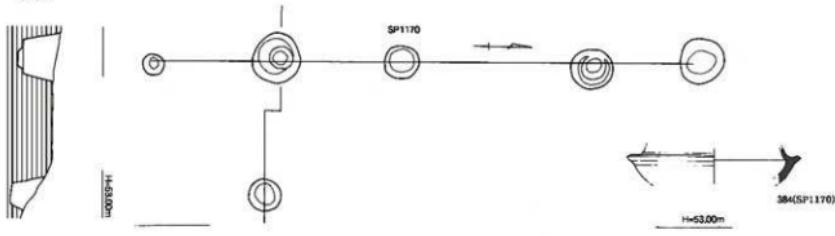
第47図 SK077出土遺物実測図3(1/1)

でない可能性もある。332は脚付の石鎌であるが、両脚とも欠失している。340は唯一の局部磨製石鎌である。357・358は僅かに凹基式である。360は片面の加工がほとんど無い。362～364は未成品もしくは石鎌以外の可能性もある。366・367は石鎌の未製品か。368～370は加工痕がある剥片、371は使用痕がある剥片である。372は両端部から剥離が見られる。373はバティナがやや古く、幅広の端部に小さな剥離が施されている。374・375も端部に小剥離が認められる。374は彫器か。376は石鎌以外で図示したものでは唯一の安山岩製である。小さな剥離が3辺に認められる。かなり風化度が激しい。378は両側から大きな剥離が入っている。クサビ形石器か。379はほぼ先端部のみに加工が認められる。錐の破片か。380～383は黒曜石製の小型スクレイパーで、382はラウンドスクレイパーである。2cm弱の剥片の周囲縁辺に加工を施している。

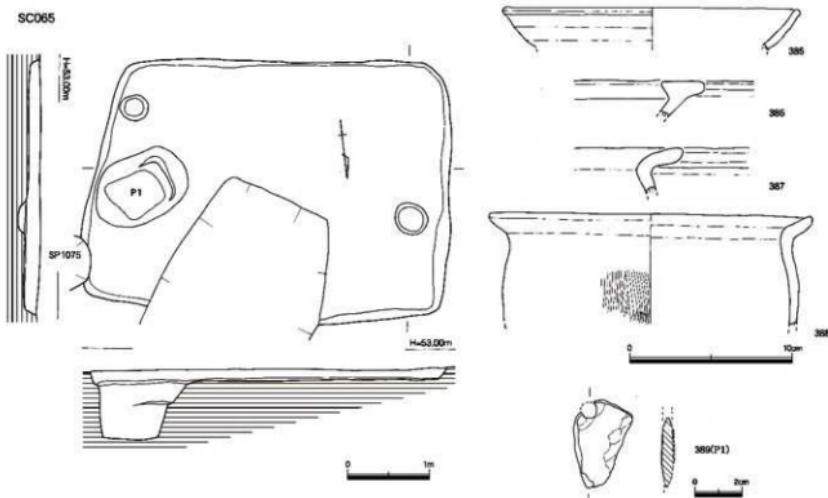
井戸	No.	出土位置	種類	石材	長さ	幅	長/幅	厚さ	重量	石鎌欠失部	備考
45	332	077-R53	石鎌	安山岩	1.3	0.9	1.4	0.2	0.2	両脚	
45	333	063-27.2段目	石鎌	黒曜石	1.4	0.9	1.6	0.3	0.2		
45	334	063-43.2段目	石鎌	安山岩	1.4	1.0	1.4	0.3	0.3		
45	335	063-66.1段目	石鎌	黒曜石	1.3	1.0	1.3	0.3	0.2		
45	336	063-83R5.1段目	石鎌	安山岩	(1.3)	0.6	(1.6)	0.3	0.2	先端部・基部	
45	337	063-53.2段目	石鎌	安山岩	(1.4)	0.9	(1.5)	0.3	0.3	先端部	
45	338	063-75.1段目	石鎌	安山岩	1.5	1.0	1.5	0.3	0.4	基部の一部	
45	339	064	石鎌?	黒曜石	1.5	1.0	1.5	0.3	0.2	先端部・基部の一部	
45	340	063-52	石鎌	安山岩	1.8	1.1	1.7	0.4	0.6	基部の一部	片面局部磨製
45	341	063-73.R4.1段目	石鎌	黒曜石	1.5	0.9	1.7	0.2	0.2		
45	342	063-35.2段目	石鎌	黒曜石	(1.5)	1.0	(1.5)	0.3	0.4	先端部	
45	343	063-67.R42	石鎌	安山岩	1.5	0.9	1.7	0.4	0.4		
45	344	063-53.2段目	石鎌	安山岩	1.6	0.9	1.8	0.4	0.4	先端部	
45	345	063-75R13.1段目	石鎌	黒曜石	(1.7)	1.5	(1.1)	0.4	0.6	先端部	
45	346	077-P3	石鎌	黒曜石	1.6	0.8	2.0	0.4	0.4		
45	347	077-4区.3段目	石鎌	安山岩	1.6	0.8	1.8	0.4	0.4		
45	348	063-35.2段目	石鎌	安山岩	1.9	1.3	1.5	0.4	0.7		
45	349	077-4区.3段目	石鎌	安山岩	1.6	1.0	1.6	0.3	0.4		
46	350	077-R109	石鎌	黒曜石	1.5	1.0	1.6	0.4	0.4	側刃の一部	
45	351	063-73.1段目	石鎌	安山岩	(1.4)	1.2	(1.2)	0.3	0.5	先端部	
45	352	077-1区.3段目	石鎌	黒曜石	1.5	1.2	1.2	0.4	0.6	先端部	
45	353	077-4区清掃時	石鎌	黒曜石	2.1	1.3	1.6	0.3	0.6		
45	354	077-R52	石鎌	安山岩	1.9	1.0	1.9	0.4	0.7		
45	355	077-4区2段目	石鎌	安山岩	2.0	1.2	1.6	0.5	0.9		
45	356	077-1区.3段目	石鎌	安山岩	1.8	0.9	1.9	0.3	0.4	基部	
45	357	063-73.2段目	石鎌	黒曜石	1.9	1.3	1.5	0.5	0.6		
45	358	063-67R40	石鎌	安山岩	2.1	1.2	1.8	0.3	0.8		
46	359	077-R107	石鎌	安山岩	(1.4)	1.4	(1.0)	0.4	0.7	先端部	
46	360	077-4区2段目	石鎌	黒曜石	1.7	1.4	1.2	0.5	0.8	先端部?	
46	361	063-43.1段目	石鎌	安山岩	(1.8)	1.4	(1.3)	0.4	0.8	先端部	
46	362	063-52R9.2段目	石鎌未製品?	安山岩	2.1	1.5	1.4	0.5	1.1		
46	363	063-46.1段目	石鎌未製品?	安山岩	1.8	1.3	1.4	0.3	0.7		
46	364	077-R81	石鎌未製品?	安山岩	2.0	1.4	1.4	0.3	0.6		
46	365	077-1区.3段目	剥片	黒曜石	1.2	1.3	0.9	0.3	0.3		
46	366	077-3区2段目	石鎌未製品?	黒曜石	1.7	1.0	1.7	0.4	0.6		
46	367	077-R39	石鎌未製品?	黒曜石	2.1	1.1	1.9	0.4	0.9		
46	368	077-K95	剥片	黒曜石	2.9	1.5	—	0.8	3.6		
46	369	063-66.1段目	剥片	黒曜石	2.0	1.8	—	0.5	1.0		
46	370	077-R32	剥片	黒曜石	2.8	1.7	—	0.9	2.6		
46	371	063-35.2段目	剥片	黒曜石	1.8	1.3	—	0.4	0.6		
46	372	063-18.2段目	楔形石器	黒曜石	1.9	1.1	—	0.7	1.2		
46	373	077-R95	剥片	黒曜石	2.0	1.6	—	0.7	1.1		
46	374	077-R79	彫器?	黒曜石	3.0	1.6	—	1.0	2.8		
47	375	077-4区1段目	剥片	黒曜石	1.9	1.0	—	0.4	0.8		
47	376	077-1区.1段目	剥片	安山岩	2.1	1.6	—	0.7	2.2		
47	377	077-R38	剥片	黒曜石	2.1	1.4	—	0.5	1.1		
47	378	063-74.2段目	カビ形石器?	黒曜石	2.6	1.6	—	0.7	2.6		
47	379	064	鉈?	黒曜石	2.5	1.6	—	0.6	1.8		
47	380	063-73.1段目	スクレイバー	黒曜石	1.6	1.1	—	0.3	0.4		
47	381	077-4区トレンチ	スクレイバー	黒曜石	1.8	1.5	—	0.3	0.7		
47	382	077-R68	スクレイバー	黒曜石	2.0	1.6	—	0.5	1.6		
47	383	077-1区.1段目	スクレイバー	黒曜石	2.3	1.7	—	0.9	2.3		

表4 2区出土石器一覧

SB083



SC065



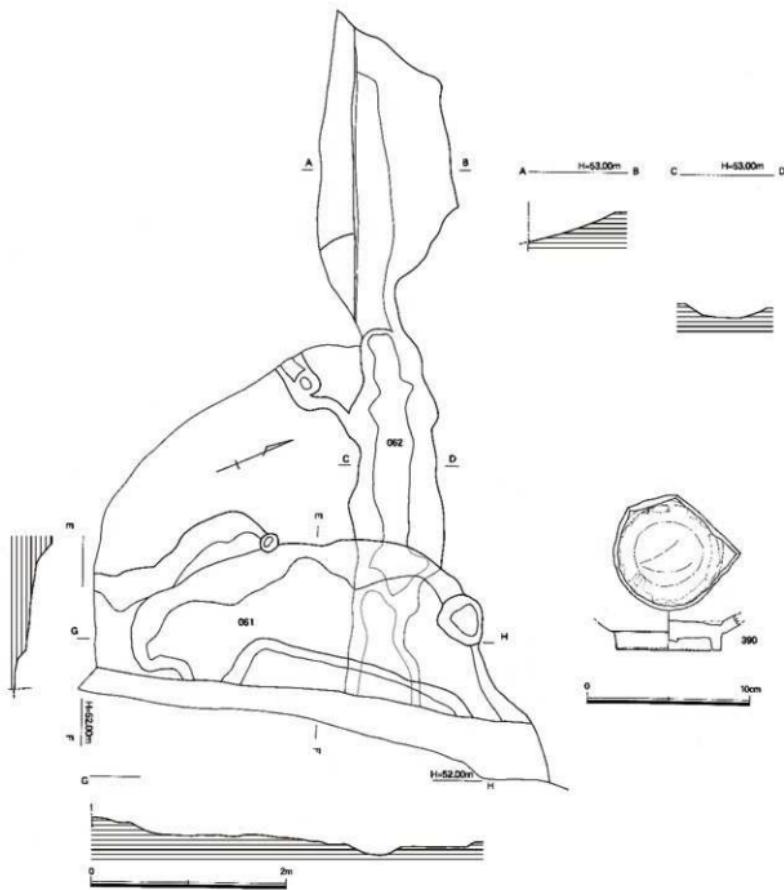
第48図 SB083・SC065及び出土遺物実測図(1/60, 389は1/2, その他は1/3)

3) 弥生時代以降の調査

(1) 挖立柱建物

SB083 (第48図、写真109)

調査区南側で検出する。包含層(SX072)除去後に検出しているが、SX072土層1より、SP1170は包含層堆積途中に掘削されたものと考えられる。南北方向に直線的に柱穴を抽出しているが、東西方向は不明瞭で、建物としてまとめるについては問題もあり、可能性にとどまる。埋土は黒褐色～褐灰色を呈する。ピットは古墳時代後期～古代に位置付けられる。



第49図 SD061・062及び出土遺物実測図(1/50, 1/3)

出土遺物（第48図384） SP1170出土の須恵器壺身である。立ち上がりは短く、内傾する。胎土は暗青灰色を呈し、石英砂粒を多く含む。

(2) 穴住居跡

SC065（第48図、写真110）

調査区北側で検出する。南北長3.2m、東西長4.5mを測り、やや歪な隅丸長方形を呈する。埋土は暗褐色土で東側を黒褐色土のSP1075に切られる。壁高15cmを測り、床面はほぼ平坦である。遺物は土器小破片と黒曜石剥片が出土している。主体は弥生時代中期であるが、布留式甕口縁部が出土しており、古墳時代前期の遺構と考えたい。

出土遺物（第48図385～389） 385は布留式甕口縁部である。内湾気味に広がり、端部を僅かに肥厚させる。にぶい黄橙色を呈し、外面には煤が付着する。386は断面錐形、387・388はく字形を呈する。389はP1出土の砂岩製の石包丁破片である。穿孔部分が僅かに残るのみである。

(3) 溝状遺構

SD061・062（第49図、写真111）

調査区南端で検出する。SD062は台地高所西側から流れる流路である。幅0.7～1.5m程度で、壁は凹凸があるが、溝底は直線的に延びている。埋土は礫混じりの灰褐色砂質土で、自然流路と考えられる。出土遺物には白磁のほか摩滅の進んだ土師器壺・皿小破片があり、中世前半代以降としておきたい。SD061はSD062の東側に位置し、これに後出する。調査区内では浅皿状の断面となり、埋土は人頭大花崗岩礫を非常に多く含んだ暗褐色土である。出土遺物は土器片数点と鍛冶滓である。詳細な時期は不詳である。

出土遺物（第49図） 390は白磁碗の底部である。内底面の軸を輪状に搔き取り、体部との境に明瞭な段を有する。体外面および高台部分は露胎となる。

(4) 土坑

SK066（第50図、写真115）

調査区北側で検出する。東西長1.4m、南北長0.8mを測る。平面隅丸長方形を呈し、断面西側に一段平坦面を有し、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物はわずかであるが弥生時代中期に位置付けられる小破片が出土している。

出土遺物（第50図391・392） 391は断面逆L字形の口縁部である。上面は水平で端部が僅かに垂下する。392は緩やかな屈曲部が残り、器面上に条痕を残す。

SK068・069（第50図、写真112～114）

調査区北側で検出する。当初正な方形土坑として南半部分を掘り下げたが、土層を確認したところ、縦長の2基の土坑と判明した。北側は東をSK068、西をSK069として掘削した。ともに長軸3m、幅1.5m前後を測る。SK068は東西両壁が歪んでいる。SK069は両側に平坦面を有する階段状の掘り方となっている。ともに弥生時代中期を主体とした土器小破片が出土するのみであるが、SK069からは図示しえないが、須恵器小破片も2点出土している。時期・性格とともに不明である。

出土遺物（第50図393～401） 393～396はSK068出土である。393は逆L字形の口縁部、394は平底の底部である。395は丹塗り土器の口縁部である。396はほぼ完形の碗である。内面ナデ、外面上半ナデ、下半～底部は刷毛目による。器壁は厚手で石英砂粒を多く含む。397～401はSK069出土である。397～399は口縁部破片である。400は胴部破片で刷毛目が認められる。401は胴部に緩やかな屈曲部が残る縄文時代晚期の鉢である。

SK070（第51図、写真116）

調査区南西側の最高所部で検出する。削平により東側を失っており、埋土は炭化物を含む暗褐色土である。形状は明らかでないが、底面が遺構面の勾配に合わせて東側に傾斜しており、自然に形成されたくぼみに堆積した包含層の可能性もある。摩滅の進んだ須恵器・土師器小破片が出土している。

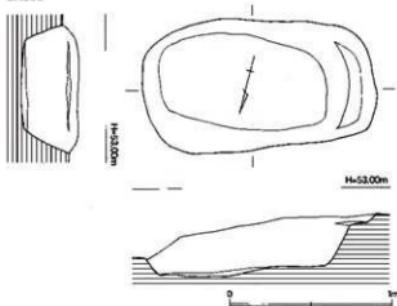
出土遺物（第51図） 402は須恵器壺蓋小破片である。かえりは小さく内傾する。403は土師器の把手である。ソケット状に胴部に差し込むものである。

(5) 鍛冶関連遺構

SK073（第52図、写真117～124）

調査区南側、包含層SX072上面で検出した鍛冶炉である。同時に排滓土坑SK074・075を確認した

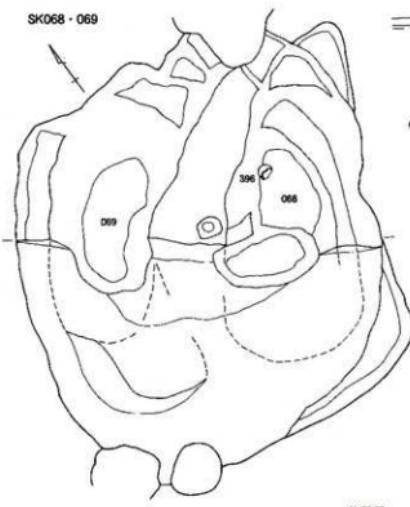
SK066



391



SK068-069



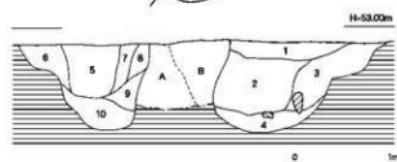
393

394

395

396

397



398

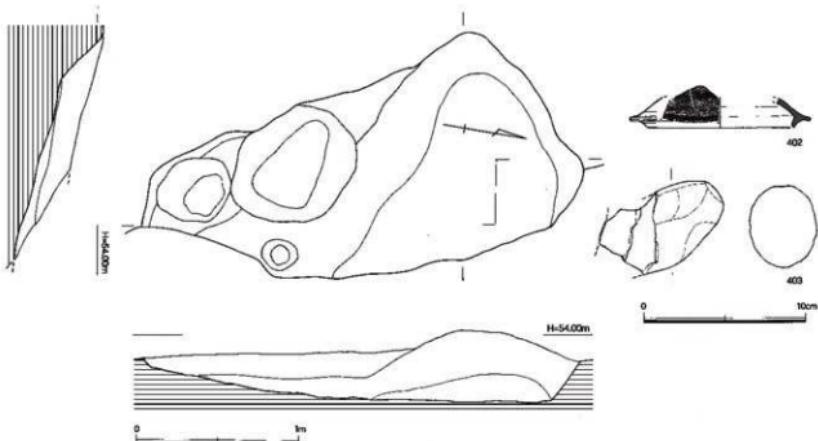
399

400

401

- 1 にぶい黄褐色土
- 2 灰黄褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 黑褐色土
- 6 稚沢青色土
- 7 増灰黄色土
- 8 にぶい黄色土
- 9 黑色粘質土
- 10 灰褐色土に褐色土ブロックを含む
- 1~4 層が SK068 褐土
- 5 黑褐色土
- A 暗赤砂質土
- B 暗オリーブ色土

第50図 SK066・068・069及び出土遺物実測図(1/30, 1/50, 1/3)



第51図 SK070及び出土遺物実測図(1/30, 1/3)

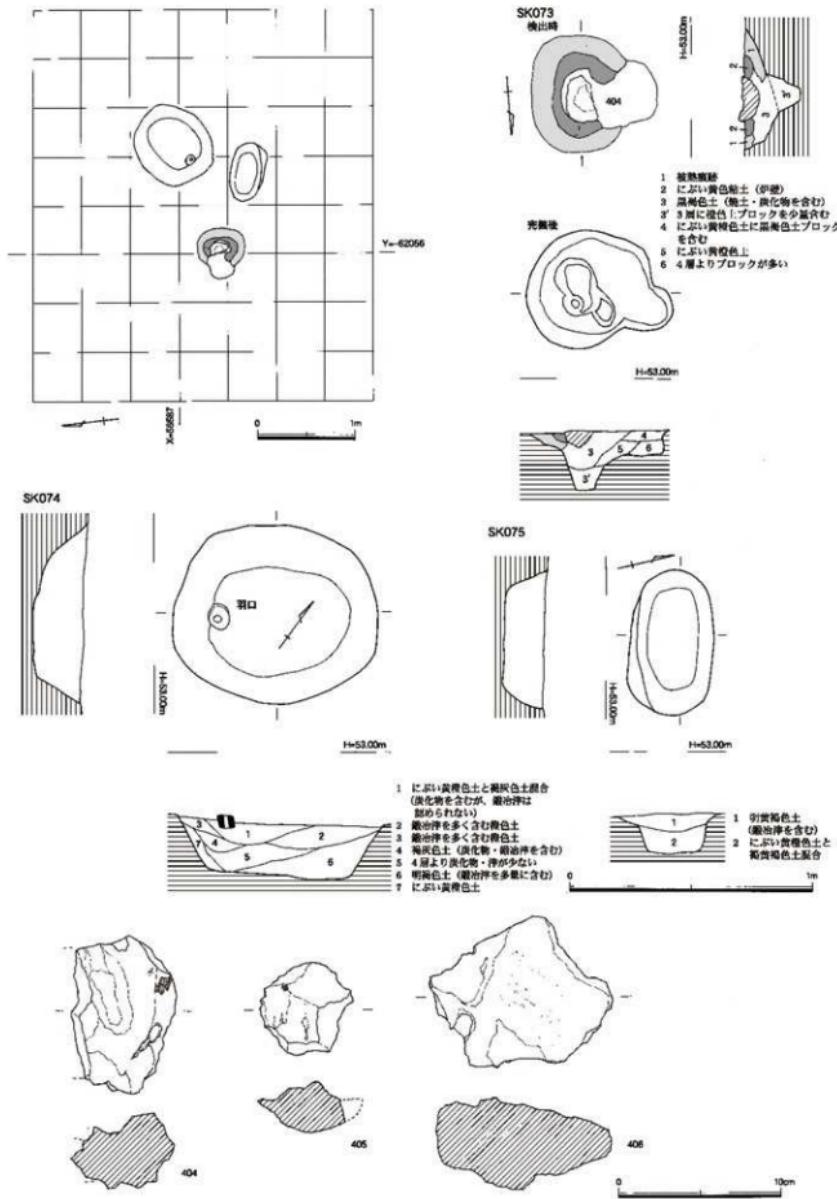
ため、微細遺物の収集を目的とし、3基を中心として、調査グリッドを利用して南北3.5m、東西4mの範囲を50cm角の小グリッド56区画に分割して上面土砂の採集を行い、水洗後磁選を行った。鍛造片・粒状滓を採集することができたが、工房空間の復元には至っていない。また、周辺の柱穴を関連の建物として抽出することはできなかった。

SK073は鍛冶炉である。明黄褐色の炉壁は厚さ5cm、内法15×22cmを測るが、上面のみで底面には至っていない。また、西側は炉壁が途切れしており平面的にはC形を呈する。炉内には楕円形鍛冶滓がはまつたまま出土し、炉壁周囲には幅10cm弱の被熱痕跡が炉壁の下位にまでも延びている。炉壁・被熱痕跡の途切れる西側は羽口の挿入位置との想定も可能であるが、そのための施設・製作は認められなかった。なお楕円形鍛冶滓の西側が欠けているのも、この部分で溶着した羽口と同時に欠損した可能性が考えられる。炉は中央を深めに掘り下げた後、焼土・炭化物を含む土砂で埋め戻して炉底をつくり、上面のみ炉壁粘土を貼り付けたものと考えられる。SK073～075のいずれからも、時期を示す土器は出土していないため詳細は不明であるが、包含層上面に位置することや調査区内からの出土遺物から、古代～中世前半の中で考えておきたいが、排滓土坑や滓の形状などから古代の可能性が高い。残留炉内滓は重量948g、平面半月形で中央がくぼみ、厚さ4cm前後を測る。

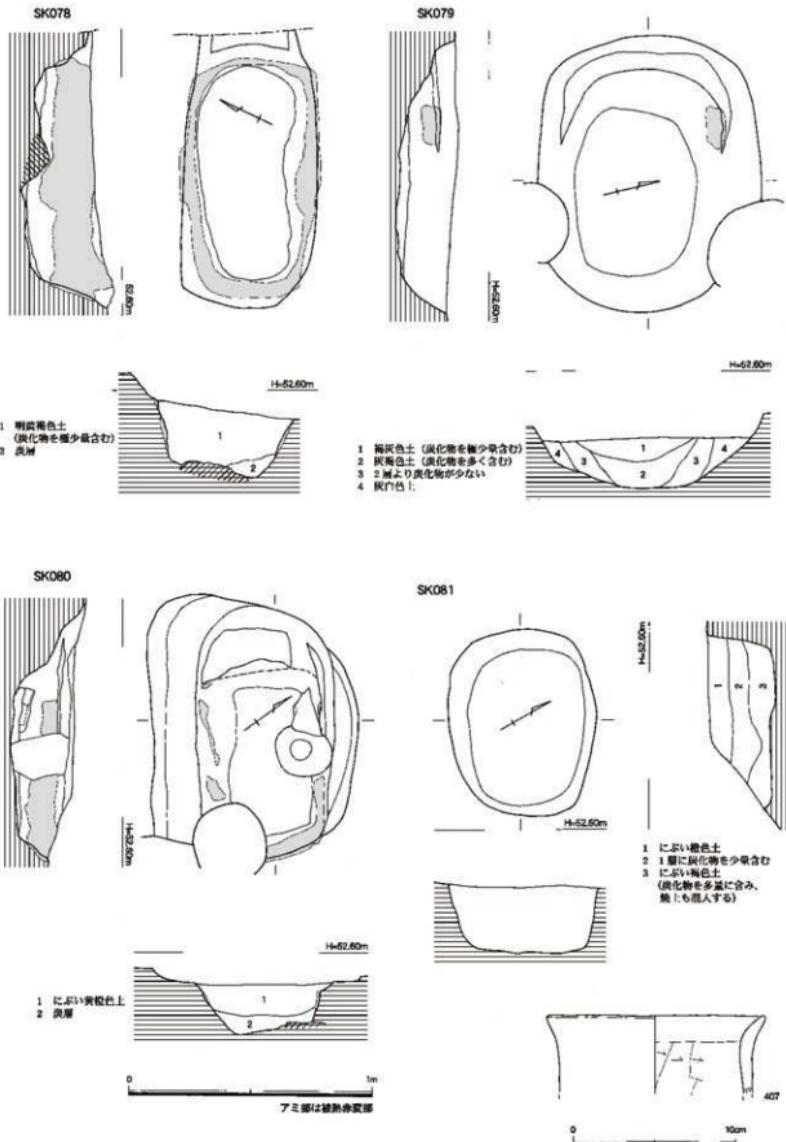
出土遺物（第52図404） 404は炉内に残していた楕円形鍛冶滓の1/3破片である。重量は292gで、上面は中央がくぼみ、細かな凹凸が認められる。底面には砂粒の付着はあまり認められない。破面には径5mm以下の気孔が多く残り、幅1cm程の木炭痕がかみこんでいる。詳細は来年度の報告によりたいが、金属学的分析調査から精錬鍛冶滓と指摘されている。

SK074（第52図、写真125・126）

鍛冶炉の東側に位置し、SK075同様これに伴う排滓土坑である。75×85cmの長円形を呈し、検出面からの深さは22cmである。壁面等に被熱の痕跡は認められない。埋土からは羽口破片1点、鍛冶滓12.05kg、鍛造片・粒状滓も多く認められるが、埋土中に含まれる砂鉄との分別ができるおらず重量は不明である。



第52図 SK073～075及び出土遺物実測図(1/50, 1/20, 1/3)



第53図 SK079~081及び出土遺物実測図(1/20, 1/3)

出土遺物（第52図405・406） 405は小型の楕円形鍛錬鍛冶滓である。重量93gで、上面中央が盛り上がり、全面に鍛造剥片が付着している。406は470gを測る大型の楕円形鍛錬鍛冶滓である。上面はほぼ平坦で、底面は楕円形を呈する。全面に酸化土砂が付着し、にぶい黄褐色を呈するが、部分的な破面から小気孔が観察できる。

SK075（第52図、写真127・128）

鍛冶炉の東側、SK075の南側に位置する排滓土坑である。35×60cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは17cmである。壁面等に被熱の痕跡は認められない。埋土からは鍛冶滓2.5kg、鍛造剥片・粒状滓も出土するが、SK074同様、砂鉄との分別ができていない。量的にはSK074の1/3程度である。

(6) 烧土坑

鍛冶炉・排滓土坑の西～北側の包含層掘り下げ中で焼土坑4基を確認した。いずれも包含層上面ではなく包含層中からの検出で、SK078・079は包含層SX072土層1の2・3層除去後に確認している。時期的にはSK073～075に先行する可能性が高い。

SK078（第53図、写真129・130）

南北長0.55m、東西長1.1mを測る。東側短辺部分は別造構と切りあっている可能性があり、平面隅丸長方形となる。壁は直立し、底面は凹凸が多く地山の花崗岩礫が一部露出している。四周壁面には被熱痕跡が認められる。底面には被熱痕跡はなく、部分的に炭層が残る。出土遺物は土器小片10点程度で時期の詳細は不明である。

SK079（第53図、写真131・132）

SK078の南側に位置し、南北長1m、東西長1.1mを測り、平面隅丸方形となる。壁は傾斜し、底面は中央に向かって緩やかに深くなっている。被熱痕跡は北側壁面の一部に残るのみである。遺物は出土していない。

SK080（第53図、写真133・134）

鍛冶炉の東側に位置し、南北長0.85m、東西長1.01mを測る。周辺を一段掘り下げた後、中央に50×80cmの本体部分を掘り下げている。本体部分の四周に被熱痕跡が残り、底面から5～8cmほどには炭層が残っている。遺物は出土していない。

SK081（第53図、写真135・136）

SK080の北側に並列し、南北長0.6m、東西長0.75mを測る。壁面に被熱痕跡は認められないが、埋土に炭化物を多く含んでおり、焼土坑と判断した。遺物は土師器甕が1点出土している。

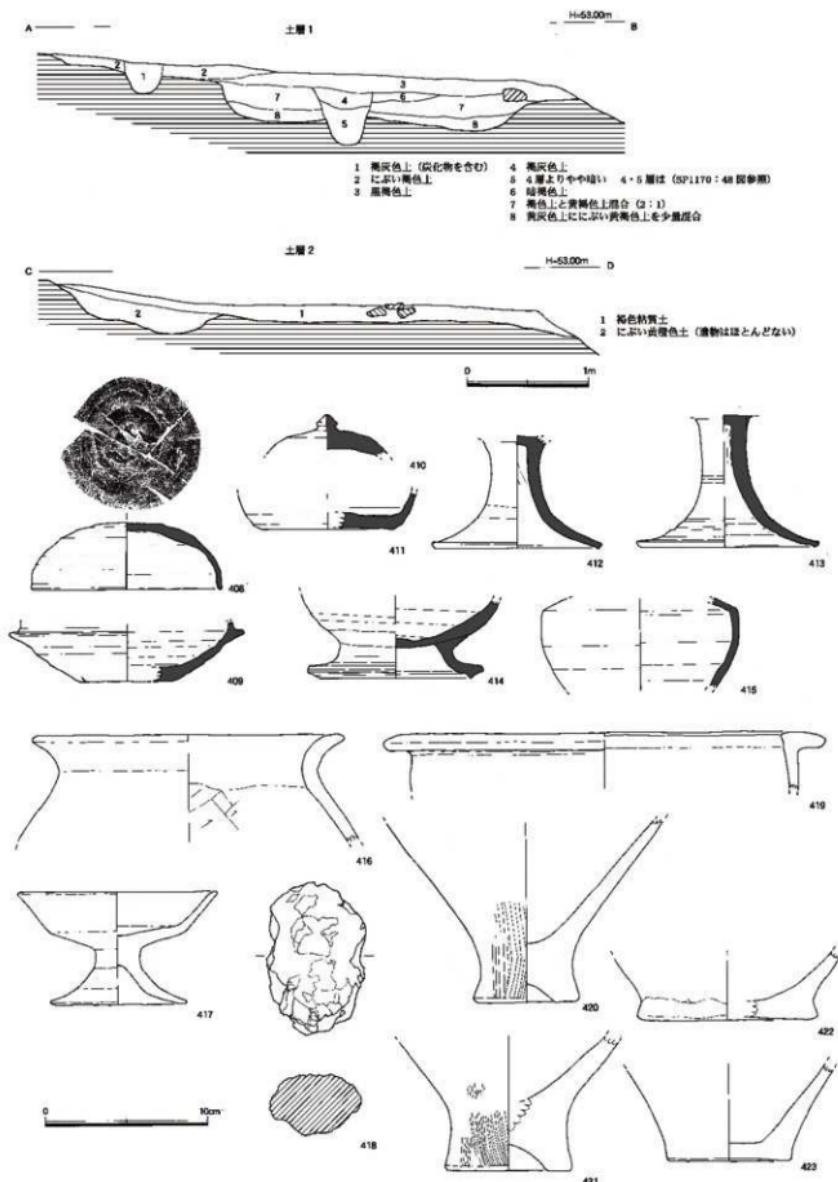
出土遺物（第53図） 407は土師器甕である。口縁部はゆるく外反し、器面は内外ともに2次的に被熱している。胴部内面には横方向のヘラ削りが認められる。

(7) 包含層

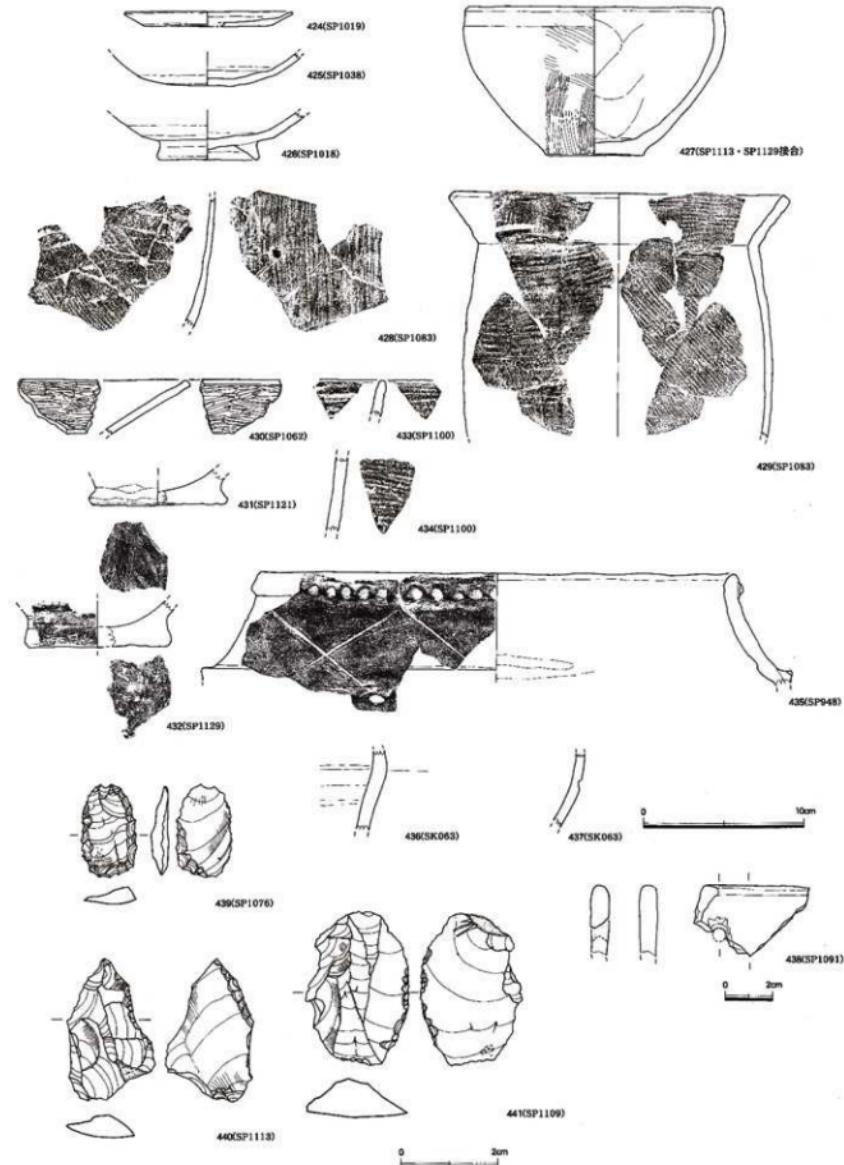
SX072（第54図、写真137・138）

調査区南側斜面上に形成された包含層である。残存している基本的な層厚は10cm程度であるが、全面に不規則なぼみが多くあり、この部分は深さ40cm前後となっている。弥生時代～古代に位置付けられる遺物がコンテナ3箱分出土している。また土層2以南から鍛冶滓が2.5kg出土している。包含層出土の鍛冶滓はこのほかにはほとんどないため、SK073以外の鍛冶炉がこの南側に存在していた可能性が高い。

出土遺物（第54図） 408～415は須恵器である。411は外底面ヘラ切りである。412・413は高杯、414は脚掘が低平に広がる。415は下半に回転ヘラ削りが認められる。416・417は土師器、418は楕円形鍛冶滓である。419～423は弥生土器である。



第54図 SX072土層及び出土遺物実測図(1/40, 1/3)



第55図 2区出土その他の出土遺物実測図 (439～441は1/1、438は1/2、その他は1/3)

(8) その他の遺物（第55図）

424は土師器小皿で外底面の調整は不明である。425は外底ヘラ切りの坏、426は土師器柄である。427は弥生時代の鉢、428は外面刷毛目を有する甕の胸部、429は外面タタキ、内面には刷毛目を施す。430～437は縄文土器である。436・437は063としてグリッド掘り下げ時に出土している。436は56グリッド、437は26グリッド1段目で出土する。いずれも緩やかな屈曲を有し、器面は最終的にナデ調整を行う。また、胎土は暗灰黄色を呈し、やや粒子が砂っぽい。438は輝緑凝灰岩製の石包丁破片である。439～441は黒曜石製の剥片である。

(9) 小結

2区では縄文時代草創期の土坑1基のほか、弥生時代～中世前半の遺構・遺物を確認している。また、縄文時代晩期の遺物も少量出土している。弥生時代以降のもので時期が明確になったものは少ないが、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟（SC065）、古代～中世前半の鍛冶炉1基（SK073）、関連土坑2基（SK074・075）、焼土坑4基（SK078～081）、中世前半の流路（SD061・062）等が認められる。

4 3区の調査

1) 概要

3区は1区の東側に位置し、台地前面の沖積扇状地上に位置している。松木田遺跡の東端部にあたり、試掘調査によれば、これより東側では摩滅が進んだ土器片が極少量出土するものの、河川性の堆積層により、遺構は認められないことが確認されている。

遺構面は安定したにぶい黄色シルト層（厚20～40cm）上面に設定した。これ以下は人頭大自然縁を含む粗砂層で無遺物である。また、遺構面直上には比較的安定した黒色土が認められ、旧耕作土と考えられる。溝・土坑・ピット状の遺構を検出しているが、埋土・形状より人為的な営為によるものではなく、流水等によって出来上がったくぼみや流路と考えられる。出土遺物は弥生時代に位置付けられるものが大半であるが、形成時期は不明であるが更に下るものと考えられる。

2) 遺構と遺物

SD085（第56図、写真145）

調査区南端を略東西に蛇行しながら横断する溝状遺構である。幅3m前後、検出面からの深さ70cmを測る。底面には凹凸が多く、埋土はシルトと砂礫層が互層状となり、盛んな流水を伺うことができる。コンテナ2箱出土しており、大半が弥生時代のものであるが、前述のように時期は不詳である。

出土遺物（第57図442～449） 弥生時代中期～後期に位置付けられる土器片であり、摩滅はあまり進行していない。444は焼成後の穿孔を有す。448は外面タタキの後刷毛、内面刷毛を行う。

SK086（第56図）

調査区南側で検出する。略方形の掘りこみで、SD085に切られている。埋土は粘性の強い暗灰色土であり、平面プランも不整形で、人為的な遺構ではないと考えられる。

SK087（第56図）

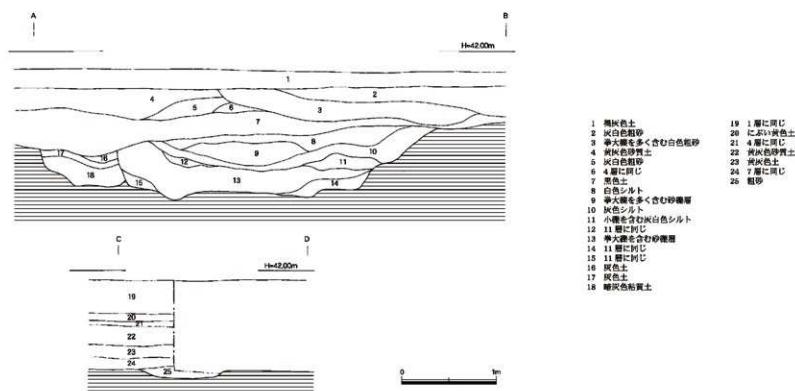
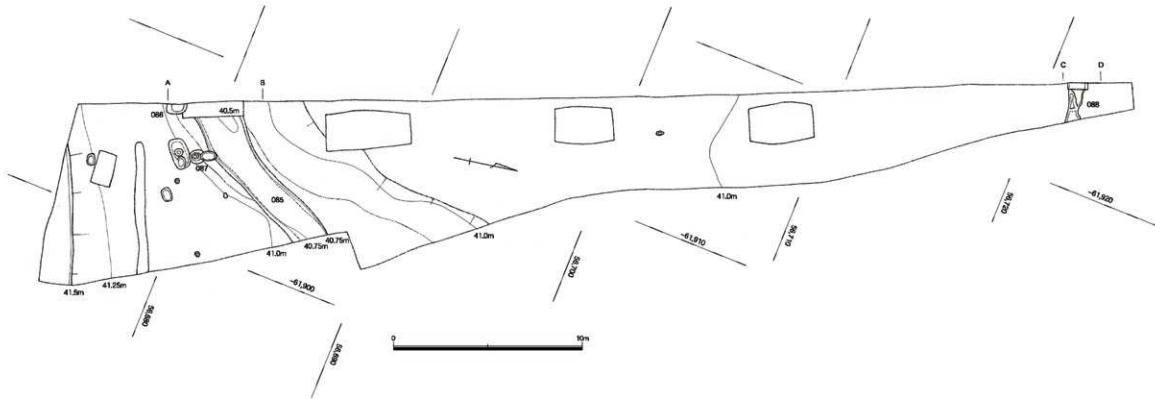
調査区南側で検出する。SK086同様、粘性の強い埋土で深さは30cm程度を測る。

出土遺物（第57図450） 一部を欠く器台である。摩滅は進行しておらず、内面ナデ、外面縦刷毛が認められる。

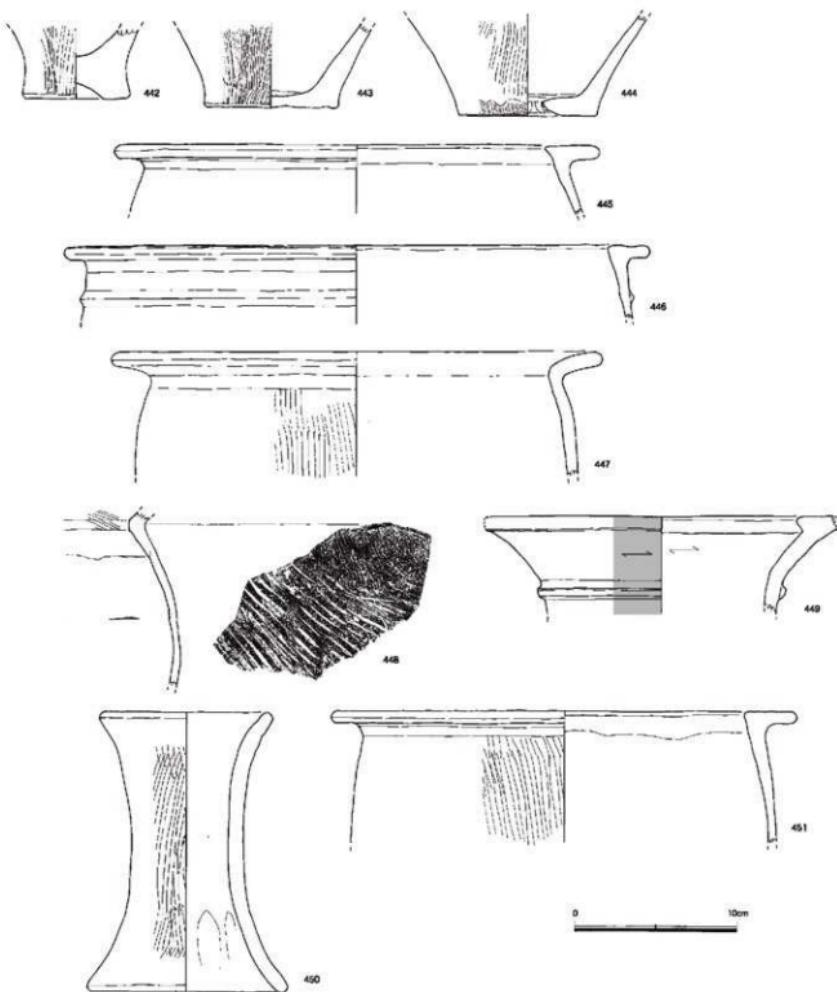
SD088（第56図）

調査区北端で検出する。幅80cm、深さ15cmを測り、断面は浅皿状を呈する。時期不詳である。

出土遺物（第57図451） 断面逆L字形を呈する甕口縁部である。外面縦刷毛を行う。



第56図 3区全体図及び土層図(1/200, 1/40)



第57図 3区出土遺物実測図(1/3)

5 7区の調査

1) 概要

この調査区は、松木田遺跡の南端に位置している。松木田遺跡の既存調査では、弥生時代、古墳時代遺構の調査とともに特筆されるのは、縄文時代早期の土器や石器がまとまって出土していることである。事前の試掘調査により当該期遺物の採集と安定面の存在が確認されており、遺構が遺存する可能性が想定されていた。その試掘データを基に今回の事業における掘削の計画レベルが、遺構の存在が想定される安定面に影響が及ぶと考えられる範囲を対象に発掘調査を行なうこととした。7月20日(火)から重機による表土剥ぎ作業を開始し、1,220m²の調査区を設定した。遺構検出作業、掘削、記録作業の後、縄文時代早期遺構の遺存を想定し、遺構検出面である黄褐色シルト層をトレンチ調査にて断割り、更に下層の状況を確認する作業を行ない、調査を終了した。

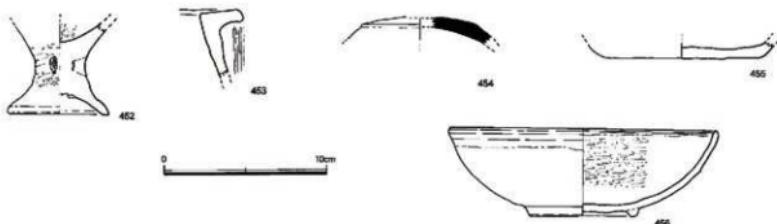
2) 基本層序

遺構の遺存が考えられる安定面である黄褐色シルト層までの基本層序は、30~40cmの現地表面の耕作土、床土の下層には20~30cmの灰褐色砂質土、20~30cmの暗茶褐色粘質土の弥生時代、古墳時代遺物を包含する層となり、遺構検出作業を行なった黄褐色シルト層となる。記録作業終了後、深さ約50cmのトレンチを調査区に対して東西方向に設定し掘削を行ったが、下位になるほど赤色が強くなり砂礫の割合が増える傾向がみられ、遺構や遺物包含層などは確認されなかった。

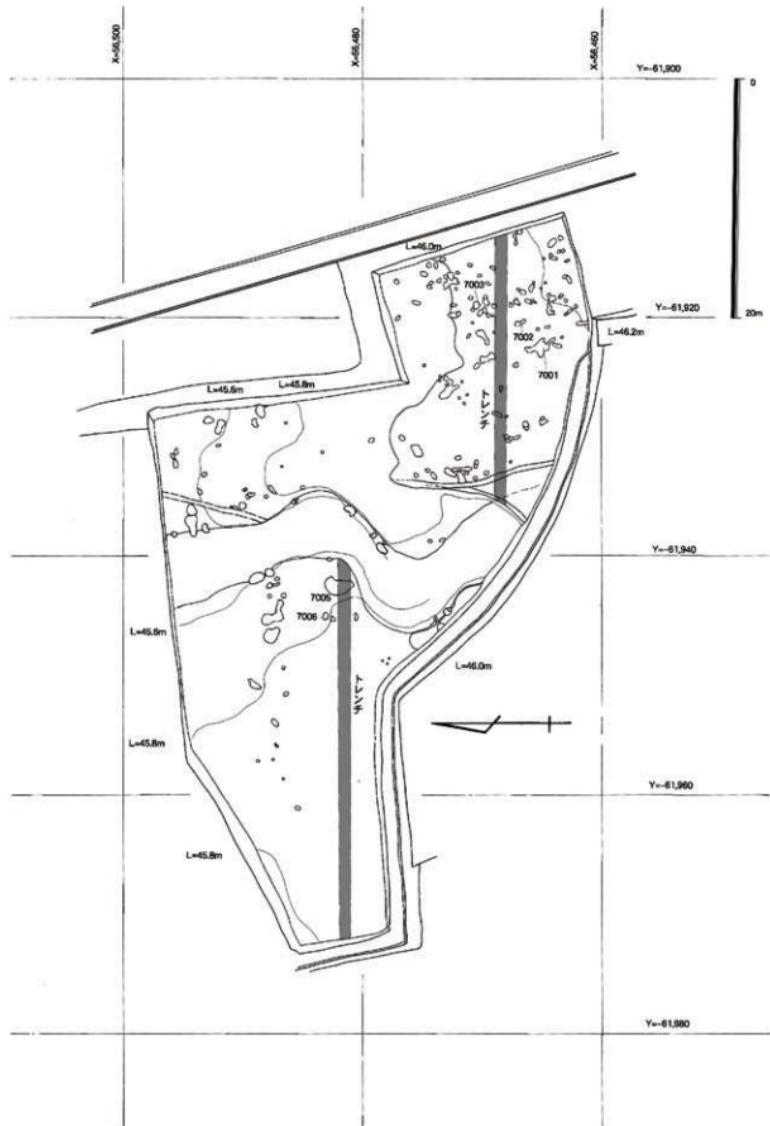
3) 遺構と遺物 (第58・59図、写真146~150)

調査区内の遺構精査作業により、調査区のほぼ中央を蛇行して北流する旧河道が確認された。この旧河道は、拳大の礫と粗砂を埋土としていた。出土遺物は無いが、検出面上層の灰褐色シルト層が河道肩部でもみられることから、早くとも古墳時代以降に埋没したものと考えられる。

検出遺構は、不定形を呈する窪み状のものを複数確認した。覆土は、上層の暗茶褐色粘質土と大きな差異はなく、壁面も波状を呈し、人為的な掘削によるものとは考えられない。掘削作業にあたり、遺物が出土したものには7001から番号を付与し、遺物の取り上げを行なった。番号取り上げの遺物は、どれも小破片土器のため同化し得なかった。7001から7004は調査区東側に位置している。7001からは、赤褐色の土器片1片が出土している。胎土はやや粗で石英、長石を少量含む。7002からも、赤褐色の土器片1片が出土している。胎土はやや密で石英、長石を少量含んでいる。7003からは2点の土器が出土している。うち1点の色調は鈍い黄褐色で、内外面に施文がみられるが磨滅が著しい。縄文時代遺物と考えられる。7004は調査時に石器剥片と思われるものが出土し取上げたが、洗浄後自然石と判明したため欠番とした。7005と7006は旧河道の西側岸に位置している。7005からは、赤褐色の土器片1片が出土している。胎土はやや粗で石英、長石を少量含む。内面に横方向のナデがみら



第58図 7区出土遺物実測図(1/3)



第59図 7区全体図(1/400)

れ、器壁の角度からも縄文時代遺物と考えられる。7006からは弥生時代の丹塗磨研土器の小破片が1点出土している。胎土は灰褐色を呈し、密である。丁寧な丹塗りと磨研がおこなわれているが器種は不明である。

出土遺物

図化した遺物は、黄褐色シルト層の上面に堆積する暗茶褐色粘質土から主に出土した。452は、縄文時代晚期の高杯脚破片である。脚裾径は6.0cm、クビレ部には両方向からの刺突が施されている。器面にはミガキ調整が行なわれている。453は弥生時代中期の甕口縁破片である。小破片のため復元口径は不明である。454は古墳時代後期の須恵器杯蓋の破片である。天井部の復元径は7cmである。455は古代に属すると考えられる土師器の杯ないしは皿の破片である。456も古代の瓦質楕である。口径16.5、器高5.3、高台径6.5cmである。

6 8区の調査

1) 概要

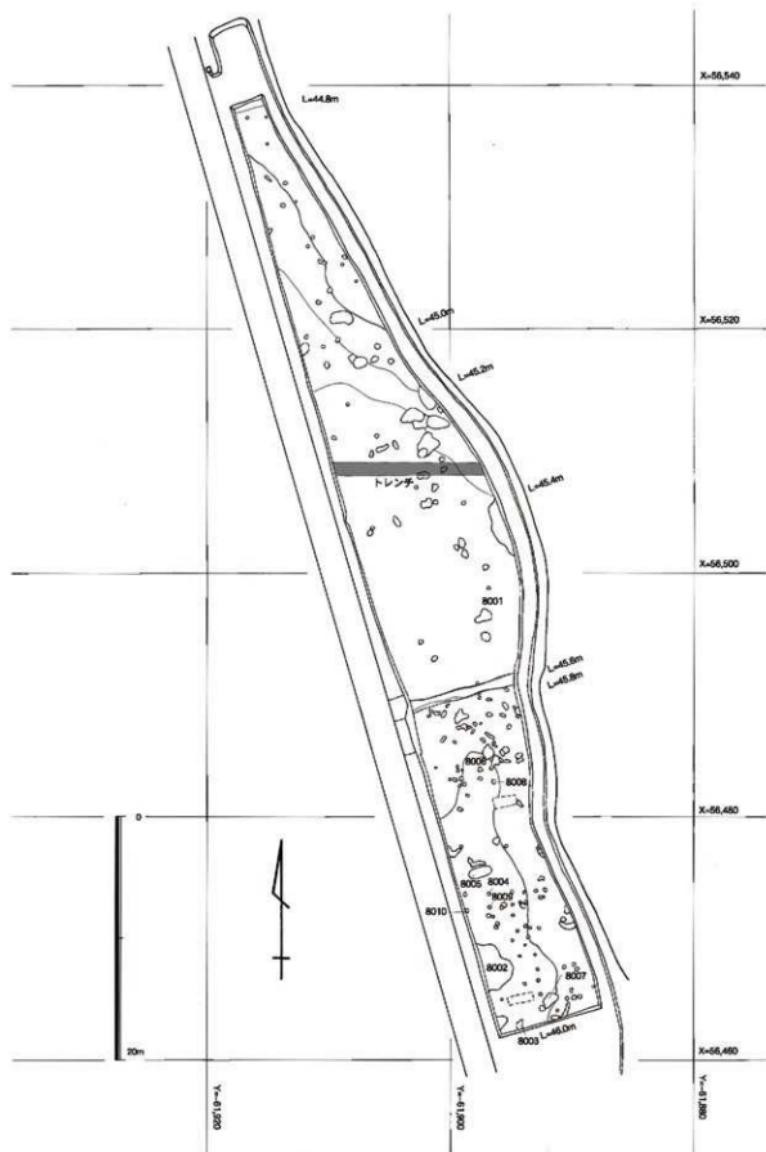
この調査区は、松木田遺跡の南端に位置し、7調査区から県道内野・次郎丸・弥生線を挟んだ東側にあたる。事前調査により4本の試掘トレンチが開けられており、当該期遺物の採集と安定面の存在が確認されており、遺構が遺存している可能性が想定されていた。今回の事業における掘削の計画レベルが、遺構の存在が想定される安定面に影響が及ぶと考えられる水田面2面を対象に発掘調査を行なうこととした。現況は水田で、稻の刈取りを待って9月6日（月）から重機による表土剥ぎ作業を開始した。排土置き場の都合から、北側と南側に排土を反転させて合わせて680m³の調査を行なった。7区と同様に、記録作業終了後、縄文時代遺構の残存を想定し、遺構検出面である黄褐色礫混じりシルト層をトレンチ調査にて断割り、更に下層の状況を確認する作業を行ない、調査を終了した。

2) 基本層序

遺構の遺存が考えられる安定面である黄褐色礫混じりシルト層までの基本層序は、南北では堆積の層さが異なるが、やや堆積の厚い場所で40~50cmの現地表面の耕作土と複数面の床土の下層は、10~15cmの黒褐色砂質土層、その下層には20~40cmの茶褐色粘質土層となり、遺構検出作業を行なった黄褐色シルト層となる。記録作業終了後、深さ約50cmのトレンチを調査区に設定し掘削を行なったが、下位になるほど礫の大きさが増大する傾向がみられ、遺構や遺物包含層などは確認されなかつた。

3) 遺構と遺物（第60図、写真151~155図）

検出遺構は、不定形を呈する窪み状のものを複数確認した。覆土は、上層の茶褐色粘質土と差異はなく、立ち上がりも緩やかで人為的な掘削によるものとは考えられない。掘削作業の際、小破片遺物が10穴から出土し、遺物が出土したものには8001から番号を付与し、遺物の取り上げを行なった。番号取り上げの遺物は、どれも小破片遺物のため図化し得なかった。8001は北側調査区に位置する。赤褐色を呈する土器片1片が出土している。磨滅しているが、その器形などから縄文土器とと考えられる。8002は、調査区南側の西端に位置する土坑状の遺構である。土師質の土器とともに貝殻条痕により器面調整する縄文土器も出土している。8003からは、縄文土器と思われる赤褐色土器の小破片が出土している。8004からは時期不明の精緻な胎土を有する灰褐色土器がみられ、8005からは口径の小さい土師小皿片が出土している。8006から8008までは縄文時代と考えられる赤褐色土器が1点ずつ出土しており、8009、8010からは土師質の土器片がそれぞれ出土している。



第60図 8区全体図 (1/400)

7 繩文時代草創期～早期の遺構と遺物

1区から出土した遺物は、3次調査とほぼ同様の撚糸文土器と石器群で、土器の文様構成や石鎧の形態もほとんど同じである。ただし、4次調査では3点の押型文土器が出土している。3次調査でも山形押型文土器が1点出土しているが、上からの掘り込みに伴ったものと解される。今回出土した押型文土器は3点ともやや異なった様相を示している。15の山形文は、やや異形の山形文で、器面は無い。16の横円文も横円の配置がやや異質である。17は横円文が整然と並んでおり、他の2点より焼成が良い。15は遺構面、16は包含層、17は上層からの掘り込みに伴ったものである。後述する元岡・桑原遺跡58次調査遺物と比較すると、15が古い様相、17が新しい様相を示しているようである。3次調査ではわからなかったが、撚糸文と最古式押型文土器が共存する可能性も考慮する必要がある。

2区から出土した土器は、ほとんど形の体を成しておらず、時期的な判断は出来ない。一方出土した石鎧のほとんどは、いわゆる二等辺三角形鎧で、大原D遺跡14区と同様の石鎧である。同様の石鎧は元岡・桑原遺跡群第3次調査8層以下でも出土しており、ともに条痕文土器・無文土器が出土し、さらに平底（上げ底）の底部が伴うことも共通している。

2区で出土した遺物は、直径4m前後、深さ35cmの大型土坑内から出土した。土坑内からは、前述の脆い土器細片しか出土しておらず、出土石鎧も二等辺三角形鎧がほとんどであることから考えると、草創期後半～早期初頭に位置づけられるものと考えて大過ない。この土坑については、大きさや平坦な床面等を考えれば、住居址の可能性も否定できない。丘陵下の緩斜面上の立地や、完全な円形を成さない形態も大原D14区の焼失家屋と類似している。しかし埋土の層位が不規則なこと、柱穴が見当たらないこと、炭化物が多くないことなどがこの土坑を住居址と認定することを躊躇させている。

この大型土坑の中の土はすべて水洗し、中からコンテナ2箱、重量にして784gの黒曜石・安山岩等の微細チップが出土した。これらは、土坑周辺で行われたであろう石器作りの結果、遺棄されたチップ群と思われる。特に64・74グリッド近くに集中が見られ、あるいはこの土坑廃棄後に、まとめて投棄した可能性も考えられる。その場合、土坑の時期と土坑廃棄後の時期の2時期の生活も考慮しなければならないが、今回はそこまでの詳細な分析にいたらなかった。

今回は出土した石鎧等の石器の多さから見ても、比較的長い期間（とは言っても1年を通してかどうかはわからないが）の居住を示しているとも考えられる。ただし、石斧・磨石・石皿がほぼ皆無に近い状況である。この3種の石器は長い居住を想定した場合、生活に必須の道具である。居住期間が長ければ、当然これらの道具が遺棄される確立は高くなる。この時期の海岸線近くの遺跡が現在は海の中にあることが、石器組成の研究を困難にしている。

現在調査中の元岡・桑原遺跡第58次調査では、押型文土器・撚糸文土器・刺突文土器・条痕文土器が層位的に出土しており、最上層では押型文土器が、最下層では条痕文土器が出土しているようである。また、今回2区で出土した二等辺三角形鎧と1区で出土した小型両脚鎧は、元岡・桑原58次でも出土しており、今後の整理で層位的な検討ができるかもしれない。

土器と石鎧の簡単な編年については、以前提示したことがある。概ねA二等辺三角形鎧→B小型両脚鎧→C石鎧の大型化（鎧形鎧の出現）、という変遷をたどるが、Aが概ね条痕文土器、Bが刺突文・撚糸文土器、Cが押型文土器に相当する。石鎧の形態変化と土器の編年が100%一致する訳ではないが、全体的な傾向は看取でき、前述の元岡・桑原遺跡第58次調査でも、ある程度層位的に確認できそうである。刺突文土器・撚糸文土器・古式押型文土器の前後関係あるいは平行関係については、元岡・桑原第58次調査の報告書が出た段階で整理ができるものと思われる。